

未知の波斯に關する風俗民情の奇なる施政交通の危き一々記し來らんに亦多少讀者の感興を惹かんか、而も予は是等の見聞に先ちて波斯における政治的現状と列國の關係に就て數篇を重ねてその一般を語らんと欲す、これ現時の波斯を知るにおいて必須の智識たればなり。

昨一九〇九年の夏季より秋季に亘れる波斯國內の憲政的革命運動の勝利は現下の波斯を知るにおいて最も必要な事件なり、即ち一部波斯人の覺醒も此より來り露國勢力の失墜も爰に近因し、現カウジャール王朝の基礎漸く動搖して南方バフチアール民族の漸く大を成すの傾向亦爰に現はれ、而して此間土獨米佛の勢力躍然として現はれ到る、父帝の創設したりし憲政を自ら廢棄して舊來の獨裁を擅にせんとし、圖らずも全國民衆の憤怒を招きて終に自ら廢位の悲運に會し、祖國放逐の客となりて今現に露國オデッサ市ゴーゴリ街二番地に一外國の亡命客たる波斯先帝マホメッド、アリミルザの運命は亦實に波斯そのもの、今後の運命の多岐多様なるを語る所以に非ずや。

當初革命は一九〇九年五月を以て波斯西北の重要市ダブツツに起れり、ダブツツ

ツツは露領高加索に近く露人從來の最大勢力地たり、乃ち在テヘランの露國當事者及び彼得堡政府は事を容易視し、露國の一小枝隊能く少時にして之を鎮壓し得べしと思惟せり、此時に當りてその西方近距離なるウルミヤより土耳其の現はれ出で、終始革命黨のため有力なる扶助を爲せるあり、而してその土國の背後に獨逸の在りたるは亦言ふまでもなし、既にして革命の熱烈なる氣焰は波斯の南部地方に覇を稱せるバフチアール人の間より起り、現波斯首相サベゲール氏之が巨魁として一躍軍を率ゐて首都に迫れり、而して露英孰れも其動亂に際して兵を波斯に入れたるに拘らず、依然として先見の明なく、徒に皇帝を扶けて革命軍の仆滅に任じたり、英國議會に於て外相グレー氏が屢々有力なる議員の質問に會ひて一も二もなく在波露國軍隊の行動を正當の措置なりと辯護したりしは實に此時なり、然りこの革命の趨勢に對しては露國は餘りに盲目にして英國は餘りに首鼠兩端なりき、南方の革命軍は疾風の勢を以て北進し月を閲する二ならざるに七月十三日革命の旗を曉風に翻して首都テヘランに入り先づ舊下院を占領して之に據り、難を露國公使館に避けたる皇帝に廢位を迫りて幼帝を立て、軍の首魁サベゲール



ル自から内閣を組織して憲政を宣布したり伯林の新聞紙が屢次露國の力終に波斯の改革的動亂を鎮壓するに足らずと嘲笑したりしは此間の事なり。斯て波斯現革命黨内閣は選舉法を改正し議會を召集し最も民望ある攝政を置き從來兎角高官に任せられざりしアルメニヤ人をすら警視總監に任命して昨秋以來今日に至るまで比較的善政を波斯一千萬民の上に布きつゝあり若しそれ波斯の現政府と地方の民心とが列強中の彼より此に推移し又推移しつゝある傾向に至りては更に一段の記述を加ふるを要す。

## 二 獨逸の活躍

從來英露二國が南北に相對峙して勢力範圍を劃し居たりし波斯に對して獨逸は實に昨年における波國內の革命的動亂を好踏臺として現はれ出でたり勿論小亞細亞地方に志を有する久しき獨逸は波斯においても亦久しく侵入の機を窺ひ居たり而して昨夏以來波國內の風雲は實にこの躍進的國民に好機を與へたり然り獨逸が首都テヘランに北西のウルミヤ地方に活躍し始めたるは眞に昨秋以來の

事に屬す。

昨夏波斯革命的動亂のウルミヤ地方に勃發するや土耳其の軍隊は直ちに境を越えてマラガ(ウルミヤ湖の東南)タブリツツの南を占領したり當時革命の氣焔は尙甚だ微弱にして露國當局及びその軍隊の如き主として皇室に加擔して革命運動を鎮壓するに努めたりし時なり而も土耳其軍隊の入國占領の敏活なる斷行と而して其公々然としてタブリツツ地方の革命軍に助力を與へたりし大膽なる行動は當時關係ある列強の膽を奪ひたりき而して何ぞ圖らん皆これ土耳其の背後に隠れたりし大傀儡師獨逸の操縦に出づるあらんとは。獨逸の先見と活動とは獨り之に止まらず南部地方革命軍の一躍して首都を陥れ再舉して皇帝を廢したりし時獨逸は早くも該革命黨新内閣と默契して伯林に於て軍事教育を受けたりし將校を首班とする二個の聯隊をテヘランに新設したり次で昨秋十月にはウルミヤ總督を動かしてウルミヤ湖航行の波斯汽船會社を組織せしめ獨逸商會シユネマンをしてその航業權の專有を計らしめたり而して本年に入りて愈々その航業權を確め得るやウルミヤ湖航業權問題なるもの近時漸



大陸言論界の注意を惹くに至りたり。その他テヘランに新獨逸銀行の興るあり。西北の大市タブリツツにおける獨逸貿易の激進せる、而して此機を利して獨逸一商人の獨力を以て同市に獨逸農具の展覽會を開設せんとする、皆一に獨逸の激動飛躍の狀を想見するに足る。特に最近巴里よりの電報によれば獨逸は波斯國內における學校教育上に新計畫を加へんとし莫大の經費を支出して自國經營の下に新教育機關の創設を決定したりといふ、要するに波斯における獨逸近時の活動は英露の舊勢力を打破し、佛國の施設を無効にして政治と通商とにおいて覇を波國に稱せんとするものなり。

恰も可、波斯における國際政治的一新紀元は正に今秋を以て劃定せられんとするなり。一八八九年の露波條約は露國をして波斯國內における鐵道敷設に對して一種の專有權を有せしめたり、即ち何國も露國の許諾なくして波斯境内に二條の鐵路だも敷設するの權利を有せざるの一事、これなり。次で一九〇〇年を以て英露兩國はその締盟協約において更に十ヶ年間を期して一切の鐵道を波國內に敷設するなきを相約したり、而して前露波間の協約は本年十月を以て後英露の協定は既

に本年三月を以て孰れもその効を失す。獨逸が侵入の好機は正にこの好時期に在り。バグダッド鐵道敷設權を夙に土廷より獲たる獨逸の愈々を波斯灣頭に及ぼし、更に百尺竿頭一步を進めて波斯の南西境に延長し得るの秋は、今正に開けたり。彼が昨夏以來巧に波國の動亂を利して勢力を波國新政府と地方人民との間に扶植するに力むる所以のもの、必ずしも智者を俟て後知らざるなり。

バグダッドが波斯灣に關係を有するの深甚なる言ふまでもなく、その線路の豫定通過地たるネジエフ、ゲルベラ等の地が靈地として波斯人の上に精神的聯鎖を有する、亦人の知る所なり。而して一旦バグダッドにまでその驥足を延ばせる獨逸が直に波斯の國境に延線してハネキン、ケルマンシャ、ハマダン等の各市を経て首都テヘランに到達せんと期すべきは必ずしも露佛人今日の杞憂とのみ見るべからず、事爰に至る波斯中腹の打撃は南北における英露の均勢を動搖せしめ、首都の民心を一新せしめて、波斯の南北及び中部に變革を持來さすんば已まざるべし。現下の波斯における國際的關係は正にこの初幕に居る予は、此時に際して親しく波國の首都を訪はんとするなり。



## 三 露國の勢力

露國の對波關係は既に一部の歴史を成す兩者幾度か和親し幾度か反目し之がためには久しく英と對峙し近く亦之と親善すテヘランにおける波斯哥薩克旅團が三十年間に亘りて露國陸軍の指導に依れるの一事は以て露國が波斯に對して焦心苦闘の一端を語るものにあらずや一九〇七年露英の相協約して波斯における勢力範圍を劃定するや露國政治家の對波政策は明に爰に二分して硬軟二派を生ずるに至れり然り該露英の協約なるものは或意味に於て露國の退讓なり若し吾人をして協商以來の事歴を公平に觀せしめば波斯における露國の行動は多く英國の使喉に盲從せるの感あり昨波國內の革命的動亂に際し露國送兵の議に關して彼得堡政府の躊躇逡巡するやノーヴオエウレミヤが外相イズヴォルスキを罵つて彼は露國に對するよりも多く英帝の政府に忠實なる臣なりと言へるは當時露國の對波斯硬論者の皆言はんと欲したる所を言ひ得たるものなるが如し吾人の見を以てすれば露國の波斯における有利なる位置は到底英國の比に非ず

三年前の兩國の勢力範圍劃定は一見波斯を南北に兩分して共に一樣の利益を願てるが如きも露國に屬すべき北部は之を英國の割せる南部に比して遙に重要な位置たり特に波斯皇帝盤據の地にして兼て波斯政府の所在地たる首都テヘランの露の勢力範圍たること及び波斯北部の要市タブソツツが高加索とその境を接し首都の東方メンヘツドの亦直に疆を露領中央亞細亞と相接するの一事は政治に通商に露國の有利なる特點なり而も近時彼得堡政府の對波政策は一に英國と握手し退讓盲從の跡歴々たるのみならず或使喉の下に表面上の活動者たる露國がその勢力をテヘランに於て失墜し露國諸般の施設が漸く波國民心の反拒を買はんとするに至りて露國內の對波硬論者は昨夏以來頻に強硬的斷行を政府に望みたりしもイズヴォルスキの着眼は却て別に存し彼は昨革命的動亂の際對波硬論派の首唱者たる前駐波公使ガルドウイグ氏をテヘランより召還して之に代ふるに前駐英大使館參事官にして寧ろ英國心醉家たるボクレンスキー、コツゼル氏を以てしたり爾來露國の對波政策が一に英國と同步調たらんと努むるの跡あるは寧ろ自然の結果たり



かくして露國における對波硬論派は全然失敗に歸せると同時に英露の結托は或意味において兩國の互讓を表し來りて米國先づ振ひ獨逸亦之に乗じて侵し到る。知らずイズウオルスキは果して何の見る所ありやを彼今獨逸に悠遊し隻眼巴爾幹の風雲を想望して劃策に苦慮するもの、如く最近彼が外相の椅子を次官に委して自から英國大使たらんとすと傳へらるゝもの、彼果して幾何の計策を有するや、波斯における前記二要協約期の結了せんとする今年の外交季節は孰れにしても露國の對波政策に一開展を要すべきの時、吾人は裏海南部の一平原に是等列強の無言の活劇を見るの近きにあるを快事とす。

されど數十年來養ひ來りたる露國の勢力は必しも遽に輕侮すべきに非ず、北西の境タブリツツは露領高加索なるチフリヌ市より街道をテヘランに通じ、一朝有事の日は直ちに之に鐵路を敷き得べき好良なる路盤を有す、更に南部裏海沿岸のエンゼリ港よりテヘランに到る露國經營の道路は馬背僅に二日行程に過ぎず、而してこの二街道は共に昨年革命の際英國と協議の結果波斯への送兵において高加索地方の露國陸軍が哥薩克騎兵砲車の一旅團を送遣してその通路の好軍道たる

を證明し得たりし所たり、特に高加索に隣するアゼルベイジャン州は波斯第一の豊饒地にして兼て商工業の旺盛を以て名あるの地、波斯皇室の舊慣例として波斯の皇嗣が必ず同州の總督たるべき定例の如き亦以て該地方が首都に亞ぎて重要な土地たるを知るべし、而して之が咽喉を扼するものは實に露國たり、露國の位置及び勢力の波斯の政治と通商上において重大なる尙、此の如きものあり。

#### 四 在露波斯公使との會見

今回予が波斯の遊は元中央亞細亞橫斷旅行上の副産的動作に過ぎず、隨て予は日本人の一人として波斯に入るとの甚だ容易なるべきを豫想したるに事實は稍豫想に反して入波の前後少からず煩雜なる手数を要したり、八月廿五日西歐より露都に着したりし予は直に我本野大使を煩はして露國外務省を經由し同參謀本部に予が中央亞細亞旅行の公式許可を申請せると同時に落合參事官の周到なる忠告に因りて一面在彼得堡波斯公使に向て予が波斯巡遊に關して諸般の便宜を與へられんとの依頼を齎したるに兩三日後波斯公使アリゴリカン氏は予に向て



會見を申込み來れり予は東邦の一介書生が裏海南岸の邦土に旬日の周遊を試みるに甚だ無造作なるべきを想ひ且は外邦に使せる波斯官吏を見るに珍事なる乃ち幾分の興味を以てアリゴリカン公使を其公館に訪ひたり公使は予を其事務室に招じて對面の劈頭第一佛語を以て語るべしと言ふ予は露語の予に便利なるを告ぐるや公使は稍冷笑的態度を以て露語に改め且いへらくテヘランに在ては佛語に通せざる貴下は少からざる不便を感せらるべし我首都の紳士間にては露語は甚だ稀に語らると一語彼が歐化せる高襟黨の一人たるを知れると同時にテヘランの所謂波斯當代の有識者なるものゝ一般の傾向は此瞬間に於て予が腦底に映じたり。

土耳其人に佛人を混じたる如き面貌のアリゴリカン公使は兎も角も予が波斯行を賞揚し彼は十一二年前波斯外務省の一員たりし際日本の一大佐の來遊をテヘランに迎へて其接待に任じたりし以外日本人の入波は予の記憶せざる所なりと語りて日本新聞記者の現下の波斯に入りて其新政を視察し廣く波斯の真相を貴邦人に傳へらるゝは波斯の爲に幸福なりなど幼稚なる外交的辭令を予に浴せか

たり彼は予の旅券を請求して數日以内に入國の裏書を了すべしといひ且日本大使館よりの依頼もあれば予は貴下の爲に沿道の諸官憲に宛て旅行上の相當なる便宜に關する依頼狀を認め置くべしとて相當の好意を予に表せり而して數日後二通の書類を受領すべく同館に到れるの予は之がために三留の代價を拂ひたり目下波斯北西部の小動亂隊賊の横行、日毎に露國諸新聞の電報欄に現はるゝの波斯北境の一港灣より首都テヘランに馬背若くは馬車の旅行を爲すの甚だ危険なるを予に告ぐるもの少からざるより如何なる街道の最も安全にして如何なる方法の最も便利なるやを波公使に問へるに彼は各大街道の危険ならざるを絶對に保證し、バクより裏海南岸のエンゼリ港に向け郵便船に由り更にエンゼリテヘラン街道に馬車を驅るを最も便路とすといふ波斯の北境における隊賊の出没横行に對する絶對的否定保證を露都における一吏員の口頭より得るとはハレ一彗星衝突の際における生命保險と同一様なれど遇ふ人毎に波斯旅行の危険を予に告ぐるの際亦尠からぬ安慰を予が前程に與へぬ予は乃ちエンゼリテヘラン街道に由るべく決心したり。



波斯文字が如何に奇態變狀なるかは少からぬ興味なり、梵字に似ず、蒙古滿洲字に類せず、右より左に横形を作り、更に上に幾層を重ねるの點一種の特色なり。予は波斯巡遊後波斯公使の手に與へたる沿道諸官憲への依頼狀の其用役を了るの後、特に之を郵送し紙上に掲げて波斯文字の態形を讀者の前に披露せんと欲す。

### 五 裏海沿岸の秋

露國の外務省が如何に巴爾幹に多事なればとて、露國の參謀本部が如何に獨逸に對するワルシャワ地方の兵備に苦慮すればとて、中央亞細亞旅行に關する一片の許可は實に三週間の長時日を要したり、僅か旬日を波斯に、十數日の中亞に費さんがために要もなきネヅア河畔に、その無數の鐘聲と共に空しく二十一日の朝夕を送れると旅中の手に取りては絶大の苦痛なりき、如何なれば裏海沿岸の境土がかくも外人のために堅く鎖されて、昔に聞く鎖國攘夷の事實を今の親善なるべき列強關係の上に見んとはする、不可思議なこともかな。

廿一日の空費は予が旅程の上に少からぬ違算を來したり、予は之がために旅行許

可を得るの翌直に露都を辭し莫斯科に三泊の後裏海西岸のバクーに直行すべく急がり露都バークの間その道程正に三千露里、直行して尙ほ三晝夜半を要す、露都にては既に冬の季節に入りて大劇場の開場を見、莫斯科にてはクレムリン城外の林樹早く霜に黄みて秋を告ぐるに、黒海と裏海の水を隔つる高加索一帶の山野には夏の尙多く残りて朝夕の冷風に僅に秋の近きを知るのみ、予と列車内の座席を相對したる露國籍のアルメニヤ人がザーの領土のさしも廣大にして際邊なきを誇りたるも所以ありとすべし。

莫斯科を出て、第二日の夜ロストフ市にドン河を横ぎり、第三日の朝早く車窓に高加索山脈の蜿蜒たるを見る、ドンといひ高加索といひ共に其歴史的武名を以て露國の他地方に冠たるもの所謂ドン哥薩克は各地哥薩克の初源にして全族を擧げて世族的に軍職に就くの制なり、高加索の山水は多く美人を産するを以て名あり、其山嶽の峻險は自然の必要より全族の男女を擧げて好騎士の名を高からしむ、ドン哥薩克がその軍服袴衣の幅廣き紅黄色の線に長脚を張りて仁王立せる武者振と高加索の夫妻が胸間に藥劍と短劍とを挿める一對の服装に白羊毛の深帽を



被りて一對の駿馬に閑駈をやるの風情とは共に此地方における地理と歴史との好産物なり。

流石にバルチック沿岸の風物と裏海附近の觸目とは自から差異を有す。首都附近の大露西亞人を主とするに反し、高加索地方は既に一面中央亞細亞、一面小亞細亞地方民族の集合なり。高加索の土語アルメニヤ語は露語よりも普通に用ゐられ、韃靼字、波斯語の日刊新聞この地方に刊行せらる。若しそれバクラーの市に入らんか露民の奉ずる希臘正教の寺院は殆んどその存在を見ずして、拜火教の舊寺院、波斯人の寺堂、大小到る處に相錯ゆ。特にバクラーの城廓が市を圍みて、黃褐色の高土壁外に羊群の悠遊し、その土砂丘を爲すの邊路駝の三五相横はるの状を目撃しては、假令名は露帝の領土とはいへ、實において昔時裏海沿岸、高加索嶺下の土民族が水草を逐ふて相到りたる當時の風情と甚だ多く其趣を變へざるを想ふ。

バクラーの石油天下その名を知らざるもの稀而して、其石油の輸送管が東裏海岸のバクラーより西、黒海岸のバツームにまで一直線に延長しある大規模の經營を知るもの亦稀なり。露西亞人が能く數十種の異民族を統領し併合するもの一に這の大

規模式の精神に基く會て新潟の石油を東京に輸送すべく鐵管延長の説に驚きたりし我邦人は尙學ぶべき或點を露人の上に有することを忘るべからず。

## 六 裏海々上の人(上)

九月二十日裏海沿岸のバクラーに着したるの予は三千露里を殆んど直行したる疲れたる體をホテル、エウローパの一室に休めんとするに先だちて予のためには容易ならぬ一報をホテルの支配人より聞き得たり。そは現時露國より波斯に至る旅客はレンコーラン港(最初の寄港地)にて五日、エンゼリ港にて五日、都合十日間檢疫逗留を命ぜらるべしとの一事なり。如何なる旅客に取りても十日の日子を空費するは殆んど耐へ難き苦痛なるに、特に三週日を彼得堡に徒過したりし予が露國の衛生不備より生じたる虎列刺病の犠牲と爲りて再び十日間を裏海畔の港頭に空過せんと餘りに不條理至極なれば、予は旅裝を解くに隙あらずして直に馬車を在バクラーの波斯領事館に驅れり。

予は波斯領事館に到り、支關番に露語の名刺を出して領事に面會を求めたるに暫



時にして金線の肩章ある制服の髡男出て来りて極めて鄭重に予を奥に誘導せり。その最初の室は領事館の事務室なるべく黒髡長驅の波斯人二十名ほどもありて書記君らしき人の卓を包圍し高聲に語り居たるが予が制服君に導かれて此室に入るや彼等の視線は此黒髡短驅なる珍客の上に注がれぬ。予は此瞬間において確かに肩を聳かして澗歩したりしが如く覺ゆ。領事室と波露兩様の文字にて記されたる一室に入れば正面に大卓子を裾る領事之に凭る。前面には三人の壯者ありて土下坐し平伏す其狀何事をか申請し何事をか尋問せらるゝものに似たり。予の入るや制服男は倉皇土下坐の三子者を戶外に追出して領事の正面に予を坐せしめたり。挨拶を了りて領事を見るに貌容甚だ日本人に似たり。予は劈頭十日間の検査滞在の事實なるや否やを問へるに正に事實なりとの答に予は彼得堡より直行し尙此地にも僅に一泊するに過ぎざれば之に關する領事の證明を得て波斯の港口における検査上特別な取扱に與らんとの希望を縷陳したるに、彼は案外無造作に其旨を諒し、實効のほどを保證し難けれど兩港の検査官宛にて検査後直に出發許可の旨を手紙に認むべしとて領事館の用箋に例の波斯文字の數行を列べ初め

たり。

領事名はミルガサン、ハン、アガザードと云ひ名刺には波露靴紐及びアルメニア文字を以て四通の氏名を記し、波斯帝國領事と銘を打てり。假令實効の保證なき文書たるも時に之なきに優り、之に臨機應變の頓智を加味するにおいては波斯の検査官一二人を瞞着するとの必ずしも望なきにあらざるを想ひ、予は領事手書の一通を領し禮を述べて辭し去れり。

予は領事との談話中に於いて予が日本人たる一事實が如何に彼等の尊敬と親善とを喚起せるかを推知するに充分なりき。入波後における予は恐らく到る處に個人的の波斯人の歓迎を受くべしと想像したり。パグーに一泊の翌夕、萬一僥倖すべき希望を持してエンゼリ行郵便船の一等室に客と爲れり。知らず波斯の港灣は無情にも予を裏海沿岸の配流の客に擬して予に十日の停足を命ずるや否や。

## 七 裏海々上の人々



露國の旅券制度は予を煩すと多大なりき波斯や北に境を高加索と接し、裏海の水を隔て、露領と相鄰するも兎も角も外國なり、露國の旅券制度は足一度外國に出づるに當つては縣知事所在の市において煩雜なる出國許可の手續を内外人一般に義務付く。予はバクーの港を辭して裏海の郵便船に上るの日午後を以て同市露國官憲に就て出國許可の手續を了し、その夕埠頭繫泊の郵便船に客となれり。在露都波斯公使の語に秋季の裏海は風浪最も狂荒の季節なりと聽きしに、此夕北西の風漸く強く七八百噸の郵便船は繫泊のまゝ早く少からぬ動搖を呈す。拔錨以前船のキャビンに到り見れば既に四五の人あり、この海上この船中に殆んど稀に見る珍客日本人の入來として衆の視線は予の上に注がれぬ。予も亦一隅に座を占めて彼等を視廻すに遽に合點の行かぬ人のみなり。内に一人の女性すらあり、最も熱心に予の舉動を見る。頭髮の黒くして縮れたる皮膚の必しも白からざる。眼采一種の險を帯びたる猶太人の如くにして、而も曲りたる鼻を有せず。暫時にして彼女は予に向て第一問を放てり、足下或は日本人には非ずや、否か語る所流暢なる露語なり。予が其然るを告ぐるや、傍に一卓を圍める四人の青年は急に予を顧みて

何事をか語る、乃ち視線を彼等の上に轉ずるに、一見外形的、高襟者流の徒、濠洲はすして波斯青年の西歐に留學して徒に其末端と形式とを學び、歐洲心醉者と爲り、して今正に歸國の途上に在るを知る更に長卓の一端に茶を呼びて、想念に耽るの壯者多けれど、露人の風采に非ず、鑑定上子に取りて亦困難なるもの、一たり。女性は露國籍のアルメニヤ人なり、自から瑞西に出で、醫を學びたりといふ。本郵便船勤務の女醫たり、初めて日本人を見たりといひ、アルメニヤ人間に近時日本人研究の盛んに行はれ、孰れも熱心なる日本人の崇拜家たるを予に語りて、問答少時の後、手帖を出して予に日本初歩の文字十數を記せよと求む。この間長卓端の瞑想君も亦談敵に加はりて、頻りに獨逸語を以てアルメニヤの女醫君と日本談を圖はす。彼は獨逸の一商人にして、今テヘランへ急行せんとするもの、後予より波斯諸港の檢疫滞在十日を要するを聞き得て、至大の驚愕と當惑とを連呼したる男なり。予は裏海々上郵便船内の乗合者の光景を畫くに當りて、予が最初に見たる波斯青年の上に已むなくも一罵を加へざるを得ず。彼等は先づ予に佛語を以て相語らんと挑み、露語の文明士人の間に多く齒せられざるを暗示す。言説態度共に嘔吐を催



すもの、獲服然たる薄地のセル服に赤革の靴、赤革の脚絆を付けたる、蓋しテヘラン貴公子巴里に數年の夜學を終へたるもの、波斯の小國を愈々小國とし波斯國を益益弱國たらしむるもの、皆この流徒輩の罪のみ。

### 八 検査の難關

裏海の海上は果して浪荒かりき、一二等客も三等客も上下の甲板終宵號叫を聞かざりし露人波人共に多く平原民族として船暈を感ずること特に強激なるにも因るべし、クルー抜錨後十九時間にして第二日の午後四時我船既にレンコラン港に望む、乃ち検査の難關は今正に予が眼前に迫れり。高加索の南に盡くる處、裏海の南端に近からんとする處、レンコラン港あり、波斯北西部の一港として裏海郵便船の寄港地たり、我等の船は今正に同港口の一角に停船す、検査官の來船を待たんが爲なり、甲板に立ちて陸を望むに、赫土赫邱の寂しく横はりて、亦一樹木を見ず、埠頭人群の見るべきなく、陸上屋舎の相聯なるなし、一言にして之を盡さば、眞個一小國の一小港のみ、検査といひ停船といふ實は兒戲に近

し、隣境の大國露西亞が交通上の大不便を忍んで此小國をして意の如く其兒戲的動作を擅にせしむるに見るも、波斯における露國の威望が亦昔日の如くならざるを證し得て餘あり。

一小汽艇は港内より來れり、検査船と想ひたるに、然らず、只二三の官吏之に乗組み、而て我汽船の乗客を悉皆汽艇に移し、後陸地の或方面に上陸せしめて例の如く五日の滯留を命ずべきなり、といふ、予は今や抗議の時機到れりとして、官吏中の一人を船のサルンに請座し、在露都波斯公使よりの證明書、バック、波斯領事の紹介状および我本野大使より在テヘラン露國公使に當てたる封書を彼の前に展きて、恰も公人の急務を以てテヘランへ急行を要するが如く、装ひ且露都より直行して南露の傳染病地方へ立寄りしを語り、以て検査停足を予の上免じて、我汽船と共にエンゼリ港へ進航を許されんことを求むるや、金色肩章の彼は案の如く舉動と用語において著しく敬意を表し始めぬ、シカも言ふや、ソガ取計は一に陸上なる我所屬上官の意のみ今は免も角、衆客同様小艇に移りて一旦上陸を乞ふの外なし、と亦毫も他に方案の施すべきなし。



予はかゝる時もあらんかと日本を出づる時より窃に靴底に潜め來りたる勳六等旭日章を手早くもピンを以てモーニングコート胸にかけたり拜受以來一回も用ゐたることなき勳章をかゝる土地にてかゝる服裝の上に着けたること餘りに滑稽に類すれど由來役人と高襟者流に對しては多少の容儀を須要あれ況して小國の小吏に對して言説は無用なり前述三通の半公文と旭日章の光輝とは五日の停足特免を得るに充分なるべしと信じて予は歩武儀容を成るべく官吏的に倣ひてかの小艇に移れり。

約半時間の後小艇の陸に着するや先頭の上陸者は勿論予なりき先刻對談したりし官吏は衆客の處分を他の吏員に委し置き自ら予を先導して背後の丘に近き一洋館に急げり途は初に砂多く海岸より遠ざかるに従ひて一帶の赭土なり館に着すれば門衛あり玄關番あり孰れも六尺有餘の有髯兒皆眼を張て異容の珍客を迎ふるに似たり懸て招せられて一室に到る乃ち予の入るや金線金章の四十男長軀を大卓の後に起す燈火既に卓上に在り

九 エンゼリ港

彼れ檢疫所長も亦佛語を以て口を開けり予が佛蘭西語の無智識は波斯人に對して器量を下げたること前後幾回なるを知らず而も予は此場合最早言説に重を置かず再び一束の書類を彼の前に列べて勳章の胸を突出したり彼は波斯公使の手書を一覽したるの後予に向て旅券を一覽したしといふ予はその意外なるに不思議の感を得しとれど求めらるゝ儘に旅券を差出せるに彼は手に取りて露國內における經過地方の裏書を検査し始めその莫斯科以來南部地方に滞在せざりし事實を諒して至極簡單に檢疫停足の必要を見ざれば今より歸船せらるべしと予に告げたり予は心中多大の喜を感じたれど遽に之を現はさず單に其厚意を謝して其旨を認めたる書面を得んことを求むるや彼は其何の必要たるべきやを予に問ふ予曰く第二の港エンゼリあり當港の先例を以て之を再せんことを希望するに因ると彼之に應せずしていふ予は單に當港における檢疫免除を行ふの權利を有するのみエンゼリ港のために先例たるも欲せずと予は稍々外交談判の拙なりし







國土百六十年四萬五千方基羅の廣境域を占むる波斯は全國を擧げて現下實に延長六哩の鐵道を有するにすぎず隨つて各方面における街道なるものは此國において極めて重要な意義を有す就中首都テヘランに通ずる北境の三街道は現在と將來とに亘りて最も必要な交通路たり

予は今該三街道の二たるエンゼリテヘラン街道を通過するに際して聊か北境三街道に關して説明を加へざるべからず即ち

- (一) アネリフ(高加索に地を接す)よりタウリツ、カヅウインを経てテヘランに達するもの 七三〇露里
- (二) エンゼリ港よりレントカヅウインを経てテヘランに達するもの 三二六露里
- (三) 露領中央亞細亞アヌハムツドよりメムエツドを経てテヘランに達するもの 約一〇〇〇露里

これなりこの三者は孰れも露國が對波斯政策の必要上より過去半世紀に亘りて畫策經營を加へ來りたる處なるが故に波斯國內の街道として最も完備を極めたるものにしてその第一の如きは現に鐵道敷設の地盤すら夙に完成しありて一朝有事の日は直に軌鐵を敷設するに適すされどこの第一街道は單に露國關係の上においてのみ重要たるに非ず波斯の政治的舊慣例として波斯の皇太子は是非と

も北西地方たるアデルベイシヤン州に知事たるが如く第一街道の通過地方たる同州は波國內第一の富源地方として政治上經濟上に首都テヘランと至大なる關係を有す該街道の要路たるこれが爲なり近時土耳其が頻りにウルミヤ地方より現はれ到るあるは一に此政治經濟上重要な地方を襲はんとするなりウルミヤ湖の東岸は即ちアデルベイシヤン州の土國との接壤地たり

一九〇七年英露の波斯に對する協商前に在ては露國の警戒は言ふまでもなく英國なりき隨て其有事の動員關係上よりして海岸より首都に最も短距離なるエンゼリテヘラン街道即ち前述第二街道を以て最重要視したり而も英露協商後における露國の立場は毎に對土耳其との關係ありウルミヤの背後が直に土耳其の領土と接壤し更に他日獨逸の勢力がバグダッドよりハマダンに及ばん時高加索より境をデユリフアに接して一直線に首都に達すべき第一街道の重要な亦多く説くの要なし昨夏波斯の革命動亂に際して英國と協議の結果露國の動兵するや露國の歩騎砲兵が第二第三の街道に由りて出兵輸送せられたるに見るも兩街道の要路たるを知るべし之に反して第三アヌハムツド、メシエツド街道は英露の協



和せる今日に在ては單に回教上の舊都メシエツドに到るべき巡禮路たり、一面中  
央亞細亞と波斯北部間の貿易路たるに過ぎず、加ふるにメシエツド首都間馬車に  
て優に七日を要するにおいて決して首都に通すべき捷路とすべきに非ず、  
北方の三大街道に對して波斯灣に達すべき南方の三大街道をも爰に附記しおく  
べし、即ち

- (一) テヘラン、イスファハン、シラズ、ブーシェフル、一四九〇哩
- (二) テヘラン、イスファハン、シラズ、アバフ、一五三〇哩
- (三) テヘラン、カシヤン、イェズド、キマン、チャフバル、一六三五哩

而して此三線は近時に至るまで獨り英國の爲めに有力にして重要な街路たり  
しも、今やこの三街道の上に鋭き視線と希望を寄せ初めたるもの英國以外更に一  
國を加へ來れり、米國即ち是れ。

一 一 一 テヘラン街道(上)

露都出發の以前會ふ毎の邦人露人皆予が波斯行を危険なりとして或は伴侶を求

むべしといひ或は武器を携ふべしと勸む、これ一は現下北部の兩地に小紛亂あり、  
隊商の襲撃掠奪を受くるもの類をたるに因るなり、トウエウレ、トミヤ主筆の如  
きは予に向つて足下の波斯行足下自身に取りて果して何の益する處ぞ、萬一隊賊  
の爲めに兇刃に斃るゝが如きある痛恨此の如きはあらずと、予曰く日本の諺に「川  
好きは川で果つる」といへば旅行好の予が旅行中に果つるも何程の憾かあるべき  
と、要するに波斯の地方旅行が一般に危険視せらるゝ概ね此類なり、而も身親し  
くテヘラン街道に驛次馬車の客となりて途中の安宿に一泊したるの予は波斯の  
社會的秩序が世間の噂と個々の想像とよりも遙に好良なるを認め得たり、  
レント滞在の客なりとして検査を免れたる予は翌二日を已むなく同地に滞在し  
其夜宿の番頭に三留の心注をなして予が出發後尙四日間表面上滞在の風を装は  
しめ其夜出發に關する萬端の準備を整へおき翌廿五日早朝レント市を出發せり、  
在彼得堡なる波斯公使の話にはレントよりテヘランへは既に營業自動車の開通  
せるあれば之に由るの最便利なるべしとの言なりしに例の旅行危険説同様これ  
亦一の噂たるに過ぎずして予は今露國式の二頭立馬車に由りレントの車站を



出でたり而も露都にての群議は馬車なるも旅程全二日を越えずとのとなりしも現に車站に就いて聞けば三日半を要し途中に三泊を要すとのとなり市を離るるの時刻暇早く我馬車を射て予をして午下の烈日を想像せしむるも而も此裏海南岸の國王に朝風に鞭聲を聞くの予は終に快感を禁じ得ざりき。この地方は露貨自由に通用す予を驚かしたるは馬車賃の高價なるとなり二日の馬車賃二十留即ちレントテヘラン間七十留を以て規定の賃金なりといふ予は予の外國人なるに法外なる價を言ふなりと思ひて賃金表の一覽を求むれば線香煙花然たる波斯文字の行列に呆然自失す亦これ旅中の一興たり。波斯の小村落は宛然滿洲の小村落なりテヘレン街道の車站は滿洲北部小村落の商人宿を知るものゝ容易に想像し得る所なりその土壁を圍らせるその陋屋の扉内に擠げられたる予は幾度か日露戦前の齊を哈爾阿什城の遊を憶ひ出でたりこの日午前二驛に馬を代ふる二回午後二驛に馬を代ふると三度日中八十五六度に達したる暑氣は五時を過ぐるの頃より頓に冷却して點燈後の馬車の上は六十度にも及びたらん如く感ずるに予は取敢ず雨衣のカツバを被れり六時を過ぐる頃

一車站に着して一泊に決す。

一一一 テヘラン街道(中)

裏海の沿岸は南といはず東といはず養蠶業の極めて盛なるを豫て聞き居たりしにレントより首都に通ずるテヘラン街道一日行程の邊には桑畑相連りて際涯なき場所多し現に此附近の蠶業は波斯の産業中首要なるものに屬しエンゼリ港より輸出せらるる繭は一ヶ年四萬布度を越え某佛國の商會の如き一手に年々二萬五千布度の繭を自國に輸出しつゝあり而して桑樹林以外菜園米田および烟草畑相連り更に山地に近き處には各種の良樹鬱然林を爲し松杉の類に至りては往々にして巨木老幹を見る而も此附近土地肥えて森林に富み水利亦備はるに拘らず丘陵に平野に多くは荒蕪に任せて鋤跡の跡を見ざる處ある所以のものは主として人口の不足に原因するが如し而して此地方人口の不足は外國出稼者の過多なるに原因し外國出稼者の年毎に激增を見るは官吏および會長の請求に原因す現にレント港經由の外國(主として露國への)出稼者に對する旅券の交付數は一ヶ年



優に二十萬人に上り、露領バクー港の如き現に波斯人の在留者七萬を算ふ。吾等の馬車は各大驛站到馬を代へて急驅すると郵便馬車同様なれば波斯の旅行としては甚だ贅澤なる旅行なり、馬車屋の話によれば斯る旅行は露西亞の士官若くは在露波斯官吏等のテヘラン往復において見るのみなりといふ。然り吾等の馬車は此の日優に八十露里(約我二十里)を進みたるが如し、今夕我馬車の止宿せんとする車站はレントの南方約十九里なるメンデリ市南方約一里の驛站なり。メンデリはテヘラン街道上第二位の繁華なる部落なり、セフキド、ル、ド河(白河)の意の河岸に立つ、白河は遠く源をウルミヤ湖東のセヘンド山より發し東南流して裏海に注ぐの大河なり、名は白河といふも濁流にして、水勢の甚だ急なる大河として斯の如きは稀なり、白河架する處歐風の石壘鐵橋あり、數年前の架橋なるに似たり、土人の言によれば舊來の橋は大規模の石橋にして、波斯固有の型式に成り穹窿形の橋臺頗る見るべきものありしといふ、メンデリには土壁に圍まれたる土屋の八十戸もあらんか、通路二三條、小川の通路に沿ふて流るゝもの自然の溝渠を爲し、村民の出で、こゝに物洗ふを見る、不潔なる限なり、蓋し波斯人一般に衛生の何た

るを解せず、裸足の兒等が溝に汚水を飲むとの稀ならざる予の屢々目撃したる所、コランの經典によれば回教民は一日三回身を清むべしといふに、今の波斯人間には此事真に形式に流れ、彼等は二滴の汚水を指頭に浸して體を塵し却て垢汚を増すの觀あり。

### 一三三 テヘラン街道(下)

メンデリの強風は地理學上有名なるものなり、或一定の季節を限り毎日正午より烈風の吹き初め翌朝六時に止むを常とす、メンデリ河架橋工事當時の如き工事は常に朝六時より正午までを限れりといふ、駱駝、驢等の荷を負ふて行くもの途上この風に遇ふや往々にして載貨を飛ばし終に倒死するに至るものありといふ、森林帯はメンデリ附近にて漸く盡き、これより以南多くは平野を見る。予は今爰に東站宿舍の模様を少しく記さるべからず、荒壁造の矮屋は恰も滿洲邊の民家に似たり、中二階然たる處に壁にて仕切りたる小室の左右に列べるは歐洲風なり、室内には一脚の卓と二個の椅子を備へ、卓上には永久に磨かれたるとな



露西亞流の湯沸すら振付けらる。されど若し純波斯風を用ひば土間の上に絨氈を敷きて直に之に坐臥すべきに卓と椅子を備ふるは旅宿として外人の接待に便せんがためなるべし。特に露西亞名物湯沸の此處に備へらるゝは露西亞勢力の一端とも見るべきかやがて波斯の犍男葉鐵の大鐘に濁水を運び來りて湯沸に移せり室婦の代りに犍男も物珍らしく飲料水の濁れるも波斯の旅とありては默視するの外なし。一隅の寢臺をと見れば木製にして古色充分なるもの荒壁に貼れる壁紙も半は古新聞にて補綴せらる。例の犍男に翌朝の出發時間などを確め且この寢臺の恐らくは床蟲の棲家なるべきを戯に問へるに彼は領きて此邊は黒蟻と毒小蛇の名産地なり居室へもマ、入り來るとあれば用心し賜へグウルザの噛む時人體全く黄色に變じ強き瘧瘵の後二十分時にて絶命するを常とすと熱心に語る予は呆然たり。

少時にして運び來れる夜食は半熟の鶏卵五個羊肉の小片に切りて煮たる稍々支那式に類するもの一皿なり。麵包を需むれば今日は盡きたりといふ。食器の如き洋風の皿に刀とフォークを添へたるは全く手を西洋人式に待遇せるもの強て波斯風

を學ばんとせば總て指頭を以て巧に食事せざるべからず。食後西瓜と甜瓜と乾葡萄の孰れかを取るべく勸められたるも虎疫の流行に多少の恐怖を感せる予は此不潔なる陋屋裡に果物を呼ぶの勇氣なかりき。幾分が蠻地の旅行に慣れたる予も就寢後は二個の不安に驅られて睡を成すに難かりき。一は盜賊的惡計の孤客の上に試みられんと他は毒虫類の夜襲これなり。身邊に武器あるにあらず。卓上の燈火は蠟燭なれば時餘を支ふるに過ぎず。予は携帯のペンデン點火器を枕頭に置き南阿以來身邊を離さざる犀骨の鐵杖を寢臺近く立かけたり。夜更けては風強く晝間八十度以上の暑氣に換へて室内冷氣すら覺え悲しげなる驅聲の遠近に起るを聴くのみ。

#### 一四 宿舍の朝夕

一にもコランの教典二にもマホメットの教と日常の動作を好んで宗教的ならしむる波斯人は概して優劣なる飲酒禁なれど飲酒は必ず夜間に於てし就寢前に試みるを常とす。予は第二日の旅宿において夜食後無聊なるまゝに一般宿舍および



旅人の模様を見んと欲し、宿舍の土間に至りて、乗客の間に投じたるに、豫期以上に歓迎を受けたり。或者は予に椅子を譲り、或者は煙草を頒たんとす。一座を見渡すに、亞刺比亞風の長衣を着けたるもの四五洋装のもの三人、今正に就寝前の小宴中にして、放談酬なるの時なりき。予が突然の投入は、乗客の視線と話頭とを予の上に轉せしめ、其内一二者の相囁きて予が何國人なるやを訝るに似たれば、予は之に興味を感じ、乗客に對して予が何國人なるやを指摘せんとを求めたり而して、彼等が皆一時に予が所言の旨を諒したるに見れば、彼等の總てが普通に露語を解するを知るべし。暫時予を諦視したる後、先づ口を開きたりし長衣君は、稍々不安の體にて支那人か若くは日本人が兩者の内なるべしといひ、これに續けるものは、否、足下はキルギス人(多く中央亞細亞に住む種族ならんといひ)放ちて、キルギス人中にも有識者あり、露國の官吏に登用されざるものもあれば、と附言したり。其餘の二三子は、絶對に鑑識の能力なき模様なりしも、一座の評定は、結局予を以て支那人か日本人かとの疑問に了りたれば、予は先づ予が日本人たる旨を語り、且この地の如き東洋に關係少き國土に費用と時日とを費して旅行を企つるが如き、眼前に利益を見ざる

研究的行動は能く日本人の企て得る所にして、支那人の決して爲じ能はざる所なりと、稍々高尚なる説明を試みたり。彼等の飲料は通常の葡萄酒と日本酒の稍々濁を帯びたるもの、二種にして、前者は輸入に屬し、後者は波斯固有の酒料なりといふ。更に傍に目を轉じて予の一驚を喫したるは、阿片吸飲器の點火せられたるものありし一事なり。波人に阿片吸飲の習俗あるを知らざりし予は、彼等に對して其吸飲の一般的嗜好なるや否を質して、阿片が波斯の中等下等社會を通じて吸飲せられつゝあるの事實を知り得たり。その煙管は支那人のそれよりも長く、又支那人の如く必ずしも横臥して吸飲するにも非ざるが如し、煙草に水煙管を用ゐ、又阿片を常用する等、波斯人と支那人との間には習俗の相似たるもの少からざる如し。朝の宿舍にも亦奇觀尠からず、初め室内に低微にして、單調なる聲の聞え、漸次調子附きて、祈禱様の音調の聴取せらるゝに、到り見れば、波斯人の數者孰れも我座布團ほどの絨氈の上に跪きて、單調なる祈禱を唱へ、やがて各自懷中より徑二寸許なる六角形の小器片を取出し、之を座前に置くや、恭しく頭額を下げて、其器片にまで接



觸すると少時叩頭し又祈禱するもの幾度なるを知らず。之を聞くに其小器片は回教の聖地メッカの土にて練り上げたる土片にして、彼等の祈禱を捧ぐる必ずメッカの方角に面するを常とすといふ普通下層の勞役者等は祈禱も形式にして簡單を極むといふも同宿の庶民共が朝の祈禱に十五分時以上を費したるを見れば上等社會の朝の禮拜は想像に餘ありといふべし。

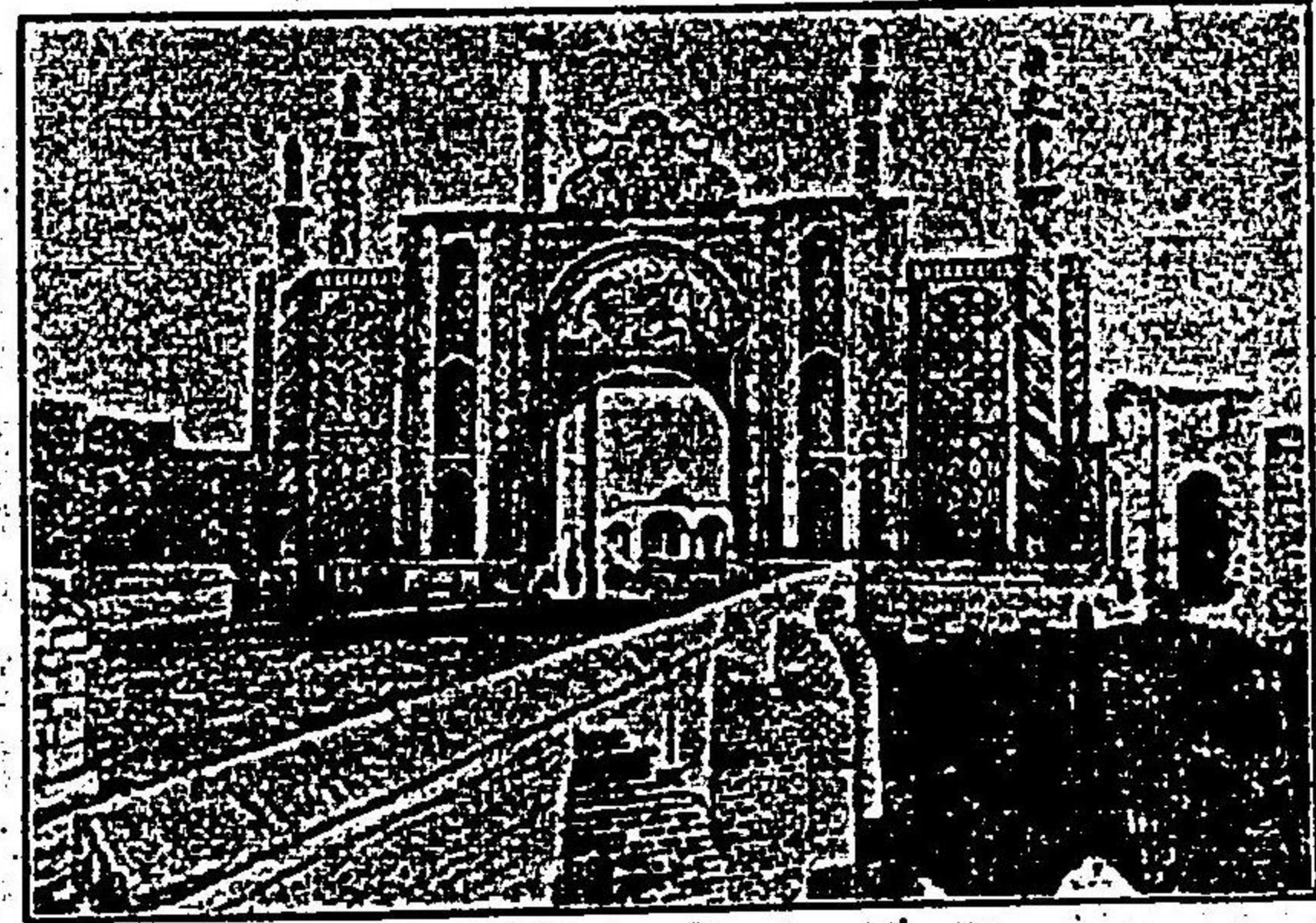
### 一五 首都に入る

第二日の午前アガババ驛を過ぐ所謂四千呎のイラン高原はこの邊より東南に開展するなり。アガババは高原を北方より固める諸部落中の大なるものにして、自然に高地なれど土地肥え水利に富み、葡萄その他の果樹園多し。第二日を通過したるカヅウイン市は地方の小市と稱し得べき地にしてエンゼリ、テヘラン街道土第一の土地なり。特に兩地點間の殆んど中間に位するが故に今後該街道の交通頻繁なるに従ひ、カヅウイン市は首都北方の一要市たるべきなり。カヅウイン市に波斯古刹の一あり、土人の言ふ所によれば一千年以上の回教寺として其名遠近に高しと

いふも而も彼等の迷信は断じて異教者の參詣を容さず萬一之を敢てせんとするものは死の危害を豫期せざるべからずといふ。予は馬車のカヅウインに入るや暫く街上を散歩見物せるに店頭陳列する處大半は露西亞品なり。食器類より砂糖、更紗の如き皆露國よりの輸入品なり。露國が北部波斯に經濟的關係の深きを覺ゆ、レント出發後第四日の午後首都に入らんとする數時間程の邊において大天幕の處に點在するもの予が視線を惹く、之を問ふに「皆都人士の別荘なり」といふ。蓋し波斯の俗春夏秋冬を通じて都人士の郊外に避暑的天幕生活を爲すもの多く、常に寢食を天幕内に取るのみならず、此處に客を迎へ又事務を執る、現に夏季における各省の局課の如き亦この別荘地内の大天幕内に位置すといふ。之を瞥見するに天幕の比較的廣大にして清楚なる恐らくは固有の荒壁の住家に優ると萬々なるべし。午後四時頃馬車テヘランに入る。

テヘランには十二の城門あり、市が城壁に圍まれ、廻らすに塹濠を以てせるの狀は純乎東洋流なり。只その十二の城門が之を支那各城市の城門に比して鮮麗と巧技との優れるを見る。蓋し波斯の渤陶石渤藥をかけたる各種の彩色を有する一種の





波斯都城阿拉門之二

煉化石は波斯文化の工藝的賜として古來廣く裏海沿岸地方の建築に應用せられ  
 たるが如し波斯の城門が此彩石によりて其表面を飾られ門側高く聳ゆる圓塔の  
 如き深緑淡紅黄色の光澤ある彩色によりて彫鏤  
 せられ諸種の紋様を織出せるもの真に一種のモ  
 サイクなり予が馬車の城門を通過せんとするや  
 御者は予に向ひて門番に茶代を取らせよといふ  
 露貨十哥を與へたるに不平の色あり後に之を聞  
 く市内へ運搬せらるべき貨物旅客の荷物等元  
 來一定の通關料を支拂ふの規定あるも近時多く  
 は茶代の名義を以て門衛の衣囊を肥すに過ぎず  
 といふ。

### 一六 獅陽國の首都

波斯國旗の旗章は獅子の背後に太陽の半昇れるものその獅子の手にせる強度の

彎曲ある蠻刀は歴代の波斯帝が腰間に帯び玉へる寶劍に酷類す予は裏海岸のバ  
 クトに露國を辭して以來海陸に週日を費して今や初めて此獅陽國の首都テヘラ  
 シに入れり濠を遮ぎれる橋道より城門を過ぎて愈々市街に足を入れたるに通路  
 甚だ狭く兩側は一面に土塀の路に沿ふて相聯れるを見るのみ街上必らずしも通  
 行人少なきにはあらねど予は一種寂寥の感に打たれ不審の感念を抱きつゝ兩土  
 塀内の路上に馬車を進めぬ初めて波斯に遊びたる或西洋人が城門よりテヘランの  
 街上を通過し兩土塀の高く兩側に打連り人家らしきものゝ更に目に觸れざるを  
 訝りてテヘランの市へは尙遠きやと御者に問ひたりとは有名なる實話として西洋  
 人の間に常に打語らるゝ處なるも吾等日本人の眼には必ずしも左程に奇觀なり  
 とは映せず我國封建時代の城下に所謂士族屋敷なるものが邸第を圍める高塀の  
 相聯りて路上の通行者は長廊下然たる兩側高塀の間を通過することの今尙地方  
 の舊士族町に往々その舊態を見るの吾等はテヘラン市内を通過する數町にして  
 早く其の我國の士族屋敷との類似を會得したり行くこと數町にして廣場に出づ  
 テヘラン唯一の此廣場は宮城前の廣場として蓋しテヘランの誇なるべしその光



景は朝鮮京城なる鐘路より景福宮前の廣衢を想像せば略その一般を推知するに足る廣場の中央には羅馬風の泉水あり、小花園之に伴ふ園の四邊には四門の巨砲据付けられ、更に圓側に大小の青銅砲十數門を二列に排列す、宮城前の廣場として蓋し好裝飾たり、廣場に面する洋風の二階建築化家屋は波斯の兵營にして之に隣するの波斯の國立銀行たる、英國銀行、續て郵便局および東印度電信會社等なり、正面のメラアルマス門を入れば即ち宮城および内閣あり、政治的革命的度毎にこの廣場が衆庶の群衆相倚るの場處たる宜なりといふべし。

初めてテヘランを見たる予に取りて奇觀なるは街上の婦人なり、彼等の多くは西洋のショールに類する荒縞の綿布を被衣の如く頭部より被りて全身を包み馬の尾にて編みたる黒色の面布にて全く面部を隠蔽す、近寄て彼等に接するも更に婦人の容色を窺ふに由なし、往昔マホメットがその妻の面貌を蔽はしめ他人をして窺はしめざりし事の終に回教の教儀となりて今尙五百萬の波斯婦人の上に面布の舊俗を存續せしむるなり、更にテヘラン市中最大の偉觀は廣場の南方なる市場の壯大整備せることなり、コンスタンチノールといひテヘランといひ市場の宏

大にして整備せるは回教國都市の特色なりといふ、この地市場の一般市中の建築物に比して結構の大なる、其構内に寺院建てられ、監獄備はり湯屋の設ある等、以て一般を察すべし、若しそれ腦病的傾向ある旅人の此市場構内の見物者として入りたらん時、金物店の槌の音、羊肉屋店頭の膏の臭、さては鍛冶屋の鐵槌の響、吳服屋、八百屋商の客を呼ぶ叫び、混然一時に到りて、纒に惑亂卒倒を免るあらば幸なり、特に兩側各店鋪間に通せる長廊下の迂曲幾回せる、宛然螺堂の趣ありて、案内者を伴はざる外人のために一大迷宮たる、テヘランの市場は眞個外來人のために至大なる珍世界なり。

### 一七 人口と種族

波斯の人口は概算一千萬人といふも、元課税上の調査より人頭を計算せるものなれば實際において之より多數なるは争ふべからず、昨年末における總人口として波斯政府の發表せるものは一千〇十五萬五千人を計上す、即ち一方哩平均三百六十七人の割合なり、されど波斯人の印度、高加索および土耳其へ移住しあるもの甚



だ多数なるが故に波斯人の總人口は一千萬人を超過すること少々に非ざるべし。されど國內總人口中の四分の一は南部及び西南地方に散在する遊牧民にして、敢て現帝室の存立を認知するに非ず、又必ずしも革命派たる現内閣に黨するにも非ず、眞個自由の遊牧民にして、シラヅ、ブヅール地方に動もすれば掠奪的襲撃を在留外人の上に試みるものは皆是等の遊牧民なり。全國各市の住民亦總人口の四分の一に居り、他の二分の一は即ち地方の定住民として多くは農民なり、而して波斯なる國名すら波斯國民一般の名稱たるに非ずして、元シラヅ州の舊稱呼たるに過ぎざるが故に、波斯なる名詞は一般國民の上に必ずしも國家的意義を認められざるが如し、されば獅陽旗に對し、波斯帝室に對し、或は波斯なる國家に對する國民的觀念は一般民衆の上に極めて薄く、波斯内の或種族の如き宗教上の觀念より回を致の最高首長として土帝を見ること、波斯帝の上にあるもの少數にあらず、現に土耳其領に近き西北地方の住民たるクルド族の如き、その酋長の殆んど波斯政府より獨立してクルド族を支配し、只納税の義務を波斯政府に有するに過ぎず。八十萬のクルド人中其約半數のウルミヤ湖南に常住する種族の如きは全然波斯政府を

認めずして租税兵役すら拒否するの常態なり。波斯帝室の慣例として波斯の皇太子が必ず西北アゼルバヤン州の總督に就任すべき所以のものは、同州の政權が古來土耳其遊牧民の手に掌握せられて動もすれば此波國內第二の豊富なる地方が帝室と相背離するの恐あるに因るなり。今波斯國民を組成する各種族を見るに

波斯	五百五十萬人	五五〇
土耳其	二百萬人	二〇〇
クル	百萬人	一〇〇
ク	八十萬人	八〇
亞	三十五萬人	三五
シ	三十五萬人	三五

土耳其遊牧民の如き更に十民族に細別せられ、その西北境にあるものと北部地方にあるものとは今日多大の相違を見る、現に波斯の現帝室はカドヤル族の出にして、同族は實に遊牧民中の一種たるも、そのウルミヤ附近の遊牧民各々とは寧ろ敵



對の關係なり。  
 北方は概して氣候の順和、生産力の豊富なるがために人口の分布は北に密にして南に疎なり。北に住民二十五萬人のテヘラン市三十萬人のタヴリツ市あるに反し首都より波斯灣に至るべき途上の一市イスファガンは八萬人、首都よりバグダッドへの通路となるハマダン、ゲルマンシャの兩市は孰れも五萬の人口を有するに過ぎざるなり。若しそれ隣國との接境領域に至りては、

國境延長露里	百分比例
波、露 間	一四七〇
波、土 間	一五五〇
波、アフガニスタン間	七〇〇
波、ベルチスタン間	七五〇
	一七

最後の二者は事實において波英間の關係なるが故に、これ亦千四百五十露里、即ち露土兩國の接境延長と約同様なり。而して裏海が露波二國間の領地に包圍せられ、兩國の共に戰艦を此處に浮ぶるなきを誓約せるに反し、南方波斯灣は殊強の關係

地として波斯の國際的事件は將來波斯灣上および西方波土の國境方面に多きを、見んが要するに國際的關係上國家の憂を爲さんもの、それ南方の遊牧民と西部のクルド族が、

一八 波斯の婦人(上)

予は今波斯の婦人に關して記述を敢てせんとするも實は十數日の波斯巡遊中波斯婦人の面貌を窺ひ得たるを一回だもあらず、否家居の婦人すら瞥見したるをだになし回教國なる波斯にては夫以外何人だも婦人に近接し得ず、未婚の女にありては殆んど外出だも爲すとなし、若し異教者たる外國人にして過つて婦人と語り婦人と親めるとの波人の知る所をならんが、二十四時間を出でずして彼等男女は附近隣人の私刑に會ひて首足處を異にすべし、蓋し男女の關係上マホメット教徒たる波斯の男子ほど世に自己主義なるはあらず、彼等は絶對に婦人を占有し、占有せる婦人よりは友人縁者をすら遠ざけ、異教者外國人を隔離するにも拘らず、自ら好んで白人の婦女を妾として蓄ふるもの尠からず、テヘランにおける人口統計



を見るに基督教徒の回々教に改宗するものあり其の多くは婦人にして歐洲各國の婦女子が其の生活難等より醜業界に墮落したるもの初め土耳其に賣られ更に轉々波斯に流れ到りて波斯人中の貴人富者のために妾として占有せらるゝや、日常起居の便宜上より改宗して回々教徒たるなり、波斯男子の婦女占有の状概ね此のごとし、而して波斯婦人が男子の占有物たる實狀を述ぶるに當りて、先づ波斯における通常家屋の構造に就きて説明するの要あり、波斯の民家は通常土塀高壁を以て圍まれ内に住宅の建てらるゝもの必らず前部後部の二棟に分たる、前部の一棟は之を二三の小房に區劃し、家長たる男主人のため、に事務室たり、應接室たり、客間たるもの、家族以外の外來者が自由に出入し得る部分なるに反し、後部の一棟こそ眞の住宅にして、稱してエンデルンといふもの、即ち婦人房の意なり、該房内の各室は家長の有する妻女の數に應じて多寡大小不同なるも、その婦人房として各居室が夫以外縁戚の男子すら出入し得ざるや一なり、只幼兒および家婢のみは此婦人房への出入自由なるも、十二歳より婚嫁を事とする波斯人のとどて、兒童の如き亦動もすれば其出入を禁せらるゝと稀ならず、特

に其家屋の建築風がヨシ比較的多數の窓を有するも殆ど四邊を壁にせるの狀は婦人の状態を愈々監禁的たらしむるの觀あり、居室内の床は煉化又は石にして所謂波斯絨氈を直に其床上に敷く若しそれ富者貴人にありては絹織又は毛織の絨氈價數千圓のものすら平素床上に敷くものありといふ、而して家居の波斯人は男女とも絨氈の上において靴下のまゝ居坐するを常とし、靴上靴の類は皆入口石床の上に脱がる、先端の尖りたる黄又は紅色の男子靴が時に婦人房の入口に脱がれるは主人の婦人房に其妻を訪ふの證なり、

### 一九 波斯の婦人(中)

予は首都滞在中テヘラン三大新聞の一たるタラクチ(進歩の意)新聞の二記者との對談中日本に關する諸種の質問に際して偶々婦人談に入り、貴君子の如き幾人の妻を有せらるゝや、白人同様夫妻同伴して散歩せらるゝとありやの奇問に出會ひて、呆然答ふる所を知らざるもの少時、これを機として波斯人の婦人觀、婦人の社會關係等を多く彼より聴くを得たり、



波斯において婦人は必ず出嫁すべきものなり、コランの經典は斷じて婦人の寡居を容さず、婦人は先天的に男子の配たるべき運命を有すとせられかの教典中の壯年男子の若し單獨寢に就く時、地は號泣して天に向て其怨恨を訴ふてふ章句は今日尙波斯人によりて眞面目に受取らる。現に妻たる女性が一週一回即ち木曜日より金曜日への夜において強ひて妻たる義務の必行を要求せらるるが如き亦教典の訓を遵奉するものなり、特に其多妻の俗の如き亦教典の結果にして、少きは二人より多きは七八人に至り時に十數人に及ぶものあり、而も其婚儀の甚だ簡單なる、相隣せる家の屋上又は露臺より妻たるべき婦女を瞥見して其男子の意に滿つる時直ちに家に入れて妻と爲すなり、回教徒たる波斯人の婦人觀は女性を以て極めて卑しき極めて汚きものなりとし、畢竟幽暗裡に蟄居すべきものなりとす。さればテヘラン市の街上二人として女性と同道するの男子あるを見ず、夫妻、兄妹若くは父と娘とすら決して同道することなし、男子の路を行くもの途上妻に會ひ母に遭ふも見ざるが如く知らざるが如くして過ぐるを常とし、其相凭りて言語を交ふるが如きは教儀上の非禮として擯斥せらる。若しそれ多妻制上内室の不和不安

の狀に至りては封建時代において我等祖先の一部が經驗したりし所と全然その趣を同うす、即ち一家内に數妻の群居は直に現世の地獄を表現するものにして各家婦人房内の各室は彼等妻女が其夫の歡心と財産とを占有せんが爲めに日夜煩悶する競争場たり、その他各自の生兒を夫の後嗣たらしめんとする暗闘に至りては往々にして怖るべき惡計の演ぜらるること稀ならず、されど彼等一家内の當番妻制度、子は假に此名を附すは恐るべき上述の弊を融和するに於て極めて有効なるが如し、即ち多數の妻は各自一定の順番によりて順番當日の家宰となりて家内一切の支配權を掌握し、庖厨を司り、下婢を市場に遣し、自から食事の献立を案じ、夫を其自室に招きて食事を共にし、終夜夫を獨占して其翌朝まで自室に留らし、翌朝に至り次番妻の行動亦これに同じ、コラン經典が爾の多妻を一樣に愛せよと訓ふる當番妻制度も往々にして、其實狀の教儀と相反して夫の愛の動もすれば多妻中の一二に偏することありといふ。

## 二〇 波斯の婦人下



上述の如く社會の壓迫卑下を一身に集むる波斯の婦人は、他に偉大なる半面を備ふ。それは波斯の國民的變亂に際して毎に婦人の参加し、而も多くの場合において婦人は其指導者たり、鼓吹者たり、陣頭の勇者たること是なり。曾て大寺院參詣鐵道の延長六哩の敷設を見たりし時において、鐵道敷設反對運動のために二千人餘の婦人は宮城前の廣場に群集して新築停車場を破壊したり、而して其餘勢は延いて在留外人の戮殺をすら計畫するに至れり。回教を典の教ふる所によれば、法廷は決して婦人に對して何等の裁判を與ふるを得ず、即ち街上において婦人に手を觸れ、婦人を毆打することの絶對に嚴禁せらるゝのみならず、假令如何なる犯罪ある婦人の上にも法廷の裁判を之に施すに由なきなり。これ大小の動亂革命に婦人の参加して至便を極むる所以なり。

婦人の裏面的勢力は獨り此に止まらず、波斯皇帝數十の妃が常に能く政治的樞機を左右し得るの事實に至りては寧ろ驚くべきものなり。波斯皇帝に數十の皇妃あり(現帝は未だ年少なれば此の事なし)その數十人中第一の皇子を擧げたるものを正妃となすと雖も、數十人皆皇帝の正配として同權なり。殆ど一生を擧げて禁裡の

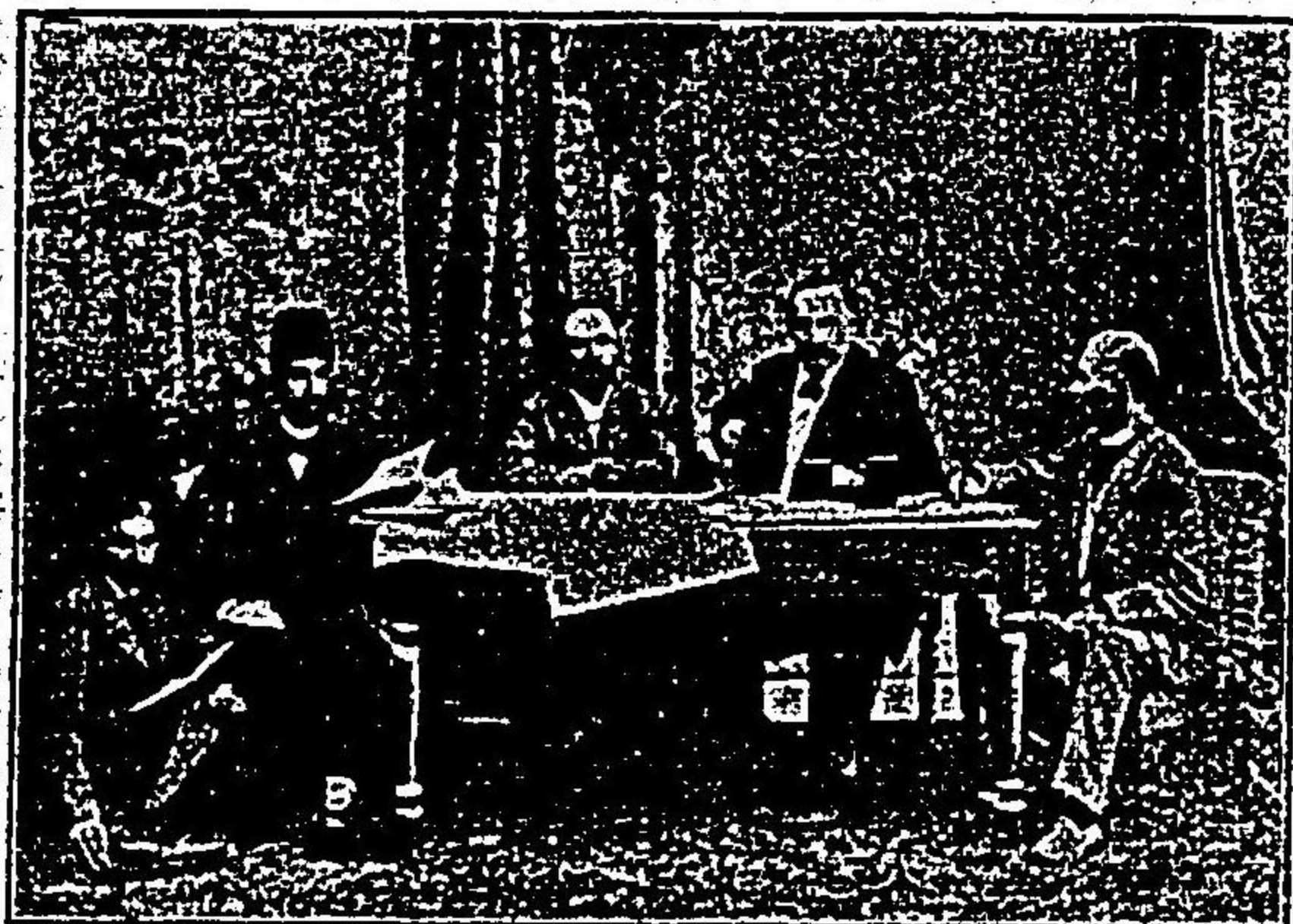
深窓下にあるべき彼等は好んで朋黨を作り、皇帝を擁して動もすれば政治上の樞機に興らんとす。野心あり手腕ある皇妃は常に朝廷の大官と結び、大官と皇帝との間に立ちて自家の野心を大成するに腐心す。曾てはアデル・ベイジャン州知事の死刑の宣告を受けたるもの皇帝第一の愛妃に賄ひて危機を免れたるものあり。又某外人の巨財を一皇妃に贈りて、鑛山採掘權を獲得したる例あり。シカも滑稽に類するは當番妻制度の亦皇妃の間に實行せらるゝ事なり。假に四十人の皇妃ありとせば、先帝の如き皇妃三十四人を有せらるゝ皇帝の巡廻して一妃房に臨御を見るは四十日に一回にして一年九回に過ぎず。こゝに於てか皇帝の臨御順は非常なる高價を以て各皇妃間に賣買せらる。政治上の要件、臣下の情願等を提げて老獪なる妃等が皇帝の歡心に訴ふるの演技は、この臨御を利用して翠帳紅圍の裏に行はる。要するに多年幽囚の生活を婦人當然の分なりとしたりし波斯婦人も、漸く教典上の舊俗を破壊して自由の天地を迎へんと煩悶するが如し。脚部の美觀として純金或は金屬の環十數を以て脚の一部を飾りたりし舊習は、今僅に波斯内の蠻族およびテヘランの踊子の間にのみ保存せらるゝに過ぎず。コランの第三十章五十九節



に彼女が他に知られ、他のために凌辱せられざらんため外出の際は婦女の面を覆へてふ覆面の教も漸く波斯婦人の間に輕視せられ來りて近時婦人の街土を行くもの夫の在らざるを利して時々その面布を脱し他の男子に會釋し微笑と秋波を途上の男子に投ぐるものあるを見るといふ支那における天足會同様波斯在留の外國宣教師間には早くより婦人覆面の舊俗を破棄するとの唱道せらるゝあり波斯婦人は其覆面のために多く眼を病み又常時氣息を塞逼するより氣管機病者の多き是等の見地より外人の唱説と相待ちて一面に熱烈なる性情を有する波斯婦人の教儀と面布の撤去を絶叫するの日も或は遠からずして到るべきか。

二一 内外公館の摸様

夏季の來遊は予がために見聞の範圍を非常に狭めたり由來怠慢なる波斯人中の官公吏は歐洲風の習慣に學びて夏時多くは近郊の天幕的別墅その他に暑を避けその家居するものにありても家を閉ぢて客を謝するの風ありその所屬の官省公所に止りて事務を見るものゝ如きは概ね下級の吏員のみなりされど予の好奇心



議會開るに於けるシラヘテ

は如何にもして波斯の官省内における執務の實況を一見せんことを欲したれば予は旅券に關する質問的用事を口實として馬車を外務省に驅れり馬車は廣場より宮城に到るべき門を入りて宮廷に續ける一建物の入口に止れり此邊には露細亞風の軍裝したる兵卒三四その邊に徘徊しかたりしも別に外來者を誰何する模様もなし予は玄關より入りて出會ひたる二三の人に其旨を語り指示さるゝ儘に進出したるに忽ちにして一大廣間の前に出でたり予は此處にて官吏らしき一人を呼止めて一揖し外務省の一局に案内を頼みたるに彼は無造作にその左側を指して此處は宮中の中央大廣間なり此廣間の左側一帯は皆外務省なりといふシカも宮中なりと聞きたる予は實に少からず恐縮したり普通の官省と思へばこそ案内もなく進入したれど無條約國の一布衣が何等の



許可もなくして波斯皇帝の宮中に進入したること恐縮至極なれ乃ち踵を回して  
 廣場の左側に向ひ人の到るを待ち刺を通じて書記官に面會を求めたり。  
 書記官名はナフタルマガラモウ壯年の士なり予を椅子卓子の歐風の室に招して  
 予が來着のとは新聞にて見たるが何事の用なりやと問ふ予は之何等の用務ある  
 にあらねど旅券を取出して歸路裏海よりの出航手續など聞き言を一二の質問に  
 托して隣房なる官吏執務の狀を見たり只見る一廣間に絨氈の敷かれて所謂刀筆  
 吏十餘名ほどの日本流に正座して床几たる輕便式の小机に凭り波斯固有の蘆の  
 筆を飛ばせてパチルス然たる亞拉比亞文字を認めつゝあり封建時代における吾  
 等祖先の執務振も想はれて感興少からざりき。  
 外務省を出で、宮城門前の廣場に高壁嚴しき英國公使館を訪ひ轉じて露國公使  
 館にバクレフスキー公使を訪問したりバクレフスキー公使は戰前公使館書記官  
 として我東京に駐在したりし人にして露國の外交官中有名なる富豪なり當時東  
 京の花柳界にてバクさんの名が相應の評判を呼びたりしは今尙人の多く記憶す  
 る所たり氏は有名なる英國最良として其後英國大使館附となり終にイヅウオル



波斯內務省執務の狀

スキー氏の親英政策より昨年波斯の革命最中前任ガルドウィグ氏に代りて駐波  
 公使たりし人なり露都出發前本野大使の子がためにバ公使宛にて懇切なる紹介  
 狀を認められたるものを携へて露國公使館を  
 訪へるに公使は夏季のことゝて市外に避暑中  
 なりと聞きて予が豫期は全く水泡に歸したり  
 只露公使館内に公開の施療室あり公使館附醫  
 官が毎日二時間公衆のために診察に任じ市中  
 の貧民相應に來集するとのことを聞たりシカ  
 も波斯人の病氣は瘧と眼病にして投藥の大部  
 も亦キニーネと點眼水に過ぎずといふ波斯婦  
 人に婦人病を病むもの斷じて之なしといふは  
 研究すべきことなり  
 テヘランに九新聞あり内見るに足るべきもの  
 三あり、タラグチ(進歩の意)、イラン、ノウ(新波斯)、ムサワリダ(平等)にして最後のもの



最も進歩主義なり。予は此内第一第三の二新聞社を訪問したるが、記者の多くは好んで佛語を使用する例の高襟者流なるに失望したり。その最も辭令に巧なるは彼等の通有性なるが如し。編輯局とも稱すべき室内に机上新波斯人の常食たる羊肉に乳を混じたる米飯と土耳其より輸入せられたる教典の所謂御冷水とを盛りて執務中假食を爲すものあるを見るも、彼等の手に成る新聞が如何の價値を有するやは想像に餘あるなり。

### 二二一 列強と鐵道經營

波斯國內における列強の鐵道經營企畫は過去四十年に亘りて斷續し、而も今日に至るまで其一企畫だも成功を見ずして、波斯をして永く世界中鐵道を有せざる(寺院參詣鐵道六哩以外國家の一たらしむる所以のものは畢竟するに列強の猜忌と競争の激烈なるに主因せるものにして、亦以て波斯が過去將來共に列強競争の舞臺たるを推知するに足る。由來波斯人は徒に外形的文明を喜ぶ高襟的氣風を有するもの、波斯人の手に遇ふもの、予に向つて必ず問ふことは日本に鐵道ありや如

何なる延長を有するやの一事にして、彼等は其度毎に自國が鐵道を有せざることを耻づるの色歴々たり。タグリツツテヘラン間に最近乗合自働車開業計畫の波人間に起れるが如き其一證とすべし。シカも波斯一般の民衆はコラン教典の教ふる所を固守して、道を行くに必ず徒歩若くは驢背に由るの外他方に依るを嫌ふ。特に國家の高位にある僧侶及び守舊派の如きは國內に於ける鐵道敷設に今尙極力反對すといふ。されど四十年來鬱積し來れる列強の鐵道敷設熱は今や海外生活の經歷を有せる波斯の高襟黨と相俟て今年秋季における英露間の波斯國內鐵道敷設否定協約の滿期を機として、近く南北地方に諸鐵道線の設計を現實ならしむべし。今試みに過去における列強の企圖したる鐵道敷設計畫の主なるものを列舉せん。

- (一) 一八七二年獨逸のロイテル男が裏海より波斯灣に達する鐵道の敷設を計畫し、波斯政府と約して七十年間の營業權を得、加ふるに全國の礦物採掘官林伐採および銀行工場の創立許可を得、代償として總收入の一分五分を波斯政府に納むるの協定將に成らんとするに隨ひて英露の激烈なる反對に會ひ忽ち破棄せらる。
- (二) 一八七四年露國政府の後援により露國の二技師がシマコフ、メグリーン間(波國の



北西地方の鐵道敷設權を波斯政府より獲得し沿線五十哩内の石炭採掘權をすら併有せんとしたるに熱烈なる英國の反抗に遇ひて事不成立に了れり。

(三)一八七八年レントテヘラン間鐵道の敷設および營業を佛國の銀行アンオンに許可したりしも、こは波斯政府が該事業に對し年七分の保證を與ふるとを拒みたりしより終に契約の破棄を見たり。

(四)一八七九年及び一八八二年レントテヘランよりブゾールに至る鐵道敷設の米人及び英人によりて企畫せられたるも露國の反對により消滅に歸す。

(五)最後に一八八九年露人によりて企畫せられたる大經營としてはレントより印度洋面のチャフパル灣への鐵道敷設にして契約者も亦最も有力なる露人なりき而して波斯帝の如きも最も有力なる贊同者にして同年波斯帝の露部來遊を好機として完全なる協訂を見んとせるに際し却て露國の有力者側より反對の聲を聞くに至れり即ち北部波斯を印度洋面に結付くるとの却て英國商品の北波斯進入を助け露國貿易のために大打撃たるべしといふに在りて該企畫は終に露國內一部人士の反抗の犠牲となりて廢絶に了れり。

知るべし獨米の波斯に志ある決して今日に始まりたるに非ざるを而して前述の諸計畫を回想するにおいて今後如何なる鐵道線路の最初に企畫せらるべきかを推知するの容易なる且諸鐵道敷設開始の時は即ち諸鑛山の採掘森林の伐採を見

るべきの時たるや明なり而して鑛山森林の利は多く北部地方に偏するが故に露國若くは土耳其の之が獲得に容易なるべきは自然の勢なり。

### 二三 波斯の宗教界(上)

回教教徒中にありても土耳其人と波斯人とは他の同教徒に比して宗教的熱心の度著大なるが如し波斯に在ては教育は宗教上の副業にして政治も亦宗教の徒たり予はテヘラン市の一寺堂を訪ひて親しく禮拜の模様を見んとしたる際圖らずも學校を參觀するを得たり寺院の門を入りて堂内參觀の希望を語りたるに居合せたる數人は露語を解せざるにも拘らず予が來觀の意を諒して堂内への進入を進むるに似たれば予は戸を排して入りたるに其處には例の石床に疊様のものを敷き十一二歳の兒童十五六人圓座を作りて讀書中なり兒童の間に交り居たる有髯者は予の來れるを見て兒童に對して一二語を加へたれば或は踞座し或は端座し或は十數の兒童は我勝にと立上りて予に禮拜したり予は乃ちそが寺院内の學校なるを看取じたり教員なる人の露語を解し得ざるより予は對話の便を得



すして、彼等兒童の膝上なる書冊の如何なる書にして、その教授方法の如何すら知り得ざりしは遺憾なりき。されど波斯固有の學校なるものが我國維新前の寺子屋に比して更に數等を下れるものなるを看取し得たり。テヘランには英人獨人佛人米人孰れも學校及び小病院を有し、露國の如きはイグバルと稱する豫備中學校すら有すれど、固有の波斯小學校なるものは皆寺堂内における寺子屋式教堂に過ぎず。随つて寺院の監理者は學校の校長なり。……

宗教上の神聖なる習俗として最も奇異なるは聖壇に座する事なり。聖壇は波斯語にベストといひ、回教民にして苟も聖壇に安座するものは其の何人たるを問はずば勤務に就くを厭へる兵士にして聖壇に座せんか、所屬長官と雖も之を如何ともするを得ず。昨年革命の際革命軍のテヘラン城内に進入するや、皇帝は直に露國公使館に逃れて公使館内の聖壇に坐せられたるが爲に、流石の革命軍も之に手を觸るゝを得ざりき。ウルミヤ附近の革命軍が當時官軍のために逐はれたる際、革命軍の首魁サツタルパンの如き土耳其領事館内の聖壇に座したるため官軍も亦彼を

如何ともするを得ざりき。……

要するに波斯の政治と教育とは宗教の従なり。復古黨も革新派も古典學者も歐洲留學の新學徒も回教の前には一樣に従順なり。されば基督教への改宗は死刑と規定せらる。而して今日に至るまで未だ一人の改宗者を出さずといふ、シカも教儀の此の如く國民の間に尊ばるゝに拘らず、その僧侶の一般に無學なるも亦驚くべき程なり。予は寺院内にて幾度か大小各様の裝釘をなしたるコラン經典を見、亦兩三度僧侶の讀經を聽きたるが、その度毎に彼等に對してコランの意を解し得るや否やを質したるに、彼等は憶面もなく其單に鸚鵡流に誦するに過ぎず。毫も讀經の意を解し得ざる旨を答ふるの常なり。蓋し回教上における亞拉比亞語の運命は、加特力教祈禱における拉典語のそれに等しきが如し。波斯の僧侶が亞拉比亞語の教典を今尙波斯語に反譯するを嫌ふは、猶中世紀時代の僧侶界が拉典語の聖典を新國語に翻譯するを厭へるに均し。

## 二四 波斯の宗教界(下)



回教の大祭はラマザンなりラマザンは教徒が回教曆九月において精進をなすべ  
 き齋期の稱にしてこの期間におけるテヘランは全都狂するが如く神を尋ねると  
 唱へて萬民皆大聲に何事をか叫びつゝ街上を練行くといふ要するに波斯の宗教  
 は偏に儀式に流れ僧徒は墮落の極に在り而して其墮落の程度は都鄙各地の僧侶  
 が殆ど公然短期妻の周旋を業とするの一事に見るも以て其全豹を知るに足る。  
 予は爰に少しく波斯特有の短期妻の制度を語らざるべからず波斯の女兒は十歳  
 にして成女となり十二歳にして出嫁するを常とすされど貧家の女に至りては二  
 等妻として賣らるゝか然らずんば短期妻として幾度も出嫁するかの二方途に出  
 つ娘を賣る習俗は北部地方において多く行はるゝものにして北部各市場の開市  
 日には近郊の農民多くは其娘を連れ來りて買手を需むるの價大概二、三十トウマ  
 ン(我四、五十圓)なり只この賣買は名儀上婚嫁と唱へられ仕度料と稱せらる。されば  
 紳士富者の市場に女兒を買ひ來るゝや必らず僧の許に至りて媒酌人として二人の  
 結婚を認めしむ。かくして成立せるものは法律上公認せられたる短期妻にして短  
 期妻は二三日間、長きは數十日に及ぶ時に意氣の相投するもの短期妻より正妻に轉

するものあり媒酌僧への報酬は四五トウマンを要すといふ。  
 されば行商中にも旅行中にも甚しきは狩獵の途上すら苟も目を惹ける貧家  
 の兒女を見る時之を買入れ來るは力量ある波斯男子の常なり。儼僅の歳の如きは  
 短期妻の供給多きに過ぎて私娼を見るに至るといふ。北部地方における村人農民  
 の間には僧侶又は官吏を尊ぶの餘、美貌の少女を有するものゝ如き好んで其娘を  
 短期妻として僧侶官吏に献じ、數日間の玩弄に供するものすらあり。  
 僧侶の機能は往々にして帝室のそれと衝突するところあり、特に近代の皇帝は能く教  
 界と抗争したれど、シカも帝室は教界を離れて存立するとの難く、教界も亦帝室な  
 き時衰退を來すべきの明なれば兩者能く其間の調和を保ち敢て極端なる衝突を  
 來さず。シカも波斯の裁判は唯一の宗教裁判にして、コランの教儀は直に下庶民よ  
 り上皇帝を一樣に裁判するが故に皇帝は此點において教主の下に立つ。特に皇帝  
 は議會の開設後萬事をその議決に待つべきに反して、教主の裁定は回教徒一般の  
 上に直に法力を有す。  
 更に近時に至りて注目すべき變化としては都市における寺院附屬學校生徒の間



に革命思想の著しく發達し來りたる一事なり。彼等は初歩の亞拉比亞語と波斯讀本の素讀及簡單なる算數を學ぶに過ぎざるも、近時富家の子弟が頻々として佛、英、露國に留學し、その歸り來れるもの歐洲思想の一端を傳ふるより、その勢の寺院學校内にまで傳播して革命的氣風を醸成せるなり。ハルデイ、アルメヤン族の家庭に於てその子弟を好んで英國宣教師の許に托するもの、如きも亦青年氣風の上に多少の影響を有するが如し。

## 二五 貿易關係

波斯における列強の國際的競争は動もすれば單純なる政治上の抗争なるかの如く吾人の眼底に映すれど、一度その貿易關係を見るに及びては、英露の汲々として南北に其勢力を張り、更に獨逸の新に其貿易販路を擴大せんと努むるの當然なるを諒知すべし。往昔波斯の貿易權を掌握したるものは葡人と蘭人なりき。之に亞げるものはヴェニス人およびアルメニヤ人なりき。然るに英國の波斯南部に通商關係を開きてより、百三年、露國が北部波斯と貿易し來れるより、九十六年而して最近こ

の兩國は正に波斯の輸入貿易を壟斷するの勢なり。英國が印度より陸路又は蘇西運河を経て波斯灣に臨み、波斯の南部一帯に其通商關係を擴めつゝあるに對して、露國は雷に裏海南方の北部波斯を其通商範圍となすのみならず、曩に白國經營の在テヘラン貸付銀行をして南方なるキルマン、セースタンおよびブシールに支店を開設せしめて以來、その貿易範圍も亦漸く南方に擴大したり而して之が爲に露國の波斯貿易は最近十年間に長足の進歩を爲し、一八九三年に在て露波間の貿易は輸入において波斯總輸入額の三割を占め、輸出に於て總額の五割を占めたりしに、一九〇五年に至りては露國よりの輸入は實に總輸入額の七割八分を占め、波斯よりの輸出は總額の七割五分を示すに至れり。されば貿易においては近時露國は英國の上に優越しつゝあるも、最近獨逸の貿易界に亂入し來りて露英の對波通商に變象を與へんとしつゝあるなり。されど之を各國の主たる貿易品に見來るに露國輸入品の主たるものは石油および硝糖なるに反し、英國が鐵および鐵器類より綿布茶に及べるに見れば、獨逸の敵は寧ろ英國なるが如く、加ふるに英米よりせる雜貨類は獨逸の着々として代り占る所なるが如し。波斯や全國領域の六割は山に



して二割の高原を除きて殘餘の二割を耕地と爲す。農民の如き亦全國人口の三分の二を占むるが故に農業と牧畜は波人主要の産業なり。而も土地の所有權は一に各地大小の汗會長によりて專有せられ農民は單に小作人たるに過ぎず。要するに波斯の重要なる輸出品は農産物なるも、その米、麥、棉花の如きは未だ必しも言ふに足らず。獨り生産上の波斯をして名を天下に致さしむるものは乾葡萄と固有の毛氈なり。歐洲人が食後若くは喫茶の際好んで賞味する乾葡萄は多くはイラン高原の産にして、英佛および米國の富豪がその家庭に愛用する。波斯毛氈は波斯灣頭より年々莫大なる輸出を見る。

## 二六 波斯より中亞(上)

九月三十日朝波斯の首都テヘランを出發して裏海の東岸なる中亞鐵道の最西端港に向はんとする予は途をマザンデラン地方に取りてメシエセル港に到らんとす。マザンデランはテヘランの東北に當れる一帯の山地たるも、而も山北の平野は沿海の一地域として豊富なる生産力を有す。されば首都テヘランを中心とする

北部波斯は西に於てエシゼリ港を以て遙にバクイ港に對して露領高加索地方と聯絡し、東にマザンデラン北方のメシエセル港ありて亦遙に露領タラスノウオドスク港と呼應して中央亞細亞地方と相聯絡するなり。現に予のテヘランを發せんとするや偶然の機會を以つて露國民籍のアルメニヤ人と相知り、彼と相携へて馬を駢べ船を同うしてテヘランより中亞なるメルグにまで十日間の旅行を共にしたるが、彼は莫斯科の棉花商にして北部波斯特にマザンデラン地方に棉花の賣占に來波し、今又中央亞細亞に渡りてトルクスタン地方の棉花買入のために彼地に到らんとするものなり。亦以て北部波斯地方の通商路の一般を察するに足る。マザンデランの谿谷は眞に好風景を極む。乍にして高岳、乍にして谿流、乍にして斷崖、而して幾度か一望際なき原野に出づ。原頭林地の處々に點在するもの、枯草の芝氈、上濃綠色の斑點を劃するに似たり。或は樹林の鬱茂たるに會ひ、或は竹叢、籐叢の密生するを見る。熱暑地方の特色として時に丈草の肩を没するあり。竹に比して發生の甚だ速なる籐の其丈優に三四間に及ぶものありとは土民の實話なり。特に此地方の産物として柑橘類の各種到る處に培養せられて、其柚柑、レモンの如き、夙に



北部露西亞の市場に名あり、若しそれ冬季に至りては此邊一帶の山地、到る處微薄なる氷結を見、その雪融けの候に及んでや、山坡崖頭の積雪漸く融解し、流水山に溢れて山麓に奔流する時、山中に洞穴に冬を避けたりし虎豹野猪の皆野に出で來り、籐蔭竹叢の裡に隠れて、好んで菜圃、村落に出沒するといふ、予が夏季の旅行は幸にして這般の危害に關する憂を免れ得たり。

マザンデラン地方は極めて河流に富む、大小の急流皆濁水にして共に北流するもの、會流して裏海に注ぐものたり、幾條の河流堤防の見るべきなく、幾多の橋梁皆村人の假工に似て、馬上の手をして幾度か心膽を寒からしめたり、然り予は先にエンゼリ港よりテヘランに到るや、髮の如き大道に歐風の馬車を驅りたるに、今回の歸路山地多く、マザンデランの三日半は旅伴たるアルメニヤ商人と共に馬背の人と爲り、山北なるアムール市に至りて初めて土民用の馬車を得たるなり、沿道の一帯樹林に富み、竹叢を見暮色漸く到る時、蛙聲の聞々を水邊に聴き、陋屋の夕炊烟細く上る時、蚊の來襲に惱まざる、が如き予をして我國地方旅行の趣を感せしむ。

マザンデランの州民はその氣風に於て生活状態において首都附近の波斯人と大

に趣を異にするものあり、首都及び西北地方の波斯人が一種陰鬱の風を有し、遊惰の氣あるに反し、東北地方たるマザンデラン州民は一般に活氣に富み且快濶の質なるが如し、特に數日間の旅客の目にすら印せられて甚だ珍奇の感あるは、この地方男子の概して躰軀の倭小にして柔弱なる風態なるに反し、女子の丈高く頑健にして而も美貌に富むの一事たり、此邊の婦女一般に覆面を用ひず、稀に之を用ふるもの、如きも僅に鼻梁の半より唇頭を覆ふに過ぎず。

### 二七 波斯より中亞(下)

マザンデラン山系の北麓にアムール市あり、ヘラスプ河畔に立つ、この邊裏海岸を距る僅に我十里許、首都出發後第四日の朝漸くアムール市に入らんとして、其邊一面の廣野に點在する丘陵、樹林を利用して天幕の接比するを見る、これ予が曩にテヘラン郊外に於て見たるものと同じく、夏時における郊野の避暑生活にして、その大市街の近距離に存在するを證す、漸く市に近づきヘラスプ河邊を立ちて展望するに、先づ眼に入るものは回教寺院の尖塔の高く聳ゆるあり、白堊の小舎あり、葉葺



の陋屋あり、愈々市の中央に入れば比較的廣衢の商業街を成すもの商舖軒を聯ぬるあり、テヘラン流の高塀式住宅にあらすして此の如き開放せる店舖を見るは亦以て該地方人の快活にして商業的なるを察すべし。

アムール市既に商業地なり、されどマザンデラン山北の貿易地として工業區を兼ねるものバルフェル市あり、アムール市より裏海岸へ到る途上三十五露里の地點に在り、この市東北波斯に於ける棉花の集散地として夏時特に貨物の輻輳を見る二個の紡績會社すらあり、この地方には曾て地方商業家によりて棉花輸出のために鐵道の敷設を計畫せられたることあり、技師を白耳義に派遣して之が計畫の調査準備に當らしめたりしも、英露間の非鐵道敷設協約のために阻害せられ其存立を見ずして了りたりといふ、こは即ちアムール市よりバルフェル市を経てメシエセル港へ達するの豫定計畫なりき、現に數年前の調査によるもアムール及びバルフェル市より裏海へ輸出せらるる棉花一ヶ年キープ即ち約我五百萬貫に上れるを見る、この他所謂波斯米の百萬布度、カナフと稱する波斯麻の十萬布度の輸出を見るあり、鐵および石炭の産出亦甚だ尠からざるが如く、東北波

斯は所謂露國の勢力範圍たる北部波斯一帯中最富の地方にして、その東北波斯の富は一にマザンデラン山北に集中し、アムール、バルフェル市の兩市によりて集散吞吐せらるるもの如し。

バルフェル市も亦バブーリ河畔に立つ、その裏海岸に向つて舟楫の便あるは同市繁昌の一因たり、バブーリ河の兩岸林業に富み綠翠水に映する處小禽の夕照を浴びて群り囀づるなど索漠たる波斯にありては殆ど復見難きの景なり、バルフェル市に近づくに従ひ林叢漸く密林となり、人家亦相接比し來るアムール市より土民常用の馬車に由りて薄暮バ市に着したるの予は第四日の夜を此地の一旅宿に過せり。

十月四日早天バルフェル市を發し、二十一露里(約我五里)の道程に數時間を費やして正午前既に裏海の水を見たり、メシエセル港即ちこれなり、メ港より中亞西端のクラスノウオドスク港へ至るの定期船は一週一回を常とするも、夏時特に棉花輸出のために四五日間一回の船便あり、恰も好し予が着港の翌早朝を以て一汽船の拔錨すべきに會ふ、只メシエセル港の遼淺なる天然の不便は未だ何等人



工的修築の加へられざるがために、海岸を距る約二哩餘に於て通常汽船の碇泊を見るなり。

メシエジセル港には特に露國勢力の影を認めず、こは一には此地方がかのテヘラの西北方エンゼリ港の直に露領バクー港と兵事通商等の上において大關係を有するが如きなきに因らんも、而もこの港の東方百二三十露里にしてアシユル、アダの良灣あり背後のアストラバッド、南邊のグリヤージと共に露國の夙に租借して適當なる兵事上の設備を施せるありて亦この附近に他の施設を要せざるに因らやんばあらず、予は着港の夕既にクラスノウオドスク行小汽船に客たり、(遊記終)

波斯の交通と列強(明治四十四年一月、外交時報所載)

(一)鐵道及交通路

世界各國中最短距離の鐵道を有しながら而も鐵道問題の最も多くの經過曲折を有し來りたるもの未だ波斯の如きはあらず、波斯は首都テヘランより南方六哩に延びたる寺院參詣鐵道を有するの、外今日に至るまで他に鐵道を有せず、而も過去

に於る列強の企畫したりし鐵道敷設計畫なるものは決して一二に止まらず、今その主なるものを列舉せんに、

(一)一八七二年獨逸のロイテル男が裏海より波斯灣に達する鐵道の敷設を計畫し、波斯政府と約して七十年間の營業權を得加ふるに全國の礦物探掘、官林伐採及び銀行工場の創立許可を得代償として總收入の一割五分を波斯政府に納むるの協定將さに成らんとするに際し、英露の激烈なる反對に會ひ忽ち破棄せらる。

(二)一八七四年露國政府の後援により露國の一技師フォリケンガーゲン男がジュリア、タウリオン間(波斯の北西地方)の鐵道敷設權を波斯政府より獲得し、沿線五十哩内の石炭探掘權をすら併有せんとしたるに、熱烈なる英國の反抗に遇ひて事不成立に了れり。

(三)一八七八年レシト、テヘラン間鐵道の敷設及營業を佛國の一銀行アレオンに許可したりし、こは波斯政府が該事業に對し年七分の保證を與ふることを拒みたりしより終に契約の破棄を見たり。

(四)一八七九年及び一八八二年レシト、テヘランよりブシールに至る鐵道敷設の米人および英人によりて企畫せられたるも露國の反對により消滅に歸す。

(五)最後に一八八九年露人によりて企畫されたる大經營としてはレシトより印度洋面のチャフバル灣への鐵道敷設にして契約者も亦最も有力なる露人なりき、而して波



新帝の如きも最も有力なる之が賛同者にして、同年波斯帝の露都來遊を好機として完全なる協締を見んとせるに際し、却て露國の有力者側より反對の聲を聞くに至れり、即ち北部波斯を印度洋面に結付くることの却て英國商品の北波斯進入を扶け、露國貿易の爲に大打撃たるべしと云ふに在りて、該金畫は終に露國內一部人士の反抗の犠牲となりて廢絶に下れり。

是等の諸計畫は孰れも一旦蹉跌したりしとは云へ、今後波斯に於てその如何なる線路の企畫せらるべきやを推知するに足るべし。

更にテヘランを中心とする北部及南部の各三大街道としては

北境の三街道

- (一) アニリフ(高加索と接駁)よりタウリツ、カズウインを経てテヘランに達するもの
- (二) エンゼリ港よりレット、カズウインを経てテヘランに達するもの
- (三) 露領中央亞細亞アスハットよりメシエツドを経てテヘランに達するもの

七三〇露里  
三二六露里

首都波斯間の三街道

- (一) テヘラン、イスフアガン、シラス、アシル
- (二) テヘラン、イスフアガン、シラス、アマス
- (三) テヘラン、カシヤン、イエツド、キルン、チャフマル

一四九〇露里  
一五三〇露里  
一六三五露里

あり、此内につきて其一線若くは二線は他日英露の手によりて鐵道の敷設せらる

べきを見るべし、若しそれ獨逸が今後に於て手を染めんとする鐵道線路に至りては恐くは左の一線たらんが。

バグダッドテヘラン間鐵道豫定線

經由地名	距離
ハネキン	〇
カスリシクン村	二五
バイタフ村	四二
クリンド市	三六
ガツサナバド村	四七
マヒテシト村	二一
クルマンシャーフ市	二六
ピシトウ村	三一
サフネ村	二七
ケンケワル市	二九
アサダバド村	三五
ハマダン市	二九

土耳古國境上の一市、約一千戸あり。土耳古人、波斯人、アラビヤ人、猶太人等の居住を見る。

礦地

波斯人、亞拉比亞人の三十戸を有する土地、ザクロン山の岐路

クルド族約一千戸あり

クルド族二十五戸あり

波斯人約四十戸

縣の首府、人口約五萬商業上の要市なり。黑海、裏海及び波斯灣への三通路の接駁地點

波斯人の居村、百戸

泥土質黒地、波斯人居住約二百戸

波斯人、クルド人、猶太人あり、戸數約三百を有する一市

クルド人、波斯人約六百戸

縣の首府、商業市にして波斯、アルミヤン、クルド、猶太の各種族あり、要地點たり



ムラツル下村	三七	砂土
ゼン村	三五	土耳其種族の居村戸數二百
ムリケ、ヘラベ村	二二	百戸の村
ノウベラン村	三一	此邊道路狹隘、住民は波斯人七百
チャマルン村	二四	土耳其種族五百戸の村
クシケリ村	三〇	砂地、シヤフセウエン族三十戸
ハナバド村	三九	此邊大道路あり、波斯人の居村戸數五十戸
ロバト、クリム村	四八	波斯人、四百戸
テヘラン府	三七	波斯の首府
計	六五三	露里約四三六英里

以上獨逸が其バグダッド鐵道の起工と共に波斯内地へ向ひ延長せんとする鐵道の通過路と前掲英露の勢力範圍に於る主なる通路とを見來るに於て、將來における波斯の鐵道線路を豫測するに充分なりと信ず、英露兩國が十ヶ年間波斯内地に鐵道其他一切の道路を設けざるべき締約は昨一九一〇年三月を以て其効力を失ひたるが故に、列國の鐵道經營熱漸く勃興を見んとするに會す、特に北部地方に於ける露國の施設に至りてはジュリファ、タウリ、ゾグ間に於る鐵道の路盤は既に已

に竣工しありて容易に該路盤上に鐵道を敷設し得べく、斯くして波斯に於る最豐富地方たるアデル、ベイジャン州と露領高加索とを鐵路に由りて聯絡し得べし、一昨一九〇九年波斯の革命的內亂に際し、七月三日を以て露國政府が列強政府に致したりし同文電報の一節に見るも、露國の送兵が如何なる經路に由りて行はれたるかを知るを得べし、即ちテヘレン、エンゼリ間の交通の自由と安固とを計るために露國政府はバクーよりエンゼリに向け哥薩克兵一聯隊、歩兵一大隊、砲兵一中隊より成る二枝隊を送遣することに決せりとありて、現に七月三日バクー港を發せるドウボル、ムシラツキ、將軍統率下の該枝隊の先頭部隊は同月六日を以てエンゼリ港に着し、數日間にカヅウインまで南下し、此處に駐兵して革命の成行を観察しつつありき、當時革命軍の電光的成功、七月十三日朝首都に侵入したりし革命軍は十七日皇帝を廢し、新内閣を建てたりを觀望して、急に對波政策を一變したりし、露國は一旦入波せしめたる枝隊を空しくカヅウインに駐めて、終に之を首都に送遣せざりしとは云へ、カヅウイン、テヘレン間は約百五十露里の道程に過ぎるが故に、騎兵は能く三日間に歩兵は六日乃至七日間に首都に入るを得べし、而して是よ



先革命動亂の漸く熾なるに際して英國が突如として軍隊を波斯灣頭なるベンデルブシールへ上陸せしむるや、露國も亦スナルスキト將軍の枝隊を波斯に進めてタウリトツを占領せしめたり而して該枝隊は實に高加索のデユリフアより境を越えて百四十露里の道程をタウリトツに進軍したりしなり、今これ此の兩個の最近の實驗に徴し來りて露國が有事の日北部波斯に南下の經路を推定するの容易なるを見るべし而して將來ウルミヤ地方に活動すべき土耳其及び獨逸に對抗せんがために露國が高加索鐵道の南端なるジュリフアより或は其南西なるホイに支線を設けつゝタウリトツへ向ふべき鐵路を敷設すべきの必然なるは言を須むざるも、土耳其の萬一の襲撃を慮かる結果裏海の西南岸に沿ふべき他の一線を劃するの亦殆んど疑を容るべきなきを想ふ、即ち裏海沿岸なるアリヤート(バク)の南西約五十露里よりサリヤンレンコラン、アスタラなる沿岸諸地を経てエンゼリ、港南方のレントに會接せんとする一線是れなり。

### (二)獨露の成敗

近時波斯に對する國際關係上獨露兩國の成敗は甚だ興味多きものゝ一たり而し

て一昨一九〇九年の波斯の革命的內亂に對する露獨兩者の觀察豫測態度の相違が實に其成敗の近因を成すあるに於て更に一段の興味あるを覺ゆ、即ち同年五月波斯西北の重要市タウリトツに革命運動の勃發を見續て翌月該機運の遠く南部波斯に波及して激烈なる運動の南方バフチャール人の間より起るや、露獨否露英と獨土とは二個の相反する觀測を是等革命運動の上に試みぬ、即ち一方英露の兩國はこの革命運動を目するに從來の革命運動同様何等根底なき微弱なる運動なりと輕視したりしに反し、獨土兩國は初より革命運動を重大視し革命軍に對して終始尊敬と同情を表したりき、今其二例を舉げんに革命動亂の當初波斯西北部なるアデル、ベイジャン地方にサツタル、パン及びアフメド、オグラ等の自由軍と稱して三四萬の兵員を率ゐて運動を開始するや、露國は現に其高加索領に危害を及ぼすべしとの口實の下に實に五千留の懸賞を以て彼等の首級を獲んとしたりしなり、反之して當時土耳其は公然革命軍の保護に任じ、サツタル、パンの一時蹉跌するやウルミヤなる土耳其領事館の聖壇に隠れて難を避け土國政府は六月二日その領事をしてパン及び其黨與の生命財産の保護に任すべき旨を公然波斯の地方



官憲に通告せしめたり、斯くして土耳其をして北部波斯に關涉の口實を得せしめたるは露國の當事者即ち當時該地方の守備隊長たりしスナルスキヤ將軍の失敗なりとは云へ、而も根底に於て露國政府の觀測を誤り方針を誤りたるに因らずんばあらず、七月の初革命軍の漸く西方及び南方より首都に近づき到る時に際して最初に機關砲をその公使館に備付たるものは英露なりき、要するに此二國は終始態度方針を一にして最初は誠實なる皇帝派として計畫し、後南方革命軍の首都を占領するに至りて急變して革命派に對して同情を表するに至りたりしなり、ノイウオエ、ウレトミヤ紙が初に於て血に渴したる暴徒と稱し、ありし革命軍に對して其首都侵入後これに波斯憲法の擁護者たる美名を呈して久しく自國陸軍々人の訓練したりし皇帝の軍隊を被備者と呼ぶに至りたるは最も明に露國の對波方針の急變したりしを證す、而して早くも六月初旬サツタル、ハンの名を署したる、波斯の内事に關し露國の關涉に對する抗議なる一篇の「マタン」紙上に掲げらるゝあり、且つ一部の革命派をして該革命運動は必しも國民の立憲思想の勃發に非ずして實に英露の脅迫に對する國民的思想の勃發なりと公言せしむるに至りたるか

如き露英兩國が革命後の新波斯に名勢を失墜せる決して偶然に非ざるなり、而して此間獨逸が終始表面に現はれずして巧に土耳其を使喚して革命軍に意を寄せしめ、その意を入都して新内閣を樹立するに至りて着々活動を開始したるが如き吾人その巧妙なる政策に嘆賞を禁じ得ざるなり、蓋し革命に先ちて所謂波斯のエンジュメン(地方議會)なるものが大に其勢力を揚げ來りたりしは中央政府の無勢力を證する所以にして、元とエンジュメンは單に各地方に在て官憲の措置を監督するに過ぎざりしに政府の無勢力なる終に本來の性質を一變して人民指導の有力なる一機關たるに至りたるものたり、而して此の如き現象は革命氣運の勃興を證するに充分なるものなり、加ふるに南方パフチヤール族の蜂起は益々該運動の成功を豫言するものたるは同種族が波斯國民中最も民望を有する民族たるに於て之を知るべし、而も英露の眼識は終に爰に及ばずして依然舊態を保持しつゝある間に革命軍は一朝テヘランの城門より突入して皇帝を廢し新帝を擁して内閣を樹て國民議會を召集して新政を布くと同時に、官民一致して排露運動に熱中し、その第一着手としては既往三十年來露國將校に依



與て指導せられたる波斯哥薩克旅團の解散を決行せんとし(後露國側の熱烈なる運動に因りて僅に之が解散を中止するを得たり)年來聘備し來りたる露國兵學教官に代ふるに獨逸將校を以てし、同時に波斯新政府は曩に露國商人が二十萬ルーブルを投じて漸く獲得したりし「羊仔毛皮一手輸出權」の特權を露人の手裡より奪ひ去りたり、反之して獨逸は早く新内閣と默契し、伯林にて軍事教育を受けたる將校を首班とせる二箇の聯隊を首都テヘランに新設し、他方に於てウルミヤ總督に脈絡を通じてシユネマン商會をして波斯汽船會社を組織せしめ、以てウルミヤ湖の航行權を獲得したり、而して新政府の英國に對するの感情如何と云ふに、アルメニヤ人なる新内閣の警視總監エフレーム氏がその副監として會て英國公使館附武官を間諜の嫌疑を以て拘禁を敢てしたりし、非英國黨の一人を選任して毫も憚る所なきが如きは亦以て波斯新政府の英國を蔑視するの意あるを推定し得べしとするも、革命派内閣員中には比較的英國に好意を有するものゝあるあり、加ふるに最近新攝政に擧げられたる波斯第一流の政治家ナジル、ツリムルク氏の如き久しく英國に在りて英國に好意を有するの人なるよりせば、波斯に於る英國の信用

は未だ必しも失墜せりと言ふを得ず、只最近急激派たる國民黨革命新内閣に首相たり、後民間に下りて現に在野黨の首領たるサルタル、アサート氏の率ある所の漸く其勢力を失墜して、サベフダール氏の首相たりし以來、穩和進歩派たる青年波斯黨の實權を占め得來りたるの一事は露國のために聊か好望たりとせんか、青年波斯黨は大なる露國親善派たればなり。

### (三)兵力と列強關係

波斯の陸軍は正兵(ニザム)不正兵(ケイレニザム)及び傭兵(チャルキ)の三種より成る。首都に於る歐洲式軍隊は之を別とし、地方軍隊に至りては其實質驚くべきものあり、元一種の徵兵制度に係るも正兵すら別に年齢上の制限を有せざれば八十歳前後の老兵十五六歳の幼年兵と同一隊中に相伍するあり、舊時に在ては單にムスリマン、シート教民に限りて正兵に徵募したるに、近時に至りて基督新教民以外廣く他教民より徵募するに至れり、要するに名は正兵と稱するも軍隊として極めて不整一不規律を免かれず、その將校の如きすら一定の試験を経るに非ず、一定の養成所あるに非ず、多くは一種の賣買によりて其官職を獲るものにして、更に軍事上



の素養を有せざるものすらあり、不正兵に至りては一般遊牧民にして平時兵役の義務を有せず、有事の際政府よりの徴發に應じて軍務に服するものにして武器馬匹、被服一切を自辨調達するの義務を有す。正兵の總數七萬二千餘將校三千四百餘人、不正兵の兵員平時定員一萬九千餘將校二千二百餘人、即ち平時兵員十萬を超えず。

波斯軍隊の假想敵如何を考ふるに、一に接境の各民族なり、即ち土耳古人、土耳機斯坦人及び亞富汗斯坦人、是なり、舊時に在ては中央亞細亞なるトルクメン人の如き最強大の敵なりしも、露國の同地占領以來終に此方面に事を絶てり、而も近時に在る波斯軍隊の用を爲せるは多く國內同胞の騒亂に對したるに在り、テヘランの如き實に一九〇三年同四、五、六、七および九年に於て内亂的騒亂に兵を用ひたりしなり、而して國境上に於ける外國との戦争の如きも亦甚だ大兵を動かすに非ず、波土人間の交戦の如き以つて一例とするに足るべし、即ち一八七七—七八年に於る土耳古人との交戦に於る波斯軍の兵員配置を見るに、遠征隊の一部をケルマンンヤに、他の一部を北方なるホイに分遣し、前者に歩兵八大隊、不正兵騎兵三中隊砲二

十六門を後者に歩兵四大隊、不正兵騎兵千五百人砲三十二門を以てしたるに過ぎざりき、一八八五年中央亞細亞西方にトルクメン族鎮定の師を派遣したる時の如きも、歩兵二千六百騎兵四百に過ぎざりき、亦以て波斯軍隊の外征的實用の程度如何を窺知するに足るべし。

若しそれ波斯に於る兵事上の見地よりせる列強の關係に至りては別に一觀察を要す、テヘランに於る波斯カザンク聯隊即ち皇帝の親衛兵は波斯陸軍に於て露國を代表するものたり、其創立も三十年前に在り、之が聯隊長には露國の一大佐を以て之に充つるを必とし、聯隊中露國の將校三軍醫下士若干を交へ、乘馬兵一千徒歩兵五百將校二百五十より成り、八十人の軍樂隊をすら有し、一に露國式に教練せられたる近衛兵たり、一昨年夏革命動亂の際南方革命軍の城門に迫りて終に首都に入り、テヘラン市の街上に激烈なる市街戦を開きたりし際も、官軍として該カザンク聯隊の獨り皇帝のために戦ひたるあるのみ、露國の親衛隊に對峙して英國の創設したるものは首都に於る憲兵隊なり、一九〇〇年の創設に係り僅に二百五十人の下士官と四十二人の將校とを有するに過ぎざるも、編成の宜しきを得、制服の美



觀を保てる波斯兵中第一に居る。加ふるに憲兵の職責上は平時に於て優に他兵種の上に權勢を有するが如し。若しそれ獨逸に至りては最近時波斯革命派の政治の實權を收め得たりし以來頗に一勢力を斯壇に樹つるに至れり。一九〇九年秋新設の首都の二聯隊に伯林兵學校出身の二聯隊長を新任したりしは獨逸勢力の第一現象にして、爾來兵器裝具の多く獨逸よりの輸入を見たるが如き亦同勢力の發展とすべし。而も尙ほ一の留意すべき重要事あり、他なし西北境なるアデルベイジャン州が波斯陸軍の上に有する特種の優越なる地位即ち是なり。即ち全國歩兵總員の三分の一はアデルベイジャン州出身の兵士にして、而も一に遊牧民たる土耳其種族より編成せらる砲兵に至りては最近時に至るまで全然同州出身の兵員に限られたりしなり。そのハムセ、ハマダン、カヅウ、イスファガン州民より砲兵を見るに至りたるは最近時の事に屬す。而して波斯の西境及び西北境が漸く獨逸の勢力範圍たらんとする状態の近時吾人の容易に觀取し得べき所たるを思はば、アデルベイジャン州人の優越せる軍事上の價値は將來に於て獨逸を利することの多大なる亦多く言説を要せざるなり。況んや彼等の皆遊牧種族にして純波斯人に

あらざるをや。獨逸が其前線に這般優勢なる活動力の一大延長を有するの利益は僅に皇帝近衛の一聯隊と首都警備の一憲兵隊を保持する英露兩國の比に非ざるなり。況んやアデルベイジャン州の物資に富み波斯諸州中富強冠たりと稱せらるるをや。思ふに平時巧に同州民の心を收攬して一朝事に際して巧に斯民を煽動使喚せんか。所謂波斯官兵の大半を奪ひ得て波斯陸軍を根柢より破壊する真に易々たるべし。而して此の能く好地位を利用し得るもの露土および獨の三者あり。而も土や言ふに足らず加ふるにア州民の大部分は舊來隣境土領の遊牧民と善からず。近時兩者の小鬭争を交ふる頻々たるものあり。露や鐵路を延べて直に同州の境に臨み地の利に於て他に優逸すと雖も、一昨革命動亂の際州民の心を失へるや甚だ大亦速に回復すべくもあらず。思ふに獨逸が其汽船をウルミヤ湖上に浮べ、其農具をタウリゾの市場に上すと共に、州の南境に鐵路を延すあらん時、アデルベイジャン州民の民望は恐くは獨逸の上に集まらんか。露西亞は蓋し此點に於て高加索の南方に長蛇を逸したるが如し。



亞富汗の西北境上(明治四十四年三月日本及日本人所載)

(露印鐵道觀)

ボツダムに於ける獨露兩帝の會見以來波斯の問題は歐洲全般の視線を惹くに至り所謂露印鐵道なるものは其第一の產物として現はれ來りたるが如し而して議員ゾウエギンツエフ氏が露國の企業界を代表して高加索ベルチスタン鐵道會社創立の議を提げて倫敦に到れるの時タイムスは其紙上に於て露印鐵道新線路敷設の議に對して直に贊同(假令熱心ならざるも)を表しそのロストフ、バクー及波斯ベルチスタンを経て孟買に到る新線路の其距離に於て小亞細亞鐵道の波斯を経由して印度に延長せらるべきに對して優るべきを稱賛したりされど吾人を以てこれを見るに印度の境上における鐵道の聯絡は英國に取りて爾く單純なる問題に非ず印度の保全が永く亞富汗斯坦をその高壘深濠と爲しベルチスタンを防火地帯と爲すに於て保維せらるゝ以上亞富汗の西境に沿ひベルチスタンの南域を通貫すべき鐵道の其終點に於て印度西北鐵道の最端に聯絡せんことは或意味に

於て敵兵の濠を越えて我守備線に侵入し猛火の防火線を破りて我牆上に延焼し來れるに等し印度の防備を念とする英人に取りて露印新鐵道敷設の聲は當に一大警鐘たらざるべからず

予昨夏波斯に遊び裏海を渡り露國の所謂後裏海鐵道に由りて中央亞細亞を橫斷す途にメルヅを過ぎ南方遙に沙雲漠々の間に脈々たる山系を見東してアムダリヤの長橋を過ぎ更に東へ東して六百年前に於るタメルランの覇府サマルカンドに至りて其古刹に彼が墓を弔せり蓋しアムダリヤの流域メルヅサマルカンドの高地是れ寔に千古爭奪の地亞拉比亞人到り波斯人代り蒙古族征定しスラヴ占據す焉ぞ知らんこの史上紛亂の巷亦是れ現下英露紛爭の淵源たらんとは

吾人は先づ亞富汗斯坦の北境露領土耳其斯坦と相接する境上の狀勢一般を述べざるべからず蓋し亞富汗北部の二大市東に首府カプールあり西にヘラットあり一はヒンドクグーシ山系を負ひ他はパロバミサス山脈の南麓に在りて自然の牆壁を北方に有するも而もカプールの地露領バミールを距百五十哩に過ぎず若しそれヘラットに至りては露のクシク線の南端を距る僅に八十哩のみ而してア



ムダリヤの長流は源をバミール高原に發し亞富汗の北境を鎖しつゝ、遠く北流して中亞南部を縦貫してアラル海に注入す。思ふに露の一旦風雲に乗じて南圖の鵬翼を張る時亞富汗の北境域に軍を進むべきの便路蓋し三條ありサマルカンドよりグザールを経由してテレメツに出で、亞富汗のマザリシエリフを占領すべきもの其一、チャルジュイ驛よりアマダリヤ河流に沿ひてケリフに出で、以てアンドホイを占領すべきもの其二、メルグより十二時間程のクシク鐵道に由りて所謂クシキンスキーポストに至り境を越えて容易にヘラットを占領すべきもの其三なり。而して平時に在て第一第二の通路に亘れる露國境上の警備としてマキシム砲每一門に兵三十を有す枝隊を各哨所に配備し、そのホログ哨所の如き精銳にして頑強なる護境警備隊として夙に盛名あるもの而も亞富汗の守備に至りてはアマダリヤの左岸に僅に三個の哨所を有するも、何等露に對する特種の兵力を有するに非ず。若しそれヘラットの危に至りては更に甚しきものあり、メルグクシク間鐵路僅に十二時間程驛を算ふるハムルガブ河左岸に沿ふて亞富汗の境上に臨み一躍山路を越ゆる時ヘラットの市脚下に在り而もこの山路とクシク街道とは平

時に於るヘラット、メルグ間の通商路として三十萬留の貿易を交換するの地その山路と街道との難路に非ざるを證すべし。而して平時露國の土耳其斯坦軍團は一軍團のタシケントに本據を有するもの東に在て南方カブールを壓し、一軍團のアスハバッドに在るもの西に於てクシク支線を通じてヘラットを壓す。而して中亞亞富汗境上の此の狀勢こそ正に英人の間に久しく恐露の病根を醸成したりし所「露國と印度との中間に位するヘラットの位置は猶ほそれ娼婦の如きか、孰れか多く與ふるものに其身を容すとはハミルトン卿が其著亞富汗斯坦に於てヘラットの地位を説明するものにして亦正に英帝國の患憂を喝破し得たりし所蓋し最近半世紀に於けるヘラット市は或は英に露に時に波斯の占領する所たり。而して今僅に英に近きが如く、その一去一就は五十年前に於ける人口十萬の同市をして今日終に二萬を下る一小市に下らしめたり。而も戰略的及び政治的見地よりせるヘラットが所謂印度の鎗たるに至りては今猶ほ昔の如し。ヘラットより南方カンダハルに至るに南北三條の通路あり、その南路の通常街道たるもの實に三百七十哩のみ。而してカンダハルより六十五哩にしてニューチャマンに達して印度の境上



に臨み更に六十哩にしてクエックタ驛に送すべし想ふに此の危機の豫想こそ從來幾度か起りたりし亞富汗貫通の露印鐵道計畫に對して英國が絶對に反對を主張したりし所以ハミルトン卿が此鐵道にして完成を見んか英國は終に永久に露國を信すること能はざるべく英國の位置はヨリ一層小心留意を要するものたらんと云へりしは寔に適切なる評言なり記憶せよゾウエギンツエフ氏によりて企畫せられ今日列強の間に比較的協賛の聲高き新露印鐵道が其終點をナシキ若くはニエーチャマンと假定するに於て亦カンダハル南方の亞富汗印度の境上に近きことを

若しそれ亞富汗の西境即ち亞波兩國の境上に至りては更に一層の危機を感せずんばあらずヘラットは波斯の境を距る六七十里を出でずその市の南邊を環流するヘラトル河は亞境に入りて二分流しそのチャム河の北流する所波斯の舊市メシエツドありメシエツドより陸路の北上する所露のアスハットあり中央亞細亞軍團の所在地たり一八三六年波斯が露國の後援を頼みてヘラットに遠征を試みたる一八五六年波斯兵の再びヘラットを占領せる皆此の方面より境を越え

たりじなり而して後者の占領は痛く印度政府の驚を喚びて英軍は一旦波斯に代りてヘラットの占領を行ひ得たりしも少時にして英國旗の撤せられ再び波斯軍の占領に歸し翌五七年一月英國が時の亞富汗王ドストムバメツドと親善協約を締結したりし時波斯は尙ヘラットの占領を繼續してその七月に及びたりしが如きはヘラットの地が動もすれば其西境より壓迫を受くるの容易なるを證するに足るとせん今夫れ新露印鐵道の波斯を縦斷せんとする則ち亞富汗の西隣地方を境に沿ふて縦貫するもの假令その印度鐵道との聯絡地點をアトメダバットに求むるに於て特に途をベルチスタンの南方に取るとせんもその全線の通じたらん日支線をセースタンなるカヌラタバット(ハムン湖東岸の波斯の一市)に若くはヘラットと國境を隔て、相隣するルイ(一名バフ)に敷設延長したらんには是れ正に亞富汗の爲めに第二のクシク鐵道を更にそれ西境上に現實せらるゝ所以に非ざるなきを得んや而して是れ豈に印度の爲めに更に新なる憂を増すものに非ざるなきや

露國が百難を排じてオレンブルグ鐵道を起工し極東の大戦役中に拘らずウラ



地方をタンケント府に联接して莫斯科中亞間の鐵道聯絡を急施したりし所以のもの、その遠大なる志望の那邊に存するや、は多く問ふを須ゐず、一旦圖南の謀を定めて兵を亞富汗の北境上に集中せんとするや、オレンブルグ鐵道に由りて莫斯科方面の兵を送るに於て三十萬の精銳を中亞に集中するは、真に容易の業のみ、而も一朝新露印鐵道にして高加索波斯線の成らん日露國は更に中部露西亞の軍團を亞富汗の西境上に送るべく、一新路を開く所以、若しそれ前者に於てオレンブルグ哥薩克あり、後者に於て高加索騎兵及びドン哥薩克の在るにありて、恰も兩軍道の前哨たるが如き觀あるに至りては、亦一奇とせざるべからず、之を要するに從來の所謂露印鐵道計畫たる亞富汗の通過線路は、單に亞富汗の北境域に危險を感じたりしに反し、新露印鐵道として高加索波斯及び印度の聯絡は、亞富汗の西境域に新なる一大危險を醸成するものにして、而も北境域の危險は、これが爲めに、些の減退を見るなきなり、知るべし、新露印鐵道の敷設は、露國をして印度への二個の南下路を有せしむる所以にして、英國をして亞富汗境上の防備に二個の方面を作らしむる所以たり。

中央亞細亞遊記(二)

裏海東岸の市

九月七日午前船はクラスノウオドスクに着けり、こは裏海東岸の一市にして正に對岸なる高架索のバクトー港と相對し、裏海最北端の一市たるアストラハニと共に裏海沿岸の露領の三港として現に三角航路の開けある土地なり、さればバクトーは僅に海上十數時間の航程に過ぎざる對岸のクラスノウオドスクは之をバクトーの般昌に比すれば、眞個沿海の一寒村に過ぎず、此地高架索方面よりは石油を初として各種製品の輸入せらるゝあり、中央亞細亞よりは其西南部地方の棉花亦この港を経由して輸出せらるゝが故に相當の繁榮を見るべき筈なるに、船の着する時埠頭一人の出で、人を迎ふるものもあらず、只細砂の熱風に吹かれて新來上陸の客をして一種惘怠の氣を起さしむるのみ。

予は輕裝なり、一個の手提靴と一包の寢具とを携ふるに過ぎず、投錨後十數分にして乗客の上陸を開始したれば、予は殆んど先頭に棧橋に飛出でたり、而して數歩を



移すや予を呼止むるものあり、願れば露國の一少尉補にして予に近きて其露國民ならざるべきを言ひ外國人として中央亞細亞旅行の特別許可を有するや否やを問ふ。少尉補君齡既に四十を超ゆること四五下士出身にして見聞甚だ狹しと見えたり予を目して直に外國人と斷ずるの眼識すら乏しかりしが如し、而も此一事以て露の國籍を有するもの如何に各種各様の種族に富めるかを見、一面日本人たる予が如何に多くこの地方に散在する土民キルギスに酷類する所あるかを知るべし。予は直に旅券を取出して彼に示したるに彼は携へたる一冊の帳簿を開き予が姓の頭字によりて調査し始めたり。蓋し露都の當局が外國人に對して中亞旅行の許可を與ふるや、先づ後裏海州總督府に其氏名を電致し來り、總督府は之を第一の上陸地點たるグラスノウオドスクの警察に移牒し、その結果埠頭出張の少尉補君の手帳に伊呂波分として其姓名を記入せらるゝが如し、彼は其簿冊を再三繰返したるの後、かゝる氏名は旅行許可中に見えざれば貴下の上陸は許可し難しと予に對して宣告したり。露西亞官憲の執務上驚くべき手落行違は殆んど尋常茶飯事なり、予は靜に帳簿を借受け檢分して其記名なきを確むるや乃ちかゝる事もあらんか

と露都を發するに臨み我大使館に就て露國外務省の中亞旅行許可に關する公文の證明を請ひ置きたるものを取出して少尉補君に示し、且兎も角も上陸して旅館に止り事情の判明に盡すことの許可を乞ひたるに、些の毒氣なき此老軍人は帝國大使館の印章に驚きて此臨時の處置に同意すべく、獨斷擅行を敢てしたり。予は乃ち土人の人夫に荷を與へて海岸に面する一ホテルに投じたり。東行の汽車は午後七時半の發車なるに五時を過ぎて警察より何等の通知もなければ、予は自から警察を訪ふべく馬車を驅れり。道路は一面に砂地なるに而も凹凸多く、馬車は幾度か覆らんとするに土人テキエン族の御者は未熟の露語を以て好んで予と會話を交へんとす。暮色は早く人家稀なる此砂原に落ちて、車上海風の吹き加はるあり、岸を打の濤聲遙に聞えて途上復人影を見ず、況んや晝間埠頭に街上に多く其雅容閑歩を現はしたりし駱駝は既に其片影だに認め得ざるをや。予や此異域に新來の孤客たるも朝來何等の寂寥を感せざりしに、此砂漠の夕獨り馬車を驅つて中亞砂原の特色を感得するもの特に多かりき。警察に至りて直に例の少尉補君に會ふ。此邊暑氣の關係上、午下數時間を休憩して午後五時より九時までを執



務時間と爲すなり。予は少尉補君を促して總督府出張所に其所長を訪ひ、旅行許可通知の有無調査を求めんと言へるに、彼應諾乃ら馬車に同乗して町餘を隔てたる同出張所にその所長を訪へり。

### 外國人の中亞旅行

予は爰に外國人の中央亞細亞旅行に關して少しく辯せざるべからず。露領中央亞細亞は其領有後數十年各地の占領の先後あり、最後の占領に係るクシク地方すら其占領後既に二十五年を過ぐなるに拘らず、今尙占領當時同様、全域に戒嚴令を布きつゝあるの地なり。されば露國民および亞富汗斯坦人、波斯人以外の外國人にして尙も中央の一地點に足を入れんとするものは、先づ其目的地、通過地、滞在地及滞在日數等を詳記したる願書を自國大使館を経て外務省に願出で、外務省は之を參部本部に移牒し許可を得たる後初めて許可範圍に限り旅行し得るなり。現に予の如きも此出願に對し予に取りて最も重要な二個の地點に對して其旅行を否認せられたりき。即ちブハラ汗の居城たるブハラ舊市および亞富汗斯坦の境に臨め

るクシク支線への乗車とは一般外國人に許可せざる方針なりとて予が旅程中より削られたり而して其表面の理由とする所を聞くにブハラはブハラ汗の司配地にして半獨立國なるが故に露國官憲の獨斷を以て外人の旅行を許可し能はざる所クシクに至りては近く亞富汗斯坦の境にまで支線の延長せられあるも外人の同國境附近に到るは英國の最も悦ばざる所なるが故に露國人すら公務を帶ぶもの以外は其旅行を許さざる程なりといふ。されど外人に對して一種の閉鎖を中亞全域に行ふは其意一に此大地域の施設防備を能ふ限り他に知らしめざるの意に出づるや明にして中亞の全域が印度方面に對する兵路上の根據地たるに於いて、此處置は導る當然の處置とすべし。その露國に民籍を置く各種族中獨り機密洩洩の恐ある猶太人を限りて旅行上外國人同様これが特別の認可を必要とする規定なるより見るも如何に露の當局が兵路上の要義を中亞全域の土に認むるの切なるかを知るべし。クラヌフウオドヌク上陸の夕老少尉補君を伴ひて總督府出張所長(歩兵大尉)の前に立ちたる予は我大使館よりの半公文書を披きて露都なる當該官廳よりの予に對する旅行許可通報の有無如何を問ひたるに、彼は該文書と予



の旅券とを見合せながら確にかゝる氏名の記憶に存するを告げつゝ、下僚に命じて電報綴を持ち来らしめ、容易に或る頁を抜きて予に對する旅行の許可の正に十三日以前に到達しをれる旨を懇懇に予に告げたり、而して親しく予が側にありて鞠躬如として所長の調査如何にと構へ、許可通報の既に到れるあるを聞きて喫驚したり。此老少尉補君は、所長よりの激しき叱聲を浴びて恐縮の態度、嘲笑に堪へざりき。されど埠頭見張役の簿冊に予の名を逸したりしは、決して何等の故意に出でたるに非ず、只例の露西一流の手落行違のみ、而も此交渉往復に時間を空費して七時半發の東行列車に後れたりしは、予に取りて甚だしき苦痛なりき。乃ち已むなくこの一夜を裏海海岸頭の小旅館の一室に過さんとするに、二本の蠟燭の僅に室を照すあり、木製の床には枕頭床虫の群り到りて終宵安眠を得ざるに、岸に碎くるの浪聲は砂を飛ばすの烈風に和して更に夢魂を驚かすあり、驢聲に似て幾分緩和なる聲の何處よりか風に傳はり到るは、或は駱駝の夜風に嘶くの聲か。

熱砂熱風

翌起き出れば烈日は既に窓を射、裏海の海水は一種の灰色を帯びて蒸々の氣あり、三日一回の夕汽車に已むなく後れたりし予は此一日を消すべく飄然として小旅館を出でたるに、街上遇ふ所の人皆羊仔毛の總々たる深帽に薄綿入の更紗の長衣を纏へるを見る、その純然たる冬帽に奪る厚手の服を着けたる風態の此熱天地に甚だ不調和の感を禁じ得ざるも、こは猶印度民族の頭布を施すが如く、却て防暑の用をなすものたらんか、予は漫に時を消すべく街上を彷徨し、店舗を訪ひて乍ら近づき、漸く倦みて旅館に歸らんとするの途上、長衣毛帽の一土人の悠々駱駝を逐ふもの、變則の露語にて頻に予に向つて乗用を勧むるに會ひ、予の好奇心は忽ち動かされて生來未だ經驗なき駱背の人たらんを欲し、乃ち駱背を約して試乗を望みたるに、彼は何事か簡短なる命令辭を駱駝の上に加ふるや、否七尺裕なる此奇獸は忽ち前足後脚を三折して予が前に平伏したり、予は多少乗馬の經驗あれど平伏したる彼が忽然として體を起すの時、短軀なる予が身の危険を想ふては、その如何に跨り如何に急に處すべきやの苦心に囚はれざるを得ざりき。四邊を見れば早や既に此珍客の態度に幾分の興味を喚べる土民の寸數集り到りて予が上に凝視する



あり、意を決して持主の敵ふるまゝに鞍に跨り革紐の片鞆を右手に握り左腕を延べて長々しき鬣を振り、渾身の力を内股に寄めて強く肩の邊りを締めたり、やがて土人は駱駝の口を取りて引立つるに彼は悠々三折せる脚を三段に延して身を起せるに予が體は覺えずして既に七八尺の上に在り、一步又一步彼が緩歩を運ぶ時反動甚だ緩にして微駝背の必ずしも耐へ難からざるを感じたり、駝背にゆられて丘陵の砂地を徘徊する半時熱砂を吹ける熱風は駱駝の鬣を亂し先導せる土人の毛帽を弄びて更に遠く裏海の水面に消え行くなり、丘上更に駝背を加へて身に一段の高さを覺えたるの予は烈日の強く予が頂を射るを感ず、熱風熱砂而して此毛帽長衣暑を嘲けるの土人此悠々緩歩千里を遠しとせざる褐色獸のあるありて、中央亞細亞の真光景は駝背の半時に予の充分に味ひ得たる所なり、予は發車時に先ちて午後七時停車場に到るに憲兵の下士二名既にありて予がために切符を買求め、車内の座席を斡旋す、蓋し來遊外國人の至る毎に此流の警戒を施すに慣れたる彼等は辭令甚だ巧妙なり、予は第一停車場に到るに、予は四邊の光景を見るべく發車前特にプラットフォームに漫歩を試みるに、列車は

二三等車六輛を聯ね更に後尾に食堂車を附す、一等車は毎にあらすして時に土民乗用のために四等車を聯結する事ありといふ、正面の時計は露都および當地二様の時間を示せるに露都の遅るゝ時差三時間半なり、機關車の高大なるは西伯利鐵道列車のそれと同様なるも、この地後裏海鐵道の一般に石油を燃料とせるがために一種その型體の異なるを覺ゆ、二等車の乗客は予以外皆軍人官吏にして制服制帽の次なり、アルメニヤ人の棉花商は海上船暈のために一日の滞在を爲し圖らずも再び予と同車し予に對座して好談敵たりき、

### 沙漠鐵道

裏海の東海岸よりアムンバツ下までは汽車にて三十八九時間を要す、クラスノウオドスクを夕方に出發したる列車は第二日の終日終夜を徹して際涯なき沙漠を東方に走れり、列車の速力車站の距離五六里乃至八九里にして一停車場を見る客車の整備殆ど西伯利鐵道の急行列車と同程度なり、その燃料を石油に取りたる點々丘陵せる林地以外樹木なく山地なく終に薪材と石炭とを得るに由り、近



く裏海の對岸に天下の大産油地があるが爲なり、而して中央亞細亞鐵道の諸設備中最も吾人を驚かすものは運水列車の装置これなり、千里の沙原一條の水流だに乏しき中亞の沙漠に數百哩を走るべき機關車が如何に水に渴すべきや、眞に吾人の想像以上なり、されば三十餘輛を聯げる運水列車は一日一回全線を數管區に分ちて機關車および停車場用の用水を各驛に運搬配分するものにして、その車輛は通常無蓋貨車の平坦なる車臺の上に我釀造酒庫内の大酒桶同型の水桶を装置したるものにして、一輛優に十石以上の水量を蓄ふるに適す、吾等が列車後尾の食堂に於て命ずる一杯の茶も皆この運水列車の賜にして各驛に分配されたる貯水を更に列車の着驛毎に停車時間を利用して之が分配を受くるものたり、一滴の水に千金の價あるこの沙漠原頭の汽車に於て初めて感ずべきなり、正午時車内の気温は確に九十度を越えたり、十月も既に九日を過ぎたるに駱駝の國、沙漠の地は終に冬を知らざるに似たり、南方夏雲の幾變化を呈するの邊脈々たる山嶺の烟の如きものあるは正に波斯を中亞の露領より界する連山なり、亞歷山大帝マケドニアより到り大波斯蹂躪の餘勢を以てアレキサンドリヤ府を今の

ルダに興し、ニサ府を今のアハル、チエキン林地に開きたるの時も亦この山脈を越えて北進したりしなり、數萬の亞拉比亞人が六三六年を以てこの砂原頭の林地に侵略的移住をなしたりしも亦此雲山漠々の境より北進したりしなり、然り今予が唯一の東方日本人として北邊のストラグ族と共に談笑の間に過ぎ行くの砂原こそ即ち所謂ドゥーランの高原にしてイランの高原と山脈を離て、南北に相隣するの處無心の旅客に取りては漠々たる一砂原に過すとすも、正にこれ人類の史上最も重要な演技場の一たりしもの、その有史以前における各民族の漂泊移住の勢は永く此地域に繼續せられて、移住の大勢は終にバミール、ピマラヤ、ヒンドウグシの三方域よりこの砂原に集中して更に海を越えたりしなり、車外熱風の吹く處砂上天幕圓屋の點在して例の毛帽長衣の土民三々伍々その邊に徘徊す、駱駝の或は緩歩し或は座臥するもの悠々として夏雲を眺むるの態あり、細砂の間に尺に満たざるの草を見るは土人のカリユーチカと稱するもの、夏時之れを乾燥し冬季駱駝の糞に充つるもの即是、



## 裏海東岸小史

露領の後裏海州中最も有名なる地としてゲオク、テベあり、長く該地域の領主たりしトルクメン族の城塞所在地として其名寧ろアスハバッドよりも高し、ゲオク、テベに小博物館と稱するものあり、事實戦争記念館なり、即ち三十年前露軍の裏海を渡り來りて、勇猛なる土族トルクメンを征服するに當りて、曾ては露都戦役に驍名を馳せたりし白衣將軍スコベレフの終に彼等土族の銃丸に斃るゝあり、折廢たりし露兵の皆是等土族の毒手に皮膚を剝がれ、眼球を抉られたる慘劇苦闘あり、僅にゲオク、テベの要塞を陥れてトルクメン族を征服し、アハル、チエキン林地を併領し、テベ亦チエキン族を征服し得たりし苦戦の紀念として、當時の武器被服および將卒の畫像を陳列せる小記念館にして、驛の背後にあり、往來する列車之がために特に七分間の停車を爲し、乗客亦皆車を棄て、此絶念館に走り到り、征討戦當時の追憶に少時間を費すなり、アラ、海以南裏海以東の大地域その領主を代たりし幾度なるを知らず、その北西部にウスト、ウルト地方あり、これ土語に高原を意味するもの

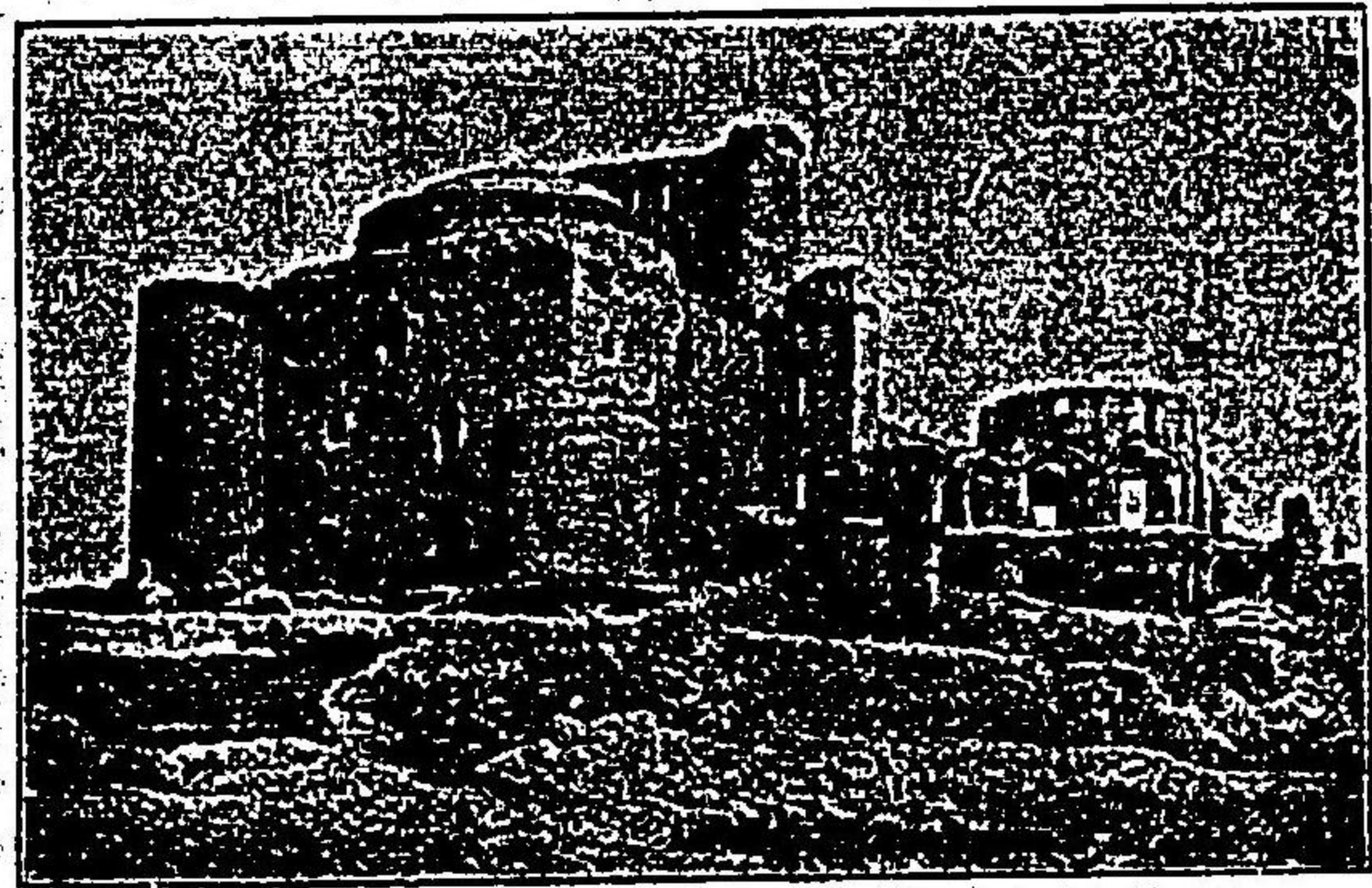
實に海拔七百フィートの高地たり、而も東南方に及びて中亞の最大河流アム、ダリヤの流域に諸小流の相會流するの邊に至るや、地勢一變して低地となり、裏海の水面より低きと五十フィート、地理學者が有史以前において曾て一度は海底たりしと稱する處而してこの南北に相高低する一大地域こそ波斯人に亞拉比亞人に蒙古人に幾度か其領主を代へ終に先世紀の後半季に至りて今のスラヴの手に落ちたりしもの、その間南方の大地域メルグ、府先づ亞拉比亞人のために興り、後一〇三六年トルクメンゾク族の領有して所謂セリシエ、ク朝において其繁昌の絶頂に達したるに、一三一九年蒙古族の東方より到るあり、成吉思汗の一將強兵を率ゐて其鐵蹄にこの大地域を蹂躪し、市に火し、民を塵にして、メルウの府は灰燼のまゝに遺棄せられたるも、實に約二百載後一三八四年に及び蒙古の大遠征者タメルランあり、遠くマザンデラン地方の波斯人を脅さんとするの途府をナマルカンドに興して、茲に百數十年の覇業を開けり、中亞の歴史に光彩を點じたりし所謂帖木兒朝時代即ち是なり。

十六世紀に入りて波斯人の蒙古族に代りて三度中亞の領主たると二百五十年十









(ドツバスタ) 古寺院城

て貴下の來着を迎ふるなりといふ辭極めて懇懃傍らの憲兵下士に命じて予の旅具を擔ひて馬車に移さしめ更に予に向ひて最良の旅館を指定したり予は萬事命せらるゝまゝに行動し直に馬車にて旅館に急ぎたるに中尉は予の背後より自轉車にて隨行し至れるなり沙漠原頭の市街馬蹄の急奔する處十丈の黄塵を揚ぐるに知らず馬車背後の彼は十五分時の疾走に果して幾何の砂塵を呼吸し得たるや、グランドホテルは總督邸廣場の前面に在り場の中央一基の碑を見るこれ露の勇將スコペレフを記念するもの碑下の小花園には紅紫の草花多く行人の目を惹くに四圍の高樹梢上早く黄葉を見るグランドホテルに入るに主人の出迎ふるものその鼻梁の自から猶太人たるを語るあり予の日本人たるを知るや特に歓迎の情を表し樹蔭に面する一室を擇びて予に與ふ而も

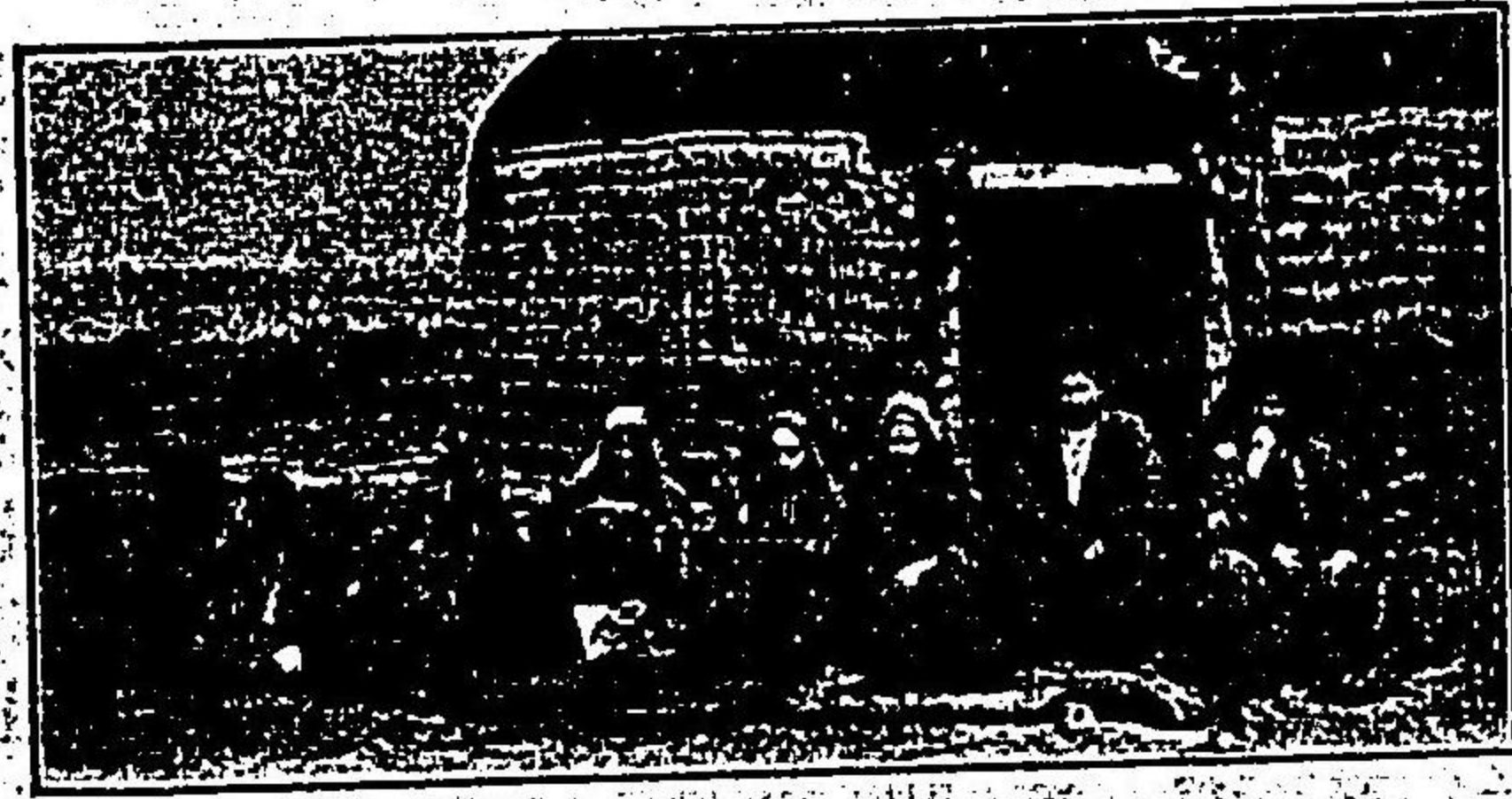
予の旅衣を解き水を呼びて旅塵を拭はんとするの時忽ち戸を叩きて入り来るものあり軍服に勳章を帶び拍車を鳴して二三歩室内に入り来る予は手早く服を着け了りて彼の前に立てば彼は刺を出して當市の警察署長なり日本珍客の御來着を聞き取敢へず挨拶のため參上せりといふ予乃ち席を與へて予が旅行の經過などを談じ中亞の風物の日本に知らるゝことの少き予は筆を載せて來り遊ぶに過ぎずと語るや彼は日本人の來遊するもの極めて稀なるを云ひ戰役後二組の日本旅客を迎へたるに過ぎず平山大尉および濱面中佐なり大尉は今既に少佐にして濱面中佐は既に大阪聯隊に在職せらるべしと附加へたり知るべし露國官憲が中亞旅行の日本人の上に絶えず注意を拂ふことの如何に精細なるかを而して彼は終始予の旅具に注目し其旅具旅裝の極めて簡單にして平凡なるより予が軍職以外ものなるを諒得したるが如く約十五分にして辭令巧に予が許を辭せりこれを旅館の主人に質せる英國人の來遊するもの月に十人内外に及ぶも露官憲の特に來り訪ふものなきに平山少佐來着の時の如き當旅館の支關は露國の士官下士を以て充たされ夜間も二三の露國將校接待役の名の下に別室に附添ひたる程なり



と語れり。

### アム、ダリヤ河畔の土族

アム、ダリヤ河畔における滞在は豫め二日間の許可を得たるも、予は一日逗留に全市の概観を収め得んと欲し、午下の烈日を冒して杖を街上に曳けり。此邊四、五月および九、十月の雨季を限り小雨を見るも、その餘四季を通じて一滴の雨なく、而も短期の冬を除きては烈日熱風の常に砂原を照すが故に、アム、ダリヤ街上の並木は亭々霄を摩するに拘らず、枝頭翠色なく、樹葉下垂して雨を欲するに似たり。市は自から二區に分れ露人の官邸、住宅商店の一區を成すに對し、土民の市場住屋を聯ぬるもの他の一區を成す。露人區は今正に午睡時間なり、中亞官衙の通規として正午より夕六時迄一切の執務を廢するが故に、街上稀に行く者、只赤袴青帽のカザック騎兵を見るのみ。一巡して土民街區に到るに、荒壁の陋屋軒を聯ね、屋前小溝を掘りて水流を引き、時々水を汲みて街上に撒布し、以て僅に涼を取るなり、而も土民の多くはその状暑を知らざるが如く、街上に軒頭に幾群團を作りて、喧囂を極む、樹蔭に



アム、ダリヤ河畔の土族

は朝來馱載に疲れたる駱駝の巧に長脚を三折して坐臥するあり、水邊にはサルトの兒童相集りて冷却せる甜瓜を味ふなり。市場に至れば若干の穀類と牛羊肉類の山を爲すありて、復些の魚類蔬菜を見ず、魚菜を有せざる市場は多く類を他に見ざる所亦中央亞細亞特色の一たらずんばあらず。

蓋しアム、ダリヤ河畔に散在する各種土族は其流域中の最大林地たるアム、ダリヤに集中すると多大サルト族、チニキン族、トルグメン族、而して少數のキルギス族、該種族は寧ろ東方に多數の分布を見るあり。チニキン人は農作と絨氈の製造を以て業とし、軀剛健老を知らず、六十歳尙三四人の妻女を擁して子を擧ぐるものあり。トルグメン族は昔時にあつて此邊境に掠奪的生活を送りたるもの、アム、ダリヤの流域より境を越えて阿富汗斯坦に波

斯ホロサン地方に隊商襲撃を事としたるより、行客この邊に絶え隊商この地に至



らず爲に往昔繁昌を極めたりし諸市皆零廢し、豐饒なる林地亦荒蕪に歸せり。而も彼露人の征服に遇ひてより一時に雌伏し、今や順良にして勤勉なる錦花栽培の土着民たるに至れり。若しそれサルド族に至りては中亞の美少年族を以て聞ゆるもの駝背に夕照を受けて家路を急ぐの少年皆明眸白面の美貌兒、特に眼彩の白人に酷類するある正に蒙古人系のキルギス族に比して異彩あるを覺ゆ。

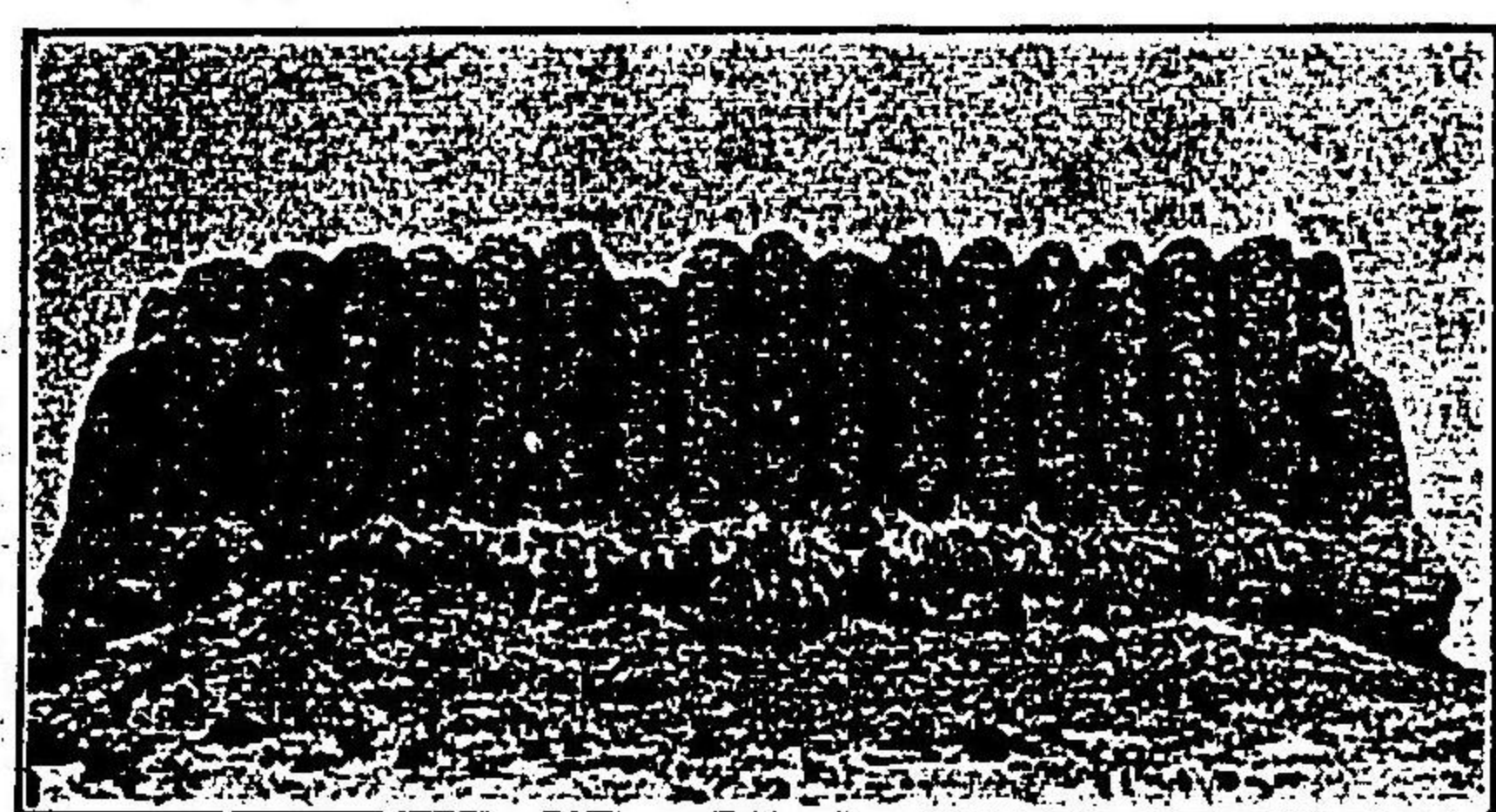
アム、ダリヤ河は源を東方バミール高原に發し亞富汗斯坦の北方を貫流し露領中亞に入りて北流一千餘露里、その間幾多の三角洲を作りてアラル海に入る而してアム、ダリヤ河西裏海以東の地域所謂後裏海州五十萬方露里中各種土族の散布するもの三十七萬を算しトルクメン人その七割に居る。カピツカと稱する圓形の土人天幕、アウールと名くる土族村落の或はアム、ダリヤの水邊に或は汽車の沿道に散在する多きが如きも、畢竟一方露里に一人の住民を充たし得ざるの地、人口の稀薄と生産力の微弱と以て知るべきなり。之を東方サマルカンド方面の一方露里約十四人の人口に比すれば亦東西兩地域生産力の差の如何に甚しきかを知らるに足らん。

### 亞富汗斯坦の隣域

アスハバッドに一泊したるの翌朝、同市の博物館に亞歷山大帝遠征當時の遺物數點を賞玩し、馬車を驛站に急がせて十一時發の列車に投乗すれば、昨此處に出で迎へたる中尉君復既に在りて予を送るあり。汽車は夏雲靜なる沙漠原頭を東に奔るに、南方遙にコペトダグ山嶺の脈々露波境上に聯るもの、恰として長城に似たり。車窓閑なるまゝに予は靴底なるハミルトン卿の亞富汗斯坦を取りて耽讀するに、身その北境域に在りてこの世界的領國の事情を書中に聽くの感興特に大なるものあり。乃ちこの一夜を車中に過して翌、眠より覺むれば汽車は今メルグ驛に着して半時餘の停車を取らんとするなり。

メルグは四通八達之地なり、北にヒワ汗領東北にブハラ汗領而して南方へ亞富汗斯坦西南方にあつて波斯への通商的中心地點として彼之産貨の集散する所、而してその南方に走れるクシク支線のこの地より分岐するにおいて特に重要な意義をメルグの上に加ふ。即ちメルグ、クシク間鐵路僅に十二時間程驛を算ふる八、





メグルに於る城塞の遺墟

ルガブ河の左岸に沿うて奔り、更に露西亞境上のクシクより北部亞富汗斯坦のヘラットに至る亦僅に六十露里(我十五里内外)を出でず、蓋しムルガブ河畔の街路は平時に在てこそヘラット、メルグ間の通路たり、又中亞亞富汗間通商路の一として北より一ヶ年五六萬留の砂糖、石油と南より二十萬留の棉花、獸毛皮の輸出入商路たるに過ぎざるが如きも、この河畔の通路と沿岸の鐵路とは是れ正に大英帝國の不斷の憂を藏する所、英のハミルトン卿がその著「亞富汗斯坦」に於て露西亞と印度との中間なるヘラットの位置は猶それ娼婦の如し孰れか多く與ふる者に其身を容す」と説きたりしは、これ眞に英帝國の憂を喝破したりしもの、ヘラットは實に亞富汗王の政府には却て遠隔の感多きに反し、その露の提言に聴き印度政廳の勢力を視るにおいて常に鋭敏なるが如し、而してこの地點の英露に爾く重要な一事こそ中亞旅行外國人

のクシク支線の旅行に對して英の之を憚ばず露の之を許さざる主なる原由たるなきを得んや。

本年三月は露國がクシク方面全域の完全なる占領を了したりし滿二十五年なり、その占領紀念祭をアスハバッドの陸軍集會所に催すや、當年其軍に参加したりし參謀ベトロロフ中佐の占領戰紀念講話あり、印刷して部内に頒ちたりしもの、予これをアスハバッドの二猶太商人より獲たり、露の占領戰は素境上の土族との間に行はれたりしも、而もこの書によりて當時對戰の實情を想ふにこの境上の占領戰は直に露人と亞富汗斯坦人との闘争にして、亦實に露國と英國との拮抗たらずんばあらず、メルグ驛に吾等の二等車に投乗したりし亞富汗人四人あり、ヘラットの茶商人として印度茶をブハラ汗國へ賣込まんとするものなりといふ、是に露西亞製の長靴を穿ち、二人の白頭布を施すに對して他二人は露國産の羊毛帽を戴き、比較的巧に露語を使用し、又英語を語れり、予はこの四人者とブハラ驛への十數時間を間斷なき對話に消して、ヘラット人の一般を諒知し、ハミルトン卿の所謂娼婦の態あるに想到し、亦併せて英國がカブール及びカンダハルの兩地より特に一部の



軍隊をヘラットに常派し置くの深慮を自得するを得たり然りヘラットは主として農民の市その兵の如き農を懐ふの専らにして亦何等兵を解せず弊服破帽見るに堪えずと稱せらるヘラット人の戦略心なき若しヘラットを擧げて單に彼等兵士の手にのみ委したらんにはその地早く既に露人のものたらんとハミルトン卿の憂慮は英國が特派軍隊常置の眞意にして亦その該地點を維持するの苦心を察するに足らん。

汽車は三十分時にしてメルツ驛を發し旅行を許可せられざる日本人たる予は已むなく亦この地を發したり而もクシクの支線は眼前より南に延びて遠く地平線上に没するを見る露印鐵道の世に議せらる今日亞富汗斯坦境上の危機を叫ぶは甚だ事を好むに似たらんも英國の亞富汗北境に對する不斷の憂は果して爾く容易に霧散すべきや否。

### ブハラ汗領

ブハラ汗領は中央亞細亞に於ける露領域内に介在する半獨立國にして廣袤實に

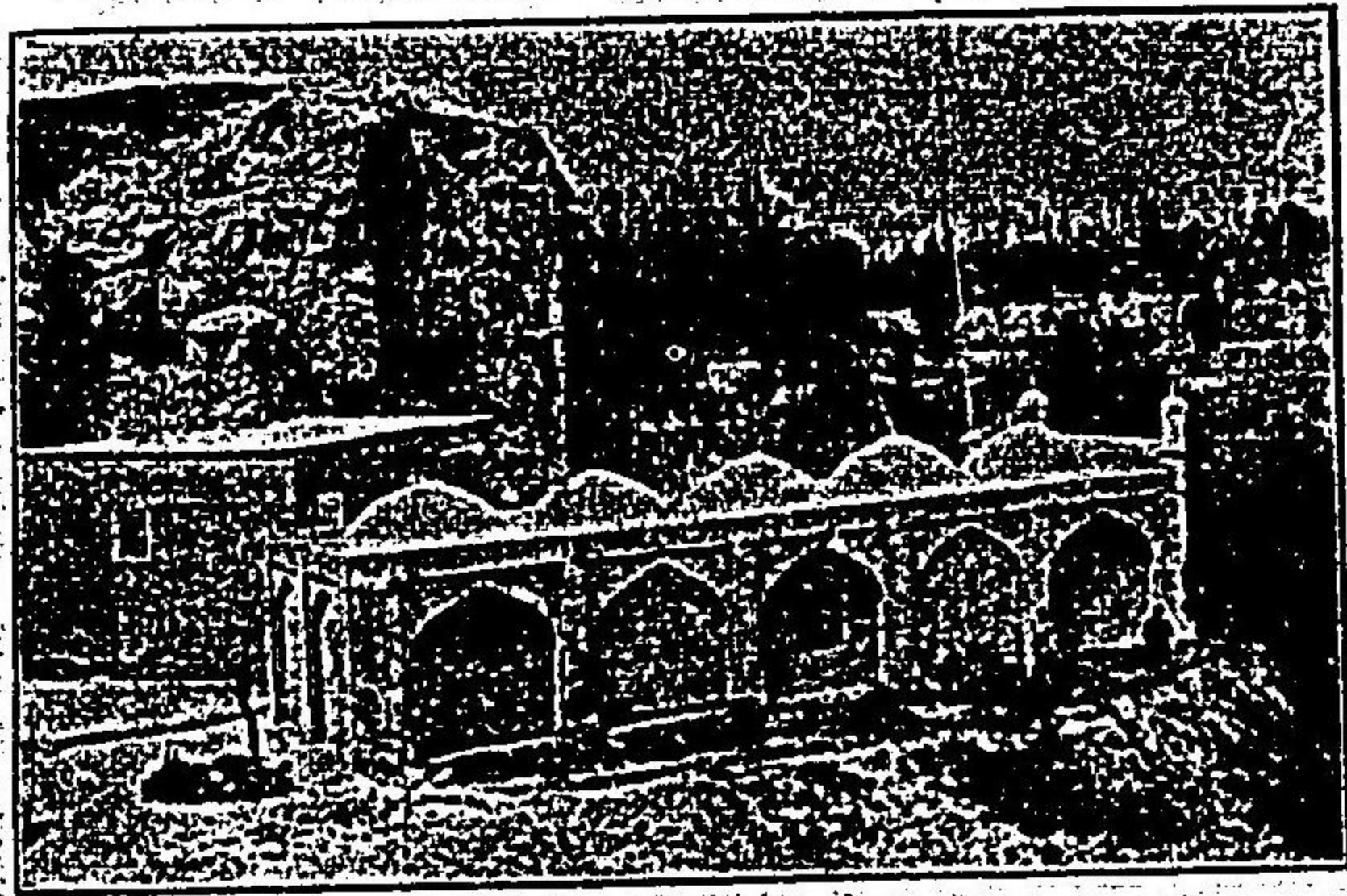
二十一萬七千方露里と稱せらるクシク支線の分岐點たるメルツを距る三百四十露里汽車九時間餘にして達す途上アムダリヤ河あり獨り中亞細亞の最大河流たるのみならず我十四町に餘る同河上の鐵橋はドン河の鐵橋に亞ぎて露國第二の長橋と稱せらるメルツ以東露波境上の山脈漸く南邊に近く小林地の遠近に點在して沙原の寂寞を破るはアムダリヤ河水の賜たらずとせず近時英國の企业家多く中亞の地を踏破してアムダリヤ河流の利用に想到し大運河を此處より開鑿して大に開拓の實を中亞の全領域に擧げんとして計畫交渉を見つゝあるが如きは最も當を得たるの畫策とすべしキルギス土人の桃を同流域に試植せるもの一年の成長驚くべきありと稱す而して之を棉花の繁生に見るも中亞の全領域にして幸に水の潤澤を得んかその暑氣烈日と相俟つて露國の領土中蓋し多く比を見ざるの好豊土たらんブハラに近き邊林樹愈々多く黄色を帯びたる畑の相連り紅白の頭布を戴けるサルトの老幼の出で畑を打つあり

アムダリヤの東岸一帶は即ちブハラ汗の領域にしてその南隣は直に亞富汗斯坦に接し露國亞富汗間に於て境界線の争議と國境上の防備とに關し最も多くの注



意を絶たざるの處一八八四年の露英委員が露亞兩國のために境界を協定したりしも亦實に此國境なり。ブハラ汗の宮殿はケルミネ驛(メルク)の東四百二十七露里の北方約我一里程に在り、壕を鑿ち廓を高くし、林地に圍まれたる清楚たる半歐風の大夏をなす。ブハラ城即ち是而して新ブハラ市はその西約我二里の鐵道沿線地にありて、東站をカバン驛と稱す。驛の構内通常待合室以外特にブハラ汗の休憩室あり、錦繡の調度目を飾らすに足るものあり。露の強大を以てして、沙漠の一酋長を遇する尙此の如きは正に新附民族撫育上の周到なる用意にして、亦能く數十異種族を併せ吞む所以たらずとせず。

ブハラ汗領下の人口は約二百五十萬と稱せられ、土耳其種族、イラン民族および猶太人を包有す。汗の軍兵總員二萬砲二十門、その政治組織に至りては裁判を司どる司法卿および財政を司どる大藏卿ありと雖も、事に汗の獨裁に出づ、而も行政の方法に至りては稍々社會主義的傾向を帶び、土民各自交るゝこれに當るの制にして、國家の公吏として俸給を受くるが如きとなし、而して土地の豊饒にして農作の發達せる棉花小麦の生産はブハラ汗領の土民をして比較的富有の生活に安せ



汗 古 城

しむ領内の牧獸馬八十萬頭駝二十萬頭羊六百萬頭を有するが如き亦以て露國政府が彼等を優遇するの至當なるを察すべし。

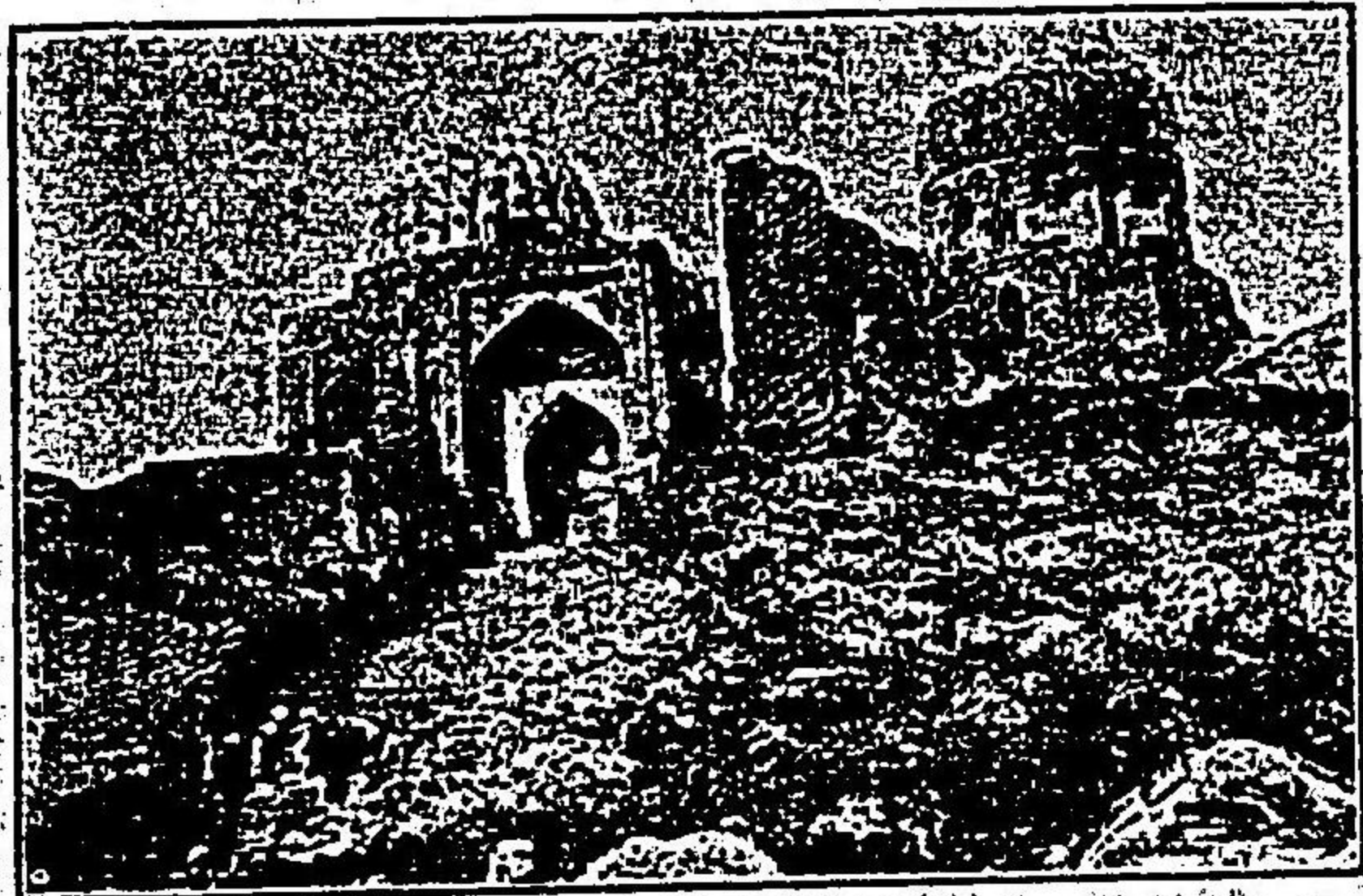
ブハラ汗領の富を成すもの更に他に一因あり、領内の猶太族これなり蓋しブハラ汗の猶太人は歴史上有來するところ甚だ遠く、史家の間に種々の言説あるもの往昔軍虜として此地に到れるが如し、彼等は回教民の間に介在して常に窮迫と抑壓とを蒙り、ブハラ舊市に在ても一定の廓内を限りてその居住を許され、一定の服裝を強られて一見サルト族の判明に便せらる。その他乗馬を禁せられ市民權を附與せられざる等無法の壓迫に遇ふも、而も民族特有の精氣はこれが爲に挫かれず、營々として商業に従事し亞富汗斯坦を通じてブハラ印度間の貿易を獨力に經營す。ブハラ汗領の富力が彼等に負ふ所の大なる知るべきなり。ブハラ汗領の通貨



たるトキリヤー(約我三圓に相當する平扁なる金貨)チエンガー(約我十五錢に相當する亞拉比亞字ある銀貨)ムキムキ(約我四錢無記刻の銅貨)ブール(約我二厘五毛無記刻の真鍮貨等)が盛に南隣亞富汗斯坦に流入するあるは兩地間の貿易關係の密接なるを證するに足る。

サマルカンド(上)

メルヅンハラの二要地を不本意にも空しく通過したりし予は午後七時過サマルカンド驛に着せり例に依り二三名の憲兵下士に迎へられて馬車に移り然るべき市中の旅館に至るべきを命ず乃ら三頭立の馬車は鈴音高く坦々たる直路を疾走するに相前後して數輛の馬車の亦サマルカンド新市街に向ふあり途上兩側の並木は亭々二十丈に餘りて樹林の隧道を成し路傍淺溝を穿つ處水流の濛々たるあり仰ぎ見れば銀河の群星を擁して低く梢上を壓するものあり兩側人家の相聯なるもの多くは荒壁土階の陋屋なるも燈火の窓を徹して路上を照し時に驢聲の屋後より到るある光景宛として我宿驛に似たり車站より市街に至る道程六露里大



フナフナ寺(サマルカンド)

永く彼スラヴ掌中のものたるが如し。

道の直通するありてその樹梢鬱蒼たる水聲の潺々たる沙原頭林地の特色を見る。その馬車の疾走する時途上の民家人聲なく樹下自ら涼風を生じ水邊亦時に流螢あり而して車上の孤客仰ぎて樹間の群星を見る時胸中只五六百載の昔にタメルランを憶ひ六百年前の昔にマルコポロを懐ふ知らず東方亞細亞の民族を提げて大波斯を驅逐し覇業を此地に開きたりしタメルランの壯圖はヴェネツィヤの一市民として單騎この地を經由し遙に中亞を横斷して極東に到り漸く新世界發見の曙光を天下に與へたりしマルコポロの偉勳と孰れか大なる而して五六世紀の後偉大なるスラヴの此の地を領有するありて六露里の道程數丁毎に大アーク燈の樹間と途上とを照すあるを見ては波瀾に富める此の優勝の地點も終に



六露里にして並木道の盡くる處サマルカンドの新市街こゝに開く樹下の静暗は一變して煌々たる街衢と喧噪なる民家を現出す軒頭椅子を持出で涼を取るもの涼夜を利用して水邊に衣を洗ふもの囑目皆夏の夜景たり予は市中最良の旅館中央樓に投宿せるに樓主夫妻亦猶太人なり予を迎へて歡ぶ限なし更にその予がために手荷物運び到るの壯者が慣々しげに予に對して簡單なる日本語を交へたりしは予をして少からず驚嘆せしめたり後彼の茶を運び來りて語るを聴くに彼は道後に濱寺に捕虜として我に收容せられたるもの邦人の友愛心に對して無限の感謝を銘記するに似たり夜食を了るの予は旅館の主人に對して警察への到着届を督促せるに主人微笑して言ふ戦後の今日貴國人に對する警戒亦戦前の嚴なるが如きあらず貴下の旅券にして連式ならざるに於て明朝これを警察に致す未だ晩からずと而して彼予を導きて後庭の涼臺に至り紅茶一碗靜に日露戦前の此邊境の實狀を予に語るに當り予は聴き棄て難き一事を彼の談話中に知れり彼言ふ一九〇四年(明治卅七年)一月の事なり眉目秀麗の壯者血色稍々白人に類するもの波斯人と稱して我旅館に投じ到るあり旅券を徴せるに明かに波斯人の名を

署するも舉措甚沈靜を缺く而して彼が出發後直にその日本士官たるを知り得たるにこれより正に三週日後宣戰の布告ベテルブルグより到ると予曩に新嘉坡を過ぎて波羅的艦隊のマグダスカル駐碇の日邦人の馬來漁夫に扮して海峡に日夕帆船裡の人たりしものありしと聞きしに今復此北域に隠れたる此珍談を聴く快心の事共なり

### サマルカンド

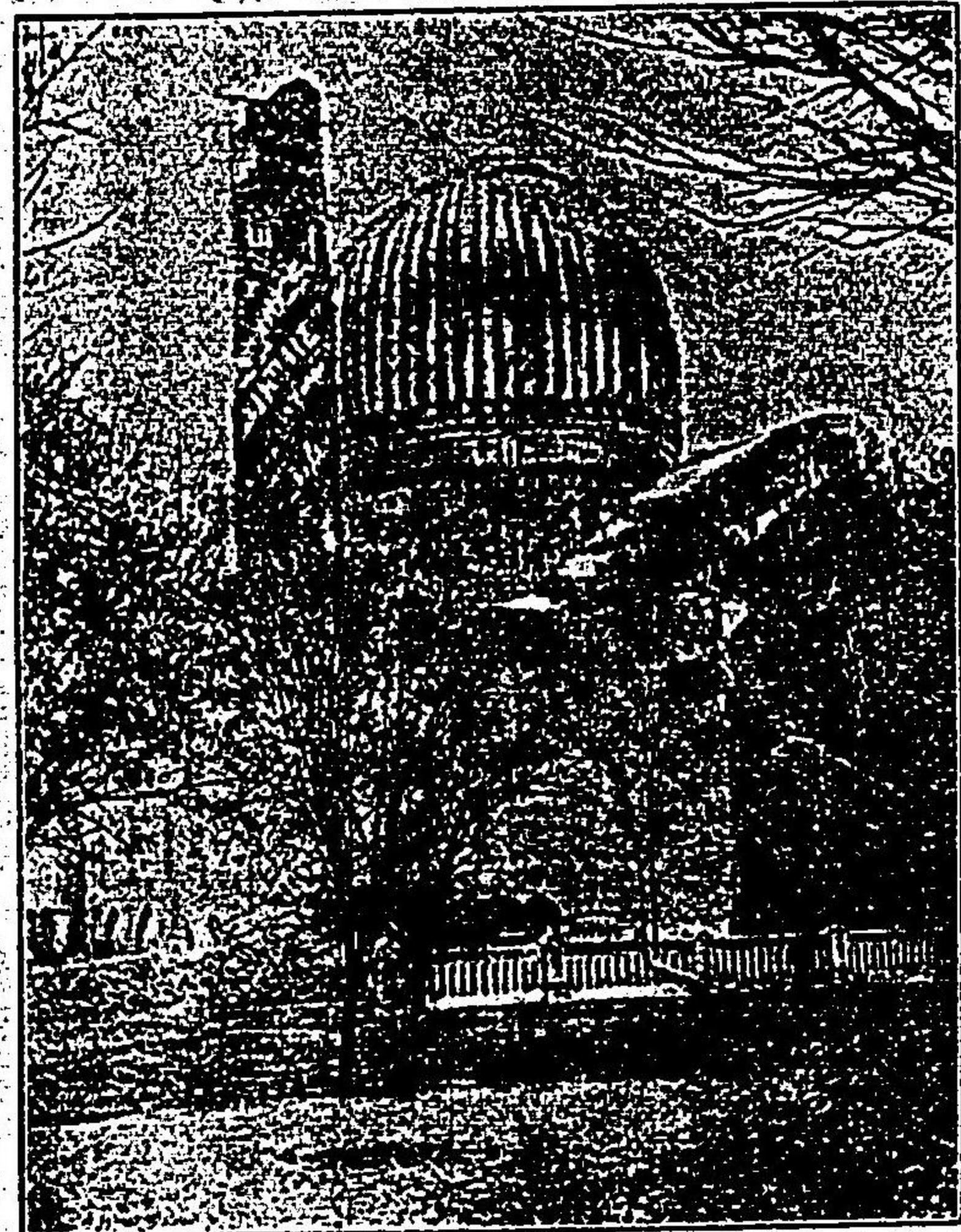
サマルカンドは亞細亞の羅馬なりかゝる賞讃は前人の既に下したりし所たるや否予之を知らず只予はサマルカンドに遊びその舊市に廢墟遺跡を訪ふて爾く直覺したりそのピ、汗大伽藍の半崩壞せるもの規模の宏壯なるに於て羅馬バラタイン丘下のテンブル、オゾ、オトガスタスの遺址は孰れぞ更にバキ、ベギンド(極樂園)の意の樂苑とその宮殿の跡を弔ふ時雄大と豪華とにおいて必ずしもコロッセオの大を想はず更に又その彫刻壁畫を見るに及んでは誰れかホムベイ舊市の廢屋壁間の畫趣を思ばざらんや予は重ねて言ふサマルカンドは眞に亞細亞の羅馬なり



新市街の中央樓に一泊の旦予は馬車にて警察署長を訪問し來着の旨を報じ了りて直に馬車を舊サマルカンドに驅る。舊市は露人の新市街を距る三露里我二十八九町大道八達し並木鬱蒼たり而して予は今他の舊跡に先ちて鐵寺にタメルランの墓を弔せんとするなり蓋しタメルランの稱呼素チムルランにして、チムルは鐵を意味しランクは寺院の稱その鐵寺がタメルラン自身の建立に係り又その石棺の横はる所以ありとすべし。

寺門の前に馬車を駐めて予はそのサルト人の御者を導として歩を連ぶに、鐵壁の門に沿うて廻れる處垂柳の老幹翠枝新たに門側の圓柱瑠璃半剝落して古趣津々たり。寺門を入れれば十數丈の堂宇先づ人を壓し、堂側の圓塔堂奥の穹窿殿蒼空に聳えて人をして仰瞻に堪へざらしむ。寺門堂宇の間優に百餘武石鋪坦々たり、堂前に到るに洋裝の拜禮者先づあり合掌默念するに似たりその願る時予は彼が波斯の一紳士たるを認めたるに、彼亦予に一揖してその日本人たるべきを云ふ、彼が佛露兩國語を自在に語り得て應接するの態恰として歐人に似たり、而も彼一見舊知の

人の如くタメルランを賞揚して亞細亞人のために氣を吐くこと萬丈願ればサルトの寺僧三五既に吾等の身邊に來りて寺内の嚮導に任せんとするあり、乃ち波斯の紳士と共に導かれて堂内に入る。堂宇の内部石床土壁の堅牢驚くべく、壁上窓欄の細工妙技六百五十年の風塵古色の掬すべきあり、忽ち見る眼前石棺七基の横はるあり、同伴の紳士予を顧み嚴かに堂奥に近き一棺を指して言ふ



タメルランの墓(在サマルカンド)此大ドームの下彼が大理石棺横はる

これ我亞細亞の英傑チムルランの靈骸の横はる處と、棺は黒大理石長八九尺幅三尺許高亦三尺餘、棺上亞拉比亞文字を一面に刻す、隣するもの彼の姪といひ姉妹といひ皆その血族の棺、白大理石を以てタメル



ランの棺と區別す。七棺の前面小石壇あり、犧牲を供ふべき祭壇なり。吾等二人寺僧五六今正にかの黒棺の前に臨みて佇立凝視するに、彼波斯の紳士感慨禁じ難きが如く、靜に香料を僧に致して棺前に讀經せしむ。經を捧ぐるの時、彼等皆跪坐し、予も亦跪坐す。音甚だ微而も堂内四壁に響きて、靜寂を破り、四邊一種の氣に滿つ。その讀經を了る時、衆皆緩やかに拍手すれば、香煙靜にチメルランクの黒棺の邊りに上る。禮拜を了るの後、寺僧吾等を導きて、更に下層の堂窟に下る。四顧暗陰、僅に上階四窓の微光を送るに過ぎず。導僧燭を乗て行く。窟内一石壇を安置するもの、これタメルランの紀念碑石にして、後人の建置せるもの、人をして巴里なるパンテオン下層の石室を偲ばしむ。

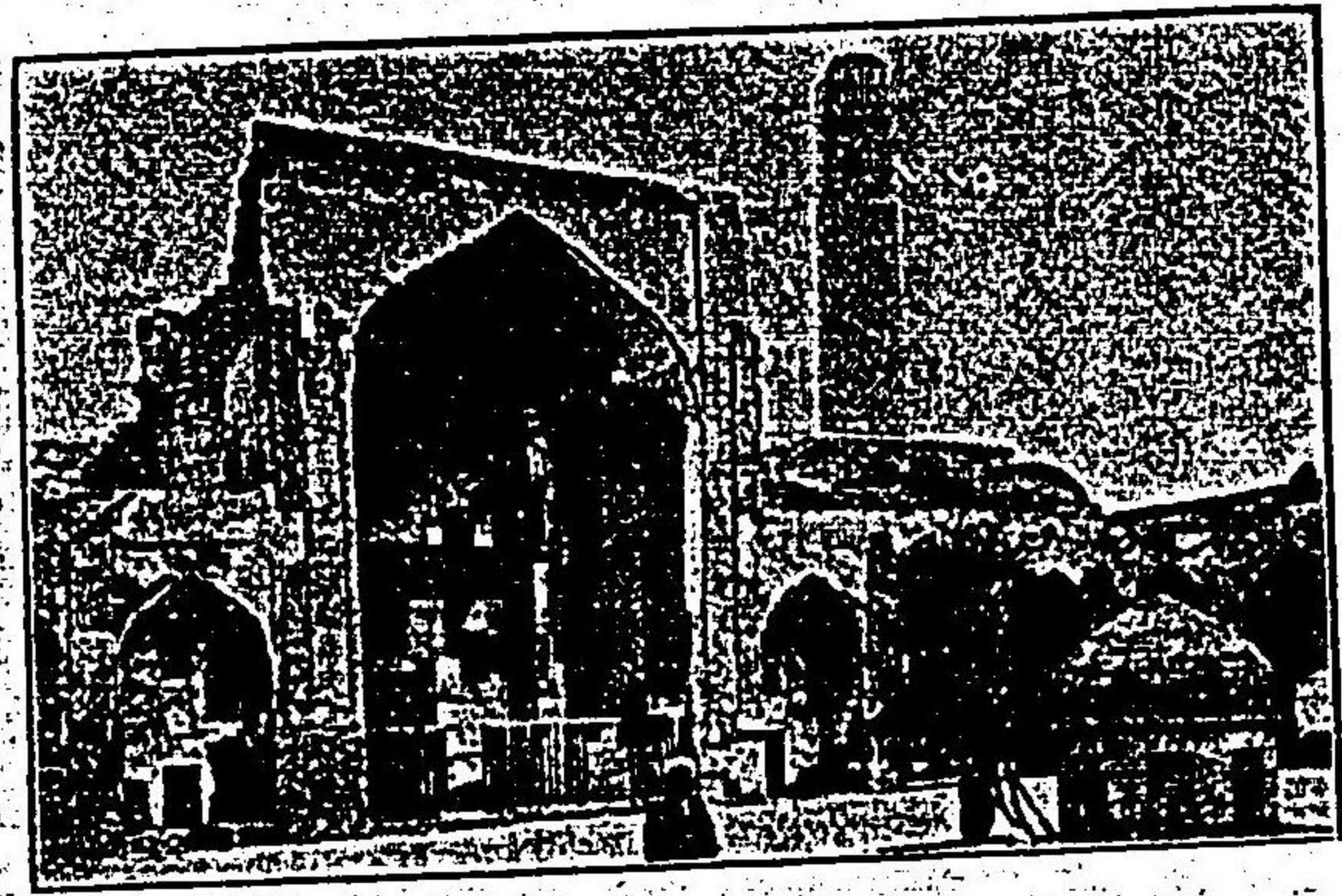
## サマルカンド(下)

サマルカンドの起原は學者によりて種々の説あり、或者は波斯カイカウス帝の代即ち耶蘇紀元前三千年にありとし、或學者はマセドニヤの亞歷山大帝の時即ち紀元前四世紀に府の基を開きたりと稱す。今は其正確なる開元を知り得ざるも、而も

サマルカンドの地はマラカンドの名を以て夙にアリアン人種の間一般盛なる市府として知られたりしなり。されど此地をして建築、庭園、繪畫、彫刻の府となしたるものは實に一三六九年を以て覇業を此處に開き、史上に所謂チメル王國の建設者たる我タメルランの功に歸せざるべからず。而してその巨閣高塔、古刹廢苑がこの地の領主を代ふる幾度なるに拘らず、今尙人をして六百餘年前の偉人が一代の豪奢を追懷せしむるものあるは、中亞萬里の沙原頭における一大名蹟とせざるべからず。而も露國の軍人政治は極めて無趣味にこの名蹟を放却し去り、僅にシャフジンダ寺の壁面に多少のセメント修理を加へたるの外、この亞細亞の羅馬は空しく羊糞駝蹄の裡に風蔽に委せらるゝのみ、嘆すべきの極なり。

舊市に入らんとして、先づ目を惹くもの、青緑、金、黄色の瑠璃質鏤刻を以てモザイク形彩飾を一面に施したる高壁圓塔あり、これ所謂タラリチメルにして、タメルタランの大宮殿たり。穹窿屋頂の崩落したる處、殿の中央大理石壇あり、これ史乘に稱する「コクダシ」にして、實にタメルランの玉座として、四方の被征服者集まり到りてその座下に献貢したりし處、而して此邊今舊市街の市場に近く、只頭布裸足のサルト





部一の閣宮ンラルメタれ是(閣虎雷)ルドレン

壯烈を懐はしめざるに反し我タメルランが中亞の廢寺にその二旒の古旗に壯烈

の少年が聲高く果物を賣るの際に甜瓜を嚙むを見る。舊市の中央を距る數丁ア  
ロシヤブ古市の廢墟において有名なるシヤフジンダ寺ありシヤフジンダは往古

聖地メツカより此地に到れりと稱せられ永世に  
死なき靈として土民の間に今尙篤く信仰せらる  
る所初めタメルランの建立に係り後幾世に亘り  
て増築したりしもの宏壯第一と稱せらる用ふる  
所の大理石は遠く波斯タウリッより運搬し到  
れるもの寺内壁上の壁畫は所謂アルフレスコの  
水彩畫にして一見ボムベイ廢市の壁畫に酷類す  
堂奥タメルランの祭壇あり壇前彼が當年の征旗  
二旒を樹つ亦感慨の料たらすんばあらず巴里奈  
翁の墓殿彼がためにその征旗を盛飾するもの數  
百旒而も只翁が華奢の半面を想ふの外亦多く其

なる英風を偲ばしむるもの予甚だこれを擇ぶ方一間大のコランの經典も亦この  
寺院にあり  
サマルカンドの廢墟この日子が感想を弄ぶの幾度なるを知らずシヤフジンダ寺  
より馬車をビビ汗寺に驅り側面の木柵を越えて寺領に入るに前面アーチ型の石  
門高さ十丈餘斷崖分崩して犬牙の如し門内方十間餘庭上樹林に富む奥に大殿堂  
あり彩壁聳ゆるもの優に二十丈その穹窿の屋頂半崩落して空しく蒼空を仰ぐに  
任す佇徊稍久うして殿堂を一週し前庭樹林の邊りに至れば無數の鷓鴣聲に驚  
きて樹間地上より飛ぶ嗚呼この歴史ある六百年前の大建築その荒廢して世に忘  
れらるゝ何ぞ爾く甚しきや

タシケント(上)

露國官憲の許可にして今少しく寛大なりせば予は亞細亞の羅馬たるサマルカン  
ドに今數日の滯留をなし古刹廢墟に史的踏査を試みたらんに僅に二泊を限れる  
の許可は終にこの名蹟の探踏を擅にするを許さず加ふるに露人の史的遺物の保



存と講考に意なき管に建造物の保護に何等の方法を致さざるのみならず頗る不完全なる數種の繪葉書以外これに關する記事出づ物絶無なる驚嘆の外なし予は到る處に書肆を訪ひて廣く此種の書籍を問へるも無趣味なる年鑑以外更に一物だも見出し得ざりき。

タシケントはサマルカンドを距る三百三十二露里、通常列車は十三時間半を要す、露清の境上に向ふべきコーカンド、アンデイジャンへの支線は前兩市間のホジエント驛より分岐するなり而してこのアンデイジャン支線も亦クシク支線と同じく露國官憲の爲にその旅行を禁ずる所たり、十月十日朝タシケント驛に着するに常例に反して一人の憲兵をも見ず予は普通客同様何事もなく車站を去て旅館に投じたり、以爲らくこれ後裏海州を出で、今やスキル、ダリンスク州へ入る、總督施政方針の外人に寛大なる畢にこの相違を生せるならんと、何ぞ圖らん投宿後半時ならざるに一武官の刺を通じ來るものあらんとは、即ち二等大尉ロセフ土耳其斯坦第一砲兵旅團所屬士官と稱するもの予の室に入り來る、彼頗る多辯、一見舊知に對するが如く巧に予が旅行の目的とその經路とを問ひ、後語を改めて予が中亞旅

行許可に關する通知の未だ市廳に到達しあらざるを予に告げ、軍務市長の意に於りて即刻予に退去を要求すと言明したり、予曰く予既にこの大沙漠の中央に到る如何にして退去すべき、彼曰く今夕西行の汽車に便して再び往路に復歸せらるべきのみと、軍人更輩の杓子定規は萬國同型なり、予曰く予は軍務市長の何人なるやを知らず、只予は露都において中央當局の正當なる旅行許可を得たるもの、予自ら總督府に至りて事を辨すべきのみ、彼曰くそは足下の意に任せんも予は只市長大佐の命を奉ずるのみ、足下が今夕當市よりの退去を認むるまで足下の身邊に添ふとを許せと、予乃ち馬車を命じ彼と同乗して總督府に至る。

中亞一州の總督府として予は總督府廳の宏壯を豫想したるに、而も通常平屋の樹林を背にし街路に面するを見るのみ、想ふにその平屋なるは中亞に於る地震の經驗上より來れるものか、予は刺を通じて總督に面會を求めたるに、官房長參謀大佐自から出で來りて予のみをその事務室に引き、總督の所勞登廳なきを告げて、懇懃予が來意を問ひ、其旅行許可の有無云を聴くに及びて事もなげに下僚を呼び、電報綴中に予に對する旅行許可を調査せしむ、而して五分時の後予の旅行許可は公



存と講考に意なき管に建造物の保護に何等の方法を致さざるのみならず頗る不完全なる敷種の繪葉書以外これに關する記事出づる物の絶無なる驚嘆の外なし。予は到る處に書肆を訪ひて廣く此種の書籍を問へるも無趣味なる年鑑以外更に一物だも見出し得ざりき。

タシケントはサマルカンドを距る三百三十二露里、通常列車は十三時間半を要す。露清の境上に向ふべきコーカンド、アンデイジャンへの支線は前兩市間のホジエント驛より分岐するなり。而してこのアンデイジャン支線も亦クシク支線と同じく露國官憲の爲にその旅行を禁ずる所なり。十月十日朝タシケント驛に着するに常例に反して一人の憲兵をも見ず、予は普通客同様何事もなく車站を去て旅館に投じたり。以爲らくこれ後裏海州を出で、今やスキル、ダリンスク州へ入る總督施政方針の外人に寛大なる畢にこの相違を生せるならんと、何ぞ圖らん投宿後半時ならざるに一武官の刺を通じ來るものあらんとは、即ち二等大尉ロセフ土耳其斯坦第一砲兵旅團所屬士官と稱するもの予の室に入り來る。彼頗る多辯、一見舊知に對するが如く巧に予が旅行の目的とその經路とを問ひ、後語を改めて予が中亞旅

行許可に關する通知の未だ市廳に到達しあらざるを予に告げ、軍務市長の意によりて即刻予に退去を要求すと言明したり。予曰く予既にこの大沙漠の中央に到る如何にして退去すべき彼曰く今夕西行の汽車に便して再び往路に復歸せらるべきのみと、軍人吏輩の杓子定規は萬國同型なり。予曰く予は軍務市長の何人なるやを知らず、只予は露都において中央當局の正當なる旅行許可を得たるもの、予自ら總督府に至りて事を辨すべきのみ、彼曰くそは足下の意に任せんも予は只市長大佐の命を奉ずるのみ、足下が今夕當市よりの退去を認むるまで足下の身邊に添ふとを許せと、予乃ち馬車を命じ彼と同乗して總督府に至る。

中亞一州の總督府として予は總督府廳の宏壯を豫想したるに、而も通常平屋の樹林を背にし街路に面するを見るのみ、想ふにその平屋なるは中亞に於る地震の經驗上より來れるものか、予は刺を通じて總督に面會を求めたるに、官房長參謀大佐自から出で來りて予のみをその事務室に引き、總督の所勞登應なきを告げて、慰勸予が來意を問ひ、其旅行許可の有無云云を聴くに及びて事もなげに下僚を呼び電報綴中に予に對する旅行許可を調査せしむ。而して五分時の後予の旅行許可は公



認せられ、總督官廳の手落として其旨を市長に電話し、辭令巧妙なる參謀大佐は予を日本珍客と稱して室外に送り來れり。外人の中亞旅行が此の如く繁雜困難を餘儀なくせられて、史的中亞の研究は益々世に閑却せらる。露國軍人政治の罪も亦大なりとせざるべからず。

タシケント(下)

タシケントも亦早き時代より歐洲人の間に知られたる地、只各時代と各歴史においてその異名甚だ多し、チャチ、タン、フヤジ、ビシケツト、タシユキール、皆タシケントの別名なり。予舊市に馬車を驅つて三四の古刹を訪ふ、中に紀元九二六年建立のものあり、廢頽甚し、千載の建造物として石屋土壁の分崩して、礎に斷礎を遺すに過ぎざるは、此地の幾度か戰亂の巷となり、幾度かその住民を代へたりしを想ふべし。されどタシケント舊市の史的價値は畢にサマルカンドのそれに及ばざる遠し。夕刻宿に歸ればサルトの一老商戸を叩きて入り來り、頭陀袋より二三品を取出して予が卓上に陳列す、地方的古物を賣らんとするなり。古刹壁面の彩石あり、亞歷山

大帝時代なるマセドニヤの古錢あり、タメルラン棺上銘記の手寫あり、コランの古經典あり、プハラ、ヒワの通貨あり、皆旅行家の垂涎萬丈たるもの而してその多くがサマルカンド及びその以西の品たるに却て之をこの地に鬻ぐは、貧僧奸商の故意に名蹟を荒し遺址を毀つもの多き行政官廳の嚴に彼等を監守したる結果、竊に發掘毀損し巧に盜取し來りて之を他の地方に轉賣するに因る、試みにタメルラン棺面の銘記亞拉比亞文字數百字の手寫するものを問ふに價二十五留といふ、その高價なる概ね此類なり、予が疊にタメルランの菩提寺の堂窟裡に竊に一僧の手よりその瑛瑯質彩石の一片を一留に購ひ得たりしはその價の廉なる寧ろ驚くべしとすべし。

タシケントに總督府の機關新聞あり、而してこの新聞の編輯經營を一任せられたるものはチハイその人なり、チハイの名は日露戰役に於て我邦人の多く記憶せる所、彼は日露人の雜種兒にして夙にクロバトキンの幕營に高等譯官として殊勳ありしもの、我軍人の俘虜として彼に至れるものは皆チハイの前に多少の訊問に苦みたり、露國が能くその功に對して篤く人を遇し有用の材を平時に養ひて他日の



用に供ふる用意の周到なる、我陸軍の當局が戦時に雑業を人に強て事去るの時恩を忘れて早く人を棄るの比に非ざるを感じたり。

タシケントを出て、中亞二大河の一たるスキルダリヤの右岸に沿ひて所謂オレンブルグ鐵道に由る、翌汽車食堂晚饗の食卓に比目魚のフライを見る、想へば魚肉を口にせざると二十四五日、今の沙原頭に俄にこの鮮味に會す、怪しみて之を問へば是キルギスの漁夫がアラル海に漁獲し得たる所と、蓋しアラル海および此附近に散在する湖面の漁業はキルギス土人の官廳に納税し特許を得て經營する所、漁獲物は遠く之をウラル地方に輸送すと、車中露の青年官あり新に任官して浦港に赴任するもの、夜來予と懇話し今亦卓を挟みて對す、ホークを把りて此珍肴に臨めば味鮮にして美亦旅中途上のものに非ず、言ふ勿れ、一皿のフライのみと、昨は英雄の墓に展し今アラルの鮮鱗に飽く、遊子の快感畢に之に過ぐるはあらず。

二日にしてオレンブルグを過ぎ三日の夜サマラ驛に達しウラル山嶺に歐亞の界を越えてチエリヤールビンスクに大西伯利鐵道に合す、而してタシケントを出づるの後北上する僅に五日にして途上服を更ふると二度、氣温三十餘度を降下す。

## オレンブルグ線

タシケント市を發して所謂オレンブルグ線の列車に由るや、車中對座客たりしもの一人の少尉補と一人の小學校長あり、この兩個の好漢頻りに予に對して種々の地方談を爲す、少尉補君は我特務曹長に等しく十數年來軍職に精勤せるもの、少尉補君曰く予等今タシケント歩兵聯隊のためにアラル海沿岸地方に甘藍菜の買入に赴く、南方に在て一個の菜常に十四五哥に當るもの、一旦スキルダリヤの流域に沿ひアラル海濱附近に至るや一株の甘藍菜四五哥を出すと、予は痛く斯る邊境に兵を養ふもの、苦心の多きを感じ、又南部中亞の地が一旦緊急大兵の集中する時物資の甚だ缺乏を感すべきを思へり、而して此事情こそ露國をして一方極東の大戦役に任じつゝあるの時、孜々として總延長千七百卅六露里の此オレンブルグの大鐵道線の敷設を經營したりし所以、その一朝開通するやウラル山嶺の西麓サマラ驛よりオレンブルグ市を通過して、東部中亞の首府タシケントに一線直行し得、アンディヤン支線に由りては近くガシユガルを五十里以内の境上に見、南して



は數十里の間に直に亞富汗を壓す國家の大戦役に際して地方にこの大業に營々たる露國の大志は感ずるに餘ありとすべし而して隣席小學先生の語る所を聴く



亞富汗の境と中山の境

群生を見ると昨スキルダリヤに沿ひカラタウ長山脈の西麓を走りて時々高岳に

に鐵道廳所屬としてオレンブルグ鐵道役員子弟の爲に沿線數ヶ所に小學校の設けらるゝあり彼はその一校に校長たりと露國由來教育の不振を以て名あり而も邊境の開拓植民に意を致す此の如きあるは吾人深く思念せざるべからず十數日沙漠を走りたるの予はオレンブルグ線中アラル海驛の停車に沙漠原頭の海面蒼波を見て蘇生の思ひを感じたりその三角地に藤林の鬱茂たるを望む時端なく南洋熱帶地方の會遊を追想す而して小學先生子に四顧視界の狀を語る甚だ精その藤林の密生して人跡を容れざる處虎豹狼野猫の

四季不斷の雪を戴けるを望み山麓の密林杉、白樺の數里に聯るものあるを目送しつゝサルト人の漸く減じてキルギズ土族の愈々多きに接して矚目する四圍の風物の數十時間の行程中に變移し行くの狀に多大の感興を惹けり。

アラルの海六萬五千七百八十一方哩南にアムダリヤ東にスキルダリヤの二大河流を合せ呑む而して此二大流域こそ中亞原頭の生産繁殖の域にして就中ウラルの南東スキルダリヤの三角地は實に中亞第一の豐饒地方たり露國が一八六七年早く此境域に總督府を開きオレンブルグの地をトして兵村を起し所謂オレンブルグ哥薩克の強兵を此處に植ゑ得たるものその志の雄大にして他日南下の遠謀を期せるを見るべし十月十三日早旦オレンブルグ驛に着す天氣清澄我小春日を懐ふ大市半時間の停車なるに驛を出でて市の一端に立てば正教寺院の尖塔朝暾に輝き市外農村の斷續する處淡紺色に彩れるオレンブルグ哥薩克の制帽制袴を着けたるの兒童の嬉戯するを見る。



餘 錄

(明治四十三年十一月大阪毎日新聞所載)

南 帆 北 轍

○竹越君が北守南進論を叫び出してから約一年ほども強力な反響を認めなかつたが最近戸水寛人君が北進論に接し、數日前には雪嶺博士の東西南北論さへ聞くに至つた。

○戸水博士の議論はその末段を見ると雪嶺翁同様八方發展論のやうに思はれるが、尙も貝加爾湖の由來を知るものは、君が議論を読んで多くその北進説を看取するに躊躇しまし。

○僕をして言はしむれば三又の論も貝湖の説も共にその好む所、その究むる所に偏した部論であると思ふ。西伯利から滿洲、北清へかけて所謂經世的旅行をした戸

水君が北進論に傾き、曾ては臺灣の殖民策を立論し、昨は佛領印度より南方諸島へ亘つて旅行研究を重ねた竹越君が北守南進論を熱心に唱道するのは、自然の數であるが併しその親しき所に偏して居ることは蓋し争へぬ次第である。

○僕は思ふ、若し銅色の馬來人種が竹越君の所謂水屋邦語宮の起原の竹欄に凭りて椰子樹の風に涼を納るゝとの一種の興味を感ずべしとすれば、勸察加の野世界に犬橋を遣るオロチヨン、ギリヤークの上にも趣味は感せらるゝ。日本人の發展が南に限られ或は北に專なるべしといふ所以はない。

○八方發展説は猶ほ八方美人の如しとも評すべきである。雪嶺翁の論は兩者の折衷論であるが、尙も一大國民の將來の大方針を定める上において如何に世界が廣いと云つても漫に四方八方へ發展すべしと云ふは以て一國の政策とすることは出来ぬと思ふ。

○僕をして注文を言はしむれば、竹越君には少くとも一度北方北境を旅行して貰ひたい。戸水君にも亦馬來半島から南洋諸島を巡遊して貰はう。而して後出て來つて北進説南進論は今少し公平不偏の論であらうと信ずる。



○僕不肖只その好癖を擅にして夙に白山黒水の邊に放浪し又再度洋南の風物に親み、四度赤道を横断す、僕はその見る所によりて大和民族發展のために不日一説を立てる積であるが、爰には其前提として南北兩地の旅行感想を述べて見やうと思ふ。

## 一

○雲の彩と海の色と植物の美とは熱帯の特色である。銅色の馬來族が瑠璃色の海に紅褐色の帆を揚げて嶋嶼の間に出没する有様などは詩人畫家の正に着想すべき所である。

○若しそれ大船巨船の甲板に立て日没前半時における雲際の變化を觀るに至ては其色彩の濃淡或は紗の如く或は綿の如く、畫家の彩筆も墨に及ぶ所ではない、蓋し大觀を併せ得たものである。

○帆船時代には東洋から印度洋に至るもの多くはスタンダ海峽を通過つて、マラッカ海峽の通過は風向の具合から困難なる場合が多かつた。隨つて赤道を通過する

機會が珍らしくなかつたのであるが汽船時代に至てはスタンダ海峽の通過は却て稀になつて皆北緯約一度に近いマラッカ海峽を通ることが常である。

○今春神武皇の祭日を以て「生駒艦が印度洋上に於て赤道を横つた際帆船時代の遺習である赤道祭が艦上に行はれたその際最も多く赤道を通過したものと、して八回の赤道横断經驗者が當日の大海王となつたと記憶する。十五六年前には兵曹の中に十數度の赤道通過者は澤山あつたものである。

○獨逸皇太子が今回の東航において特にスンダ海峽を通過せらるゝのは、バタビヤ御寄航のためとはいへ注目すべき事であら。若し竹越君の南進論が蘭人間に多少の物議を惹たとすれば、獨逸皇儲のスンダ通峽は蘭人のために一大警鐘でなくてはならぬ。

○南印度洋にマダガスカルの嶋影を望んだ時、喜望峰頭に三角浪に遭つた時僕はロジエストウエンスキー當年の苦心に同情の念を禁じ得なかつた。若し西伯利鐵道の輸送力を増大せしめたヒルコフの功勳を偉なりとすれば、只提督の遠洋回航をも壯とせざるべからず。



○阿弗利加には東南海岸に一百を超えざる邦人と南端ケープタウンに僅に七人の同胞とを見るに過ぎず、シカも濠洲の大陸北に八百餘西南に七百餘の本邦漁民の常住を見る。

○濠洲の大陸、阿大陸に比して道程の近きに非ず、氣候の順なるに非ず、同じく蠻民土族あり、同じく欧州強國の領土である、而して彼に移民邦人の多くして之に稀なるは何ぞ、我國より濠洲に向ふには比律賓なり爪哇なりスマトラなり皆飛石の如く點在するに反し、阿弗利加大陸や漢々蒸々たる印度洋に隔てられて亦好飛石の如くないためであらう。

○所謂南進論なるものは畢竟この飛石整理論であらうと思ふ、印度洋上の唯一の飛石とも言ふべきモリシヤス嶋、英領に現に四人の邦人が居り、阿大陸印度洋岸に亦同胞を見るは、邦人の發展力がモ嶋の如き開拓し盡されたる掌大の嶋土をすら、能く飛石として利用し得る強い證據である。

三

○南方の發展は水面である、北方の開發は原野である、水面である故に船を離る

同行の猛駟和尙(高村眞夫氏筆)

べからず、原野であるゆゑに馬に依らざるべからず、南船北馬は必しも漢人の古句とのみ見るべきでない。

○現代の所謂列強に魁して數百年前喜望峯を回航し、遠く印度洋に太平洋にその航程を延し得た和蘭人が今尙南阿に能く英人と抗し亦遠くスンダ峽南に大陸塊を領有しつゝあるは正に南船の賜である。

○僕が友ロウエンスキは露國の一技師なり、夙に極東に來りて西伯利、東清兩鐵道の敷設に努力す、彼言ふ兩鐵道工事の際技師皆騎して土工、敷設に従事せりと、五十年前探検隊を黒龍江畔に送り、十數年前大鐵道を起工したりし露國が、今黒水流域に領主たるは正に北馬の賜である。

○マニラの街上に比律賓の土人婦女が蟬の羽に似たる紗衣を着けて、熱天を徐歩するものに見て、同地在住の本邦婦人が我帷子に類せりとなし、好んで之を着けて芭蕉樹下に涼を納るゝを見る。



○北境露人の財産の一部として誇とする黒貂の毛衣は人類の衣類中最高價なるものゝ一若し風雪の日千金の毛衣に温を泡みて三頭櫓の峻足に鞭を揚て滿目銀の如き原頭を奔る時吾人只毛衣の暖あるを覺えど亦氷點下の寒を感せず

○新嘉坡市外の水上架屋に踞してマンゴー、マンゴスチンを味ひ椰子果に雉して椰子の水に渴を醫する時誰れか前二者の果實の王たり椰子の水の「自然の三鞭酒」たる稱呼を首肯せざるのあらんや

○歐洲よりの歸路十數日の汽車に倦みて哈爾濱に着し日本人の經營の客棧に上りて日本食を呼び黒塗膳に松花江産の血魚の刺身を味ふ時吾人は北滿の珍味として永くその好風味を忘れ得ず

○南方に發展の山河あるが如く北方に開拓の天地がある椰子樹の蔭も吾等の寄るべき處である如く白楊樹も吾等の詩として誦ふべきである白熊の恐るべきは鱈魚の害と何の擇ぶ所もない濠洲の特産なりといふ眞珠貝は松花江の上下流にも産するに非ずや

四

○巴奈馬運河の開通は三年後に迫れりその開通後に於る我國と大西洋岸の米大陸との交通至便は言ふを俟たざるも而も今春開通せるアンデス横貫鐵道は正に太平洋を大西洋に聯結するものである

○日本人の智利にありて硝石坑に勞役するもの業務面白からずとして二人相携へて徒歩アンデスを越えその東麓より鐵路直ちに亞爾然丁の平野を横斷して大西洋に注げる銀河々畔のパンヌ高原に牧草植付に従事して着々成功しつゝある二青年がある

○ブラジルなるリオデジャネロは數年前に在て世界黃熱病の病源地として怖を爲したりしに今や病根一掃天下の良灣南米富市としてその名を揚げ來る

○我岡山孤兒院出身の兒童數名リオデジャネロ港内の一小嶋王たる老偉人ラヂ氏の撫養する所となりて孜々その生産業の一部を扶けつゝあり

○ウルグワイバラグワイの二共和國の如き邦人にしてその名とその所在とを知



るもの希シカもウ國の首都モンテビデオの街上、日章旗を店頭に掲げて目標とせる瀧波商店あり、僕銀河東岸のこの都會に遊びて、店前の日章旗下に立つ時、邦人發展力の偉大なるに覺えず感泣したり。

○亞爾然丁の首都ベノス、アイレス某街の三層樓に、在留邦人労働者の生活状態を見んと欲し、僕單身戸を叩き訪へるに日本人の出で迎へるもの、日本語相通せず質し問へば、彼は沖繩縣人なり。

○亞爾然丁共和國の法制、苟もその領土に生れたるもの、必ず舉げて亞爾然丁の國籍に登録し、毫もその父母の國籍如何を問はず、大阪人廣島人の純良なる二家庭に、亞國の國籍に登録せられたる當歳の二男兒あり、邦人到り見るもの、皆兒の頬に接吻し、言ふこれ他日能く亞國大統領たり得るものと。

○純良なる邦人の家庭を提げて他の半球に兒孫を舉げ、撫育教養大器を成し得て、他日アンデス山東に又アマゾン以南の廣原に、西人葡人の間に推されて大統領たらんは、眞乎大和民族發展の大理想に非ずとせずや。

五

○西人の兒童に月の盈虧を教ふるもの、D字形なるを新月とし、C字形なる時月は虧つゝありといふ、焉んぞ知らん、南半球に至りて月を見んに眉の如き新月のC字形なるもの、樹梢に懸るあらんとは。

○南を知らずして北進論を議する者には、往々にして北人の南月を知らざる如き憾がある世界の全體に關する議論は、須らく世界の全體を一周一覽する必要がある。

○北大西洋にセントヴィンセント、カナリーの二島を見るに及んで、印度洋上のモリシヤス島の開發殆んど人事を盡し了せるに感嘆を禁じ得ぬ、前者は葡西領にして後者は英人の領有なり。

○セントヴィンセントは野生的の葡萄と寺の古きを誇とするに過ず、カナリー島はカナリヤの産地なる以上更に何等の奇もない、印度洋上のモ島に至りては、破糖の大生産として天下に名高い。



○葡人と西人とは世界航海の祖先たる名譽は負ふべしとするも終に大殖民的國民には非ず。英人が到る處に大小の殖民地を有して、皆隆々の勢ある一事は、殖民を論ずる者の大に看取すべき點である。

○地は人に依て拓かれ、人は業によつて活く。開拓力なく増殖力なき國民にして、誤て領土を得る時、地荒れ業興らず、露人がこの點において英人のために嘲笑せられつゝある亦已なきに屬す。

○蓋し英人は南船黨なり、露人は北馬黨なり、彼の殖民に長じ此の殖民に拙き國民性によると雖も、抑も亦一の夙に南に棹し、他の徒に馬を北域に馳せたるに因なからんや、波得大帝が海洋に出でんと焦心したるは南船黨に與せんと欲せしに因る。

○僕裏海を渡りて僅に波斯の北境を訪へるに過すして、終に其南邊波斯灣頭に足跡を及ぼさざりしを憾とす。南部波斯は英國の勢力範圍なり、想ふに其北境に比して啓發せらるゝの大なるものあらん。

○獨逸人の露國內にあるもの、その數實に二十萬を超ゆ、多く露國大廣域の南境を探びてその殖民を爲し、露人と相懸隔して眞個に別乾坤を啓く。

○彼等は自から學校を興し、自から寺院を建て、獨逸語によりて獨逸式の教育を子弟に施す。露の官憲僧官視て以て眉を蹙む。

○獨人にして南露植民地に民團長たる一知人の僕に語るもの言ふ猶太人、波蘭人、芬蘭人を壓迫したる露國官憲の毒手は遠からずして吾等露領内の獨人の上に及ばんと蓋し眞ならん。

○蓋し世界の偉大なる植民的國民は英人と獨人なり、若し更に一國民を加へ得べしとせば、それ極東の我大和民族か、今や英帝は明春を以て印度中土の古都に白象の盛裝裡に帝冠を戴かんとし、未來のカイゼルは雄心勃勃々洋南の諸島を廻りて極東の二大帝土に一瞥を拂はんとす。知らず新興の大和民族は南すべきか北すべきか經世に志あるもの、當に心肝を碎くべき所。

十一月十七日大暴風のハリハリ海峡を通過して在英群島を掠め、北上して渤海に開け、亞細亞大陸の東端と共に日本島土を吹き暴しつゝある夕、大阪毎日の編輯局内に英帝の印度巡幸の電音に接し、卓上筆を走らせて此一篇を稿す。(柯生)



南 羸 一 瞥 (明治四十三年四月中央公論所載)

○北部臺灣に花を賞するもの、新埔山溪の梅林、臺北諸園の櫻花あり、二月降雪の旦、花信臺北の一友より到る。

○新埔、山溪の早坑仔、花あり、水に臨む、春溪淡靄を籠め、流水暗香を浮ぶ處、脚下に青苔ありて、溪間に微風なく、而も飛瓣自から下るの景、我が月が瀬に酷類す。

○内地の櫻花を移植せしもの吉野、嵐山、彼岸、枝垂の各種臺北に在り、花瓣年毎に小に、淡色漸く鮮紅に變じ、花は梢上に萎みて亦風に散るなし。

○新埔は蜜柑を以て名あるの地、知らずして、梅林を出て、識らずして、蜜柑畑に入る、野趣眞に愛すべきあり。

○若し夫れ六七月の交、淡水附近、觀音山より西南に亘る一帯の高原平地、滿目の茶園に數百の婦女隊を成して、蕃歌高く茶を摘むの光景に至りては、正に島地を美化するもの。

○樟は臺灣一部の生命なり、而も樟實の熟せんとする時、群を成して、之を咬むもの、白頭翁あり、貯へて室内に藏する時、好んで之を喰ふもの、夫の黠鼠あり。

○樟樹に臭樟、黃樟、青樟、赤樟あり、赤樟最も腦分に富む、蕃境樟樹の老大なるもの、時價數千金を値す。

○製腦は鄭成功時代夙に其法を傳へ、植蔗製糖は早く之を蘭人據臺の當時に見る。

○臺灣の地烈日熱暑、而も露は重くして雨の如く、早歳と雖も夜に遇ふて萬物皆潤ふ、樹藝尤々として醇茂し、萬種の作物穰々として稔る、眞個蓬萊島なり。

○嘉義より阿里山に至るの途、竹頭崎附近の田圃、原野、相思樹、龍眼樹、檳仔(マンゴ)、果樹、處々に散點す、龍眼肉(マンゴ)は南洋廻航者の獨り甘味を貪るの珍果なり。

○晩夏初秋の候、鱗毬狀の綠色果を結ぶもの、釋迦頭あり、甘美賞すべし、凸柑、雪柑、金柑、皆冬季の成熟、多漿甚だ甘味に富む。

○街上に榕樹あり、街道に桂竹、綠竹の美林あり、修竹の數十竿一叢を爲すもの、純乎南洋の景なり、而も一度び高山に登る、乍にして温帶寒帶の植物帯を現出す。

○僕深洲タウン、スグアイル滞在の一日、馬車を郊外に驅る、深洲大陸の平命眼前に



展けて一望際なく、雨後の市外寸塵を揚げず、行くこと二里許、忽ち仙人掌の廣野に入る、笏狀の幹六七尺直立成人の如く、倒卵形の枝相參差し、鬱茂道を狭む、乃ち馬を右すれば枝頭の細針馬耳を刺し、左すれば老根の硬針蹄を刺す、而も車上の僕は一種の奇觀に打れて、亦身の窮地に陥れるを忘るゝこと少時。

○打狗に、綠珊瑚あり、地方代表の特種植物をして、優に誇るべし、高さ丈餘、眞綠色の細枝無數に樹幹より茂生す、十歩にして之を望む、寔に地上の綠珊瑚樹たり、仙人掌科の一植物なり。

二

○臺灣の媽宮は滿洲の娘々廟と相似たり、島到る處宮祠を見る。

○媽宮は猶ほ夫れ、金比羅大權現の如し、媽祖に一天后と稱し、海神なり、古來臺灣海峡を航するの清人、巨船小舟一に媽祖の冥護に依る、澎湖島の媽馬港は正に臺灣海峡航史上の證跡たり。

○康熙三十六年清人郁永河裨海紀遊の著あり、二百年前の臺灣探險志なり、其臺灣

海峡を横断するの條、風飄駭浪、千山白水、接遙天一綫、青の句を見る、臺灣海峡の風浪昔猶ほ今の如かりしを證す。

○澎湖島が今日無木の禿土たる、亦海峡の烈風と海氣中の鹽分に因るならんや、島民の矮屋を老虎石の高階に圍みて、辛じて風伯の威を避けつゝある、狀甚だ憐むべしと爲す。

○而も一六〇三年澎湖島に於ける蘭人最初の上陸の圖陸地一面の檳榔樹を畫き、清人の古書蘭人上陸の記事中、伐木築舍爲久居計の文字あるは、三百年前樹林の澎湖島を語るが如し。

○近者中將長岡の臺灣を巡遊して澎湖島に到るの一夕、談島地植樹の事に及びて、即時紀念樹の植付を決行したりしは、美事とすべし、漫に沙磧の地種植に堪へずと傲し、米穀を需むる、升斗尙ほ必給を臺地に仰ぐを常とするは、思はざるの甚しきなり。

○蓋し臺灣の文化は西南より到る、而して澎湖列島常に其衝に當る。

○澎湖列島は臺灣の門戶、昔時交戦に傳教に通商に皆この門戶を通じて臺南と安



平とに到る。今日南洋の聯絡豈に亦此方面に門戸を啓くならんや。

○僕臺南市遊覽の一日赤嵌樓を見る。是れ蘭史に所謂プロヴィデンチア城として、二百六十年前蘭人の築きて屯營し、後鄭成功の占據せるもの。臺地所用磚瓦皆赤色、朝曦夕照、若虹吐、若霞蒸、是れ乾隆の初年清人の赤嵌樓記事中の一句。

○臺灣海峡の最も迫る處僅に六十二海里、群島六十三其間に基布散點す、而して南すればバジール海峡を隔て、直ちに比律賓と相呼應す。

○臺灣の最南端岬、鵝鑾鼻あり、白堊の大燈臺を岬頭に見る。樓下の水邊、土民の常用するもの竹筏あり、竹筏は古代南洋土人水上唯一の交通具、今之を近世文明の大燈臺に見るに至つて、臺灣の地理的趣味も亦一掬を値するとせん。

○剝皮し灣曲せる麻竹數竿を結ぶに籐莖を以てし、幸じて船形を造り、中に桶型の座、四人を容るものあり、船房と擬す。竹筏即是れその物畢に原始的狀型を脱せずとするも、亦古代の馬來族が數竿の竹片に激浪を打つて遠征移植是れ事としたりし、の雄風を想見するに足る。

○殺馬尼刺滯在の日、カグイテ灣の對岸、カグイテ、ビエホに比島の奇傑アギナルド

を訪ふ。快談一夜、翌朝告別邸を辭するの時、家奴一兩名水邊に奔りて僕の爲めに小舟を漕す。舟甚だ小にして、兩舷着搦するに竹竿大さ樹幹の如く、長き舟に倍するものを以てす。蓋し竹竿は舟の本體にして、中間の函型は船房に過ぎず。我臺南土人の竹筏は畢竟南洋馬來族傳來の遺物たり。

○獨幹涼霄不作枝、垂々青子任紛披。摘來還共蕤根嚼、麻得唇間盡染時。是れ清人郁永河の檳榔樹を詠するなり、我國往昔婦女の唇に紅し、縉紳上臚の齒を染むる。九州族の南洋よりの渡來を證せんとする史家の說亦必しも附會の臆斷に非ざるを思ふ。

○臺灣を知らんとする、其西部を究めざるべからず。西南部を究めんとする、則ち對岸閩粵及び品宋の島地より、遠く馬來半島を觀取するを要す。近時臺灣の南清航路を廢絶したるが如きは、吾人終に其故を知らず。

三

○臺南に鄭成功の廟、明延平郡王祠を拜し、廟後田川氏の小祠前に梅樹の老幹を撫するの時、吾人は鄭氏の時代に於て日本が既に何等かの緣因を臺灣の地に有した



りしが如く感ず。

○澎湖島馬公城外はクールベイ將軍の墓を訪ひ淡水にマツケー氏の墓に詣する時臺灣の今日ある其負ふ處の廣くして久しきを感じず。

○マツケー氏の臺灣に在る四十年土人の婦を娶りて感化黨陶理想の人と爲し二女を擧げて高弟たる土人の三青年に配し今や一對の新夫妻が父母の志を繼ぎて救靈の事に従ふある吾人は其堅實なる氏が生涯に學ぶ所なくんばあらず。

○高山國の稱文祿二年秀吉の臺灣に寄せたるの書に見る鄭氏の入臺に先つ三十年我に濱田彌兵衛あり單身迫て蘭將の膽を奪ふ。

○島津齋彬風に臺灣經略の大志あり其古文書として傳ふるもの初に渡唐船の沙掛り場を定め往來毎に沙掛りし後々は家をも拵へ絶えず在番人を置き土人を懐け人道を教ふる手順にすべしと言ふ。

○明治七年五月征臺の皇帥歸順の會長に附與したるの日章旗我皇國の御稜威に順ひ奉るあかしなれば假染にも汚すなかれと云ふことしかりと記す皇風の南溲に薰する既に此時に始る。

○臺灣最古の地圖一五九九年蘭人リンシヨオテン氏の見取圖あり彼東洋航海の際臺灣海峡を通過して畫せるもの清人の古書としては當に郁氏の裨海紀遊を擧ぐべし清朝の領臺後十四年にして單身能く草昧なる蕃黎占居の區を巡廻し東海岸を縦斷したるの雄志は終に没すべからず。

○現代の人類學者島井龍藏氏が領臺後二年にして新高山に上り絶頂に日本の人類學研究は新高山の頂上に及べりと書し來りたる巖手の人梅陰伊能嘉矩氏が蕃境に踏入り蕃狀を究めて臺灣蕃政志四篇を成したる以來臺灣の史的研究に於て古今東西に冠たる吾人は臺灣を語るに當りて二氏の意氣と勤勞とを多とせずんあばらず。

四

○乞ふ臺灣を以て徒らに焦熱の苦土と做すを休めよ臺北古刹の首に居るもの艋舺の龍山寺あり境内空洞塵中眞に別乾坤を劃す八芝蘭の芝山巖巖上一古寺あり寺に隣するの樓閣上りて放眸するに臺北の平野歴々眼に入る清境にして大觀を



併せ得たるもの。

○大屯山界紗帽山上の風動石は小夜中山の夜啼石の類か、山上有碑石如梅花、蕊瓣風來即動俗呼風動石石窻有如花心蓄水斗許汲乾復自滿淡水廳志の記事に見る。

○若し夫れ中部臺灣に到る帝室御料林に編入せられたるもの日月潭の勝地あり新高山東北山腹灣八通關に入りては臺灣の二大碑として「遇化存神」萬年享衢の大字を自然の石壁に仰ぐべし。

○安平の赤坎城蘭人婦一王の椒築占據せる處紅毛城の名之より來る少しく北して蘇厝庄に至り潘仔田庄の郊外雜草離々たる邊一斷碑を見る羅馬字を以て蕃語を碑面に刻せるもの乾隆十七年(一七五二年)建つる所蘭人教化の蕃族に及びたりしを證す文人史家の到りて此の古城と此の碑古とを見る歌はざるを得ず感せざるを得ず。

五

○僕臺北を發して臺中に向ふの日偶々北部生蕃の一團臺中の觀光に向ふものと

列車を同ふす乃ち好んで蕃人の乗車に移り親しく手を把りて狀を見る。

○北部の蕃族獷狂猛犸と稱せらる而も其少婦幼童の身を父母の體に倚せて喃喃する所可憐の情あり。誠首は一種傳來の習俗以て成年を證し以て婚儀を行ふ單に出草誠首の俗を以て獯猛の性教ふべからずと爲すは王者の志に非ざるなり。

○其婚儀の俗を見る。或者是鹿角釵脚を婦に贈りて成約を表し或者是薪材十數束を女家に贈りて成婚の證と爲す而して兎蕃アタイヤル旅の新婦新郎が婚後一定の期限高架材上に寢臥するの俗に至りては戀の女神を蕃界老樟の邊に見るの心地す。

○乾隆年間上梓の書赤嵌集あり言ふ臺北諸山皆從蕃語譯出と猛卯の地名元と蕃葛に作り蕃語バンカールに出づ獨木舟の義なり淡水河畔の艇舫が昔時蕃舟の寄泊せるに基く八芝蘭亦蕃語バツチライヌに出づ温泉の義なり。  
○吾人は我臺灣總督府が明治三十六年治蕃の大方針を立策したりしを記憶す即ち北半部の生蕃に對しては威壓強制南半に對しては啓發綏撫焉んぞ知らん鎮山絶交開山撫蕃は是れ康熙年間以降清國治蕃の法策ならんは。



○臺灣中興の爲政家藍鼎元が治蕃策として以殺止殺以蕃和蕃と云ひ、光緒初年議定の撫蕃章程に、生蕃は撫に難からずして化に難しと言へる。生蕃教化の爲に、化蕃但言三十二條を制定したる、我治蕃の法策は今尙清人に學ぶの餘地あるが如し。

○僕臺灣に遊びて蕃界踏査に意あり、臺北到着の翌總督府の蕃通賀來警視幸に僕の爲めに嚮導の勞を執る。

○桃園より輕便鐵路に搭して大崙坎に至り、紅帳藍蓋の轎に坐して水を渡り丘に上り、時に水牛の熱脊を泥濘に浸すの狀景を路傍に目撃し、或は竹林を送り、相思樹樟樹を迎へ、阪路漸く急にして前轎擔夫の脚は後轎の頂よりも高し。

○此夜一行數人、角板山隘勇監督所に一泊す、山は大崙坎溪の一水を隔て、蕃境羅羅山に相對し、合叻汚來、哨啤等對岸蕃社の狀景、肉眼能く觀收し得、願れば隘勇線は鐵條網に劃せられて逶迤として山地を高低し、左方遙に插天山を望む。

○警鼓なるものあり、圓材の中腹を空にせるもの、之を各隘寮に懸けて警音の具と爲す、夜半夢破れて遙に打鼓の音を聞く時、感興の特に深きを覺ゆ。

○頃者、歸順生蕃諸族の一團、遠く送られて倫敦に至り、日英博覽會の一隅に蕃境の

生活を演出せんとするが如し、白人の觀客は以て其奇觀を珍とせんも、吾人は與せず。

六

○臺灣民主國なるもの、恐くは邦人の記憶に存せざるが如し、藍色に黃虎を描けるの旗方二寸大の民主國之寶印是れ臺灣巡撫唐景崧の劉永福等と我領臺に反抗して企たてりし所、亦史上一時の變象とすべし。

○而も我國十數年の治監獄を改良し、阿片癮者を律し、水藥の服用を放へ、澎湖列島三十有六の數を正して六十三島を計へ、而して領後十年完全なるセンサスを行ひたる、聊か以て日本人の植民地經營の能方を證すとせん。

○吳氏笑女史、黃氏爲女史は、臺南出身の女性なり、臺灣島最初の女學生として東京に遊學し、三十七年明治女學校全科を卒へて歸臺し、後島民の教育に任せる、以て士民の文教に志あるを見ん。



生活を演出せんとするが如し、白人の観客は、以て其奇觀を珍とせんも、吾人は與せず。

## 六

○臺灣民主國なるもの、恐くは邦人の記憶に存せざるが如し、藍色に黃虎を描けるの旗方二寸大の民主國之寶印是れ臺灣巡撫唐景崧の劉永福等と我領臺に反抗して企たてりし所亦史上一時の變象とすべし。

○而も我國十數年の治監獄を改良し、阿片癮者を律し、水藥の服用を教へ、澎湖列島三十有六の數を正して六十三島を計へ、而して領後十年完全なるセンススを行ひたる聊か以て日本人の植民地經營の能方を證すとせん。

○吳氏笑女史、黃氏蕊女史は臺南出身の女性なり、臺灣島最初の女學生として東京に遊學し、三十七年明治女學校全科を卒へて歸臺し、後島民の教育に任せる、以て土民の文教に志あるを見ん。



七

○臺灣名物何々か砂糖に鹽に烏龍茶年に御米が二度採れて山には黄金の花が咲く  
 ○領臺後邦人の口にせる俗語なり  
 ○南を論せんとする先づ北を知るべからず南北滿洲韓國の西北冬時の百餘日結氷の閑天地のみ臺灣の一月秋色僅に山間に到り山岨溪壑雜木の紅葉を見るも陵上の茶園花白くして芳芬浮動し平野の稻菜油々穰々たり  
 ○基隆元と鷄籠の字を用ふ光緒年間基隆の意を寓して基隆の二字に代ふ  
 ○南が北か大陸か島地か吾人は南方膨脹の自然に待ち北方伸張の人力に頼む多きを想はずんばあらず  
 ○前年卒先して樺太を視察したるの獨逸大使今春臺灣全島を巡遊し兩度北滿を通過して東清沿線の風物に親めるの英鈴差今復臺灣巡遊の程に上る吾人今に於て根底ある臺灣研究の切要なるを想ふ

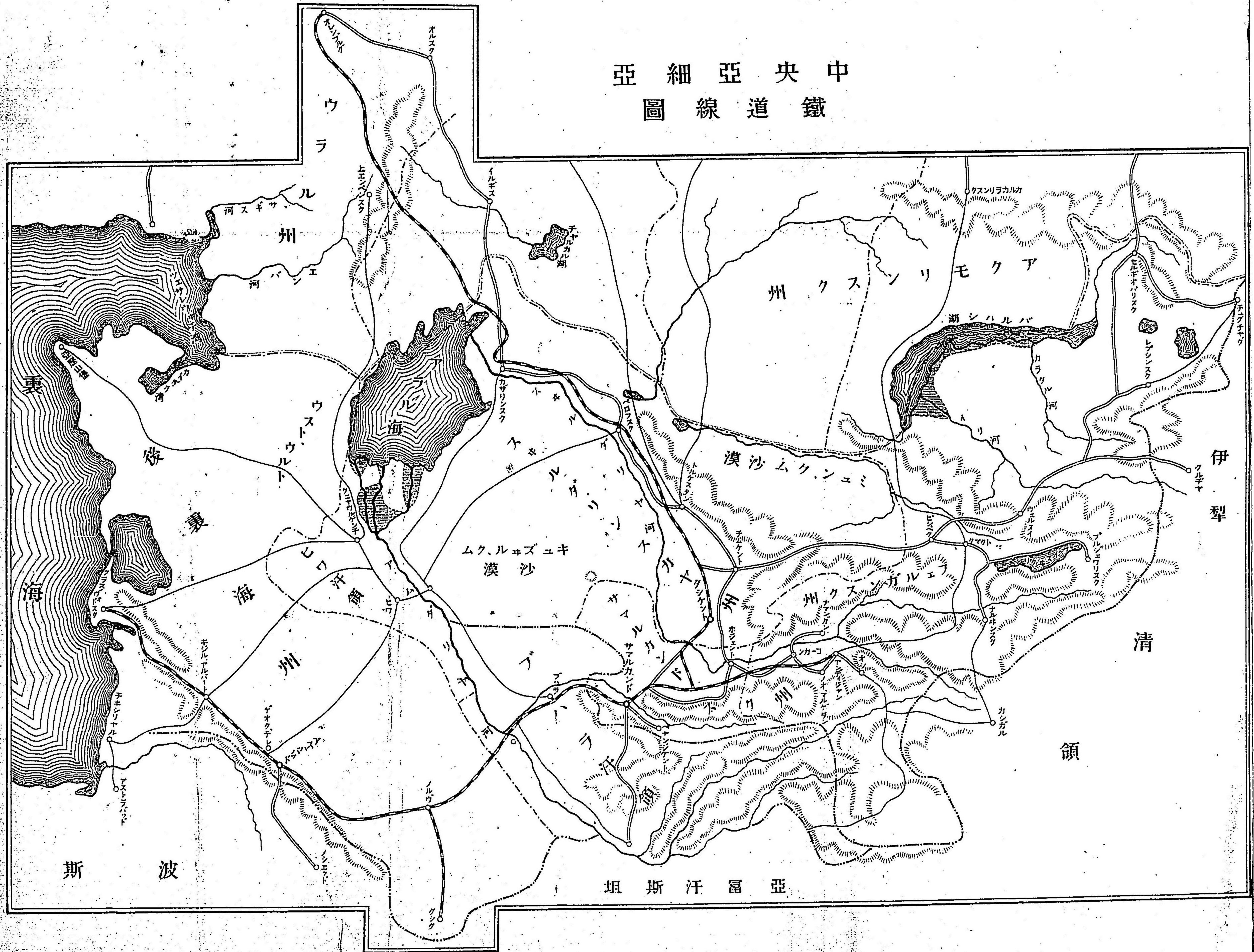
南北四萬哩終







中 央 亞 細 亞  
鐵 道 線 圖









明治四十四年六月十日印刷  
明治四十四年六月十一日發行

(南北四萬哩)

定價金壹圓



著者兼  
發行者

大庭景秋

東京市赤坂區青山南町六丁目四番地

印刷者

荻原勝次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所

博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所

東京市四谷區愛住四町  
振替東京壹八四四

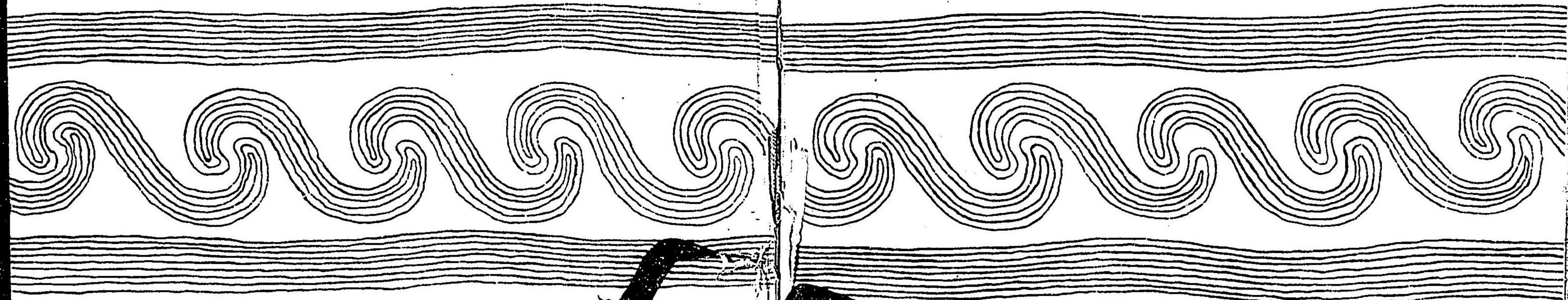
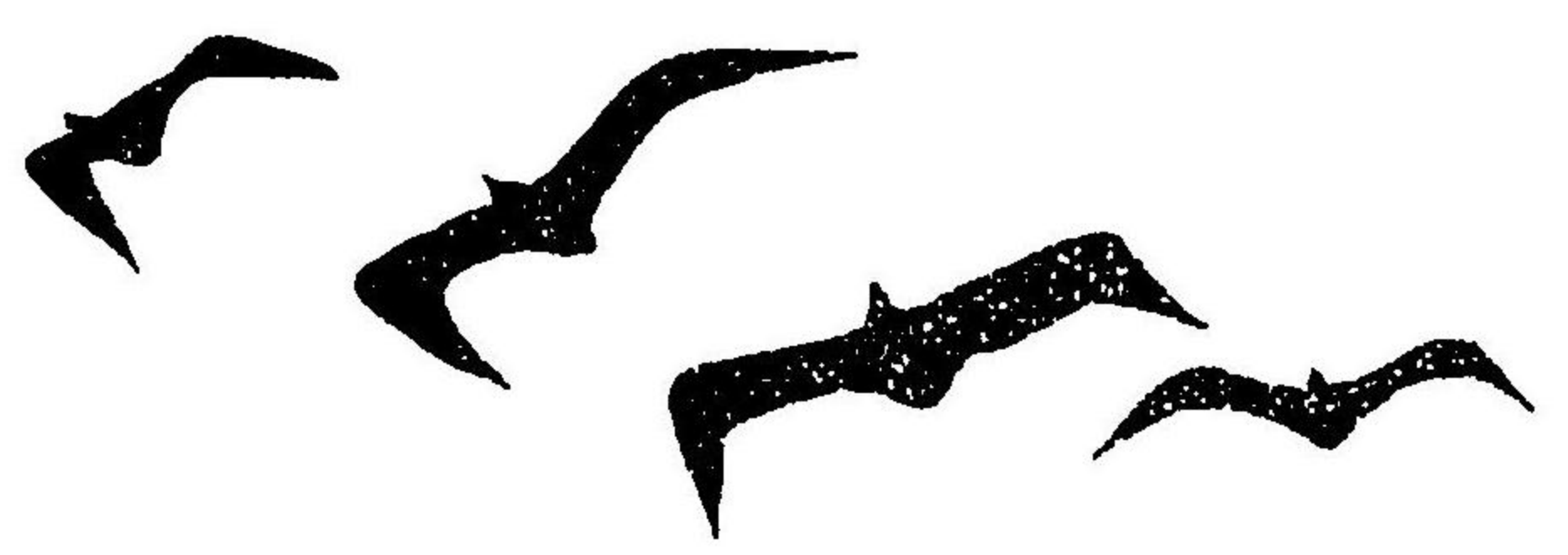
政教社





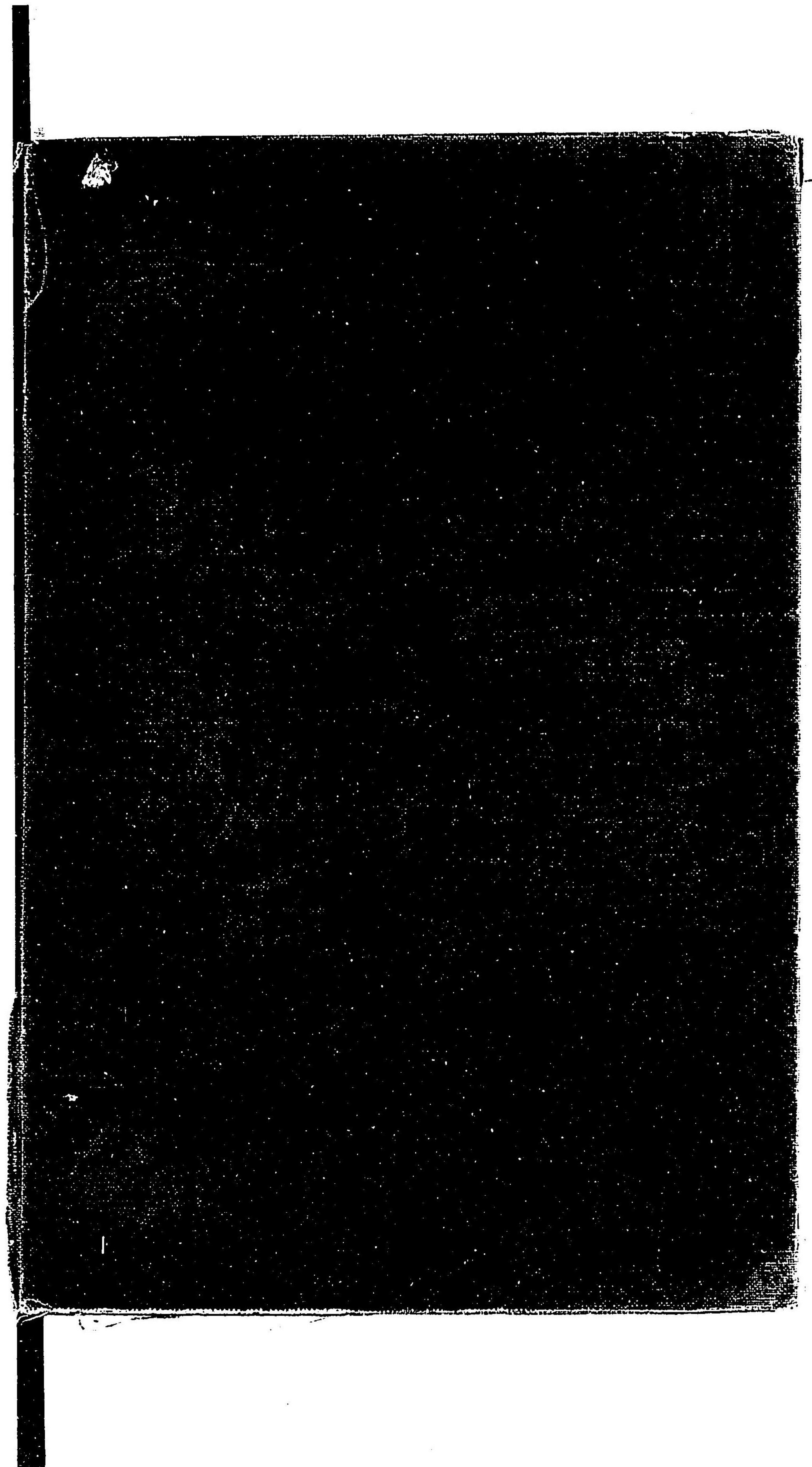


384  
78



4







334  
84



022201-000-1

334-84

南北四万哩

大庭 桐公(景秋) / 著

M44

ADA-0637

